

転生したこの男、龍で、剣士で、仮面ライダー

ナハト02

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガス爆発で死んでしまった嵐山龍深。

変な声が聞こえたと思ったら、異世界に転生していた。

そこで出会った1匹のスライムと一匹の竜と友達になり。

その世界で楽しく暮らすために、時には笑い、時には戦い、第二の人生を謳歌する。

目次

転生、そして友達	1
外へ、そして出会い	25
戦い、そして別れ道	52
素材探しと開発、そして新しい仲間	88
ドワーフの国、裁判	113
リムルとリアル 運命の出会い	136
変身！ レジエンドワンダーコンボ！	167
共に歩む想い	191
大鬼族の姉妹	202
大鬼族の襲撃	218

転生、そして友達

西暦2021年

元号は令和3年

俺は嵐山龍深（アラシヤマタツミ）。

なんて事のない、ごく普通の人間で本屋の店員。

まあ、人より少し特撮が好きなお男である。

その中でも特に好きなのは、仮面ライダーである。

龍深

「……ふう、平和だな……」

世界的に見れば、未だに小さな争いは絶えないが、ここ日本は平和だろうな。

まあ、何年か前に通り魔に刺されて死亡した人がいて、ニュースで放送していた。

後輩たちと食事に行く途中だったとか。

龍深

「……今日はこいつを買ってラッキーだったな。」

俺は今日、家電量販店に来ていた。

そこのおもちゃ売り場に来ていたのだ。

なぜそこに居たのかと言うと、最近販売された仮面ライダーに関するおもちゃを買いに来たのだ。

大の大人がそんなものを買ったのか？

そう思う奴もいるだろう、だが俺は、『好きなものは好き』と言える人間である。

そして今日買ったものとは、『DX刃王剣クロスセイバー』である。

『仮面ライダーセイバー』の最終フォーム『仮面ライダークロスセイバー』の変身に使う聖剣である。

一ヶ月ほど前に発売が始まったのだが、今日まで買えずにいたのだ。

早く『ソードライダー』と組み合わせさせて色々試したい。

今俺は飲食店街を歩いている。

ここを歩けば、俺が暮らしているアパートまでもう少しだ。
ピシッ！

龍深

「うん？」

ちようど焼肉屋の前と通りがかった時

龍深

「……………」

一瞬何か光ったような感じがした。

次に体が横に吹き飛ぶような感覚。

耳がキーンとなり、音が聞こえない。

かろうじて目だけが開くことができた。

龍深

「……………」

目の前には、黒焦げになり所々燃えている光景だった。

どうやら店のガス爆発に巻き込まれたようだ。

龍深

（熱い……痛い……破片が突き刺さっているのか？）

確認しました

スキル・対熱耐性を獲得……成功しました。

スキル・痛覚耐性を獲得……成功しました。

スキル・刺突耐性を獲得……成功しました。

龍深

（爆発に巻き込まれるとか……ないわ。）

確認しました

スキル・爆発耐性を獲得……成功しました。

龍深

（……なんか……今度は寒くなってきた？）

確認しました

スキル・対寒耐性を獲得……成功しました。

確認しました

スキル、対熱耐性と対寒耐性を獲得したことにより、統合進化が発

生。

EXスキル・熱変動耐性へと統合進化しました。

龍深

(・・・俺・・・もしかして、死ぬのか?)

(まだ・・・クロスセイバーを使っていないのに・・・)

確認しました

個体名、嵐山龍深の記憶を検索し、『刃王剣クロスセイバー』の製造に挑戦・・・失敗しました。

代行措置として、十一本の聖剣の製造に挑戦・・・成功しました。

確認しました

火炎剣烈火・水勢剣流水・雷鳴剣黄雷

土豪剣激土・風双剣翠風・音銃剣錫音

闇黒剣月闇・光剛剣最光・煙叡剣狼煙

時国剣界時・無銘剣虚無を獲得しました。

それに伴い、UQスキル・聖剣者^{セイバー}を獲得・・・成功しました。

龍深

(さつきから何だ? この声・・・まあいいか・・・死ぬんなら色々考えてみるか。)

(聖剣が使えたら・・・十一本も持ち運ぶなんて無理だろうし・・・何か・・・収納できるところが欲しいな。)

確認しました

EXスキル・無限収納を獲得・・・成功しました。

龍深

(ああ・・・でも、いきなり聖剣を使ったら負担がかかるだろうし・・・頑丈な体が欲しいな、例えば・・・龍人とか・・・)

確認しました

個体名・嵐山龍深の記憶より、種族・龍人に関する記憶を検索・・・成功しました。

続いて、個体名・嵐山龍深の種族を人族から龍人族に再構築します・・・成功しました。

確認しました

検索した記憶より、龍人族の固有スキルの獲得に挑戦………
成功しました。

スキル・自己再生を獲得………成功しました。

スキル・パリングを獲得………成功しました。

スキル・ブロックを獲得………成功しました。

スキル・イバイドを獲得………成功しました。

EXスキル・巨大体躯を獲得………成功しました。

EXスキル・龍鱗守護を獲得………成功しました。

EXスキル・龍活性を獲得………成功しました。

EXスキル・龍弱体を獲得………成功しました。

EXスキル・強制異常を獲得………成功しました。

EXスキル・心核穿ちを獲得………成功しました。

EXスキル・龍特攻防御を獲得………成功しました。

EXスキル・虹の毒を獲得………成功しました。

UQスキル・龍歌覚醒ロアを獲得………成功しました。

UQスキル・龍瞳ドラゴン・アイを獲得………成功しました。

確認しました

種族が龍人になった事により、EXスキル・聖剣者と共鳴、共鳴進化が発生。
個体名・嵐山龍深の種族は『龍人』から『聖龍』への進化を開始………

成功しました。
基礎能力値が上昇しました。

新たなスキルを獲得しました。

UQスキル・極光者ヒカリアルモを獲得しました。

確認しました

統合進化が発生しました。

スキル・パリング、ブロック、イバイドがUQスキル・至高シールド・オブ・シュプリームの盾に統合進化しました。

EXスキル・巨大体躯と龍鱗守護がUQスキル・巨神体躯に統合進化しました。

EXスキル・龍活性と龍弱体がUQスキル・龍支配に統合進化しました。

UQスキル・巨神体躯とEXスキル・龍特攻防御とスキル・爆発耐性が統合進化に挑戦・・・失敗しました。

龍深

(でも・・・剣だけあってもブックがないと・・・)
確認しました

個体名・嵐山龍深の記憶より検索、ワンダーライドブックの製造に挑戦・・・一部の製造に成功しました。

ブレイブドラゴン・ライオン戦記

ランプドアランジーナ・玄武神話

猿飛忍者伝・ヘンゼルナッツとグレーテル

ジャアクトドラゴン・金の武器 銀の武器

昆虫大百科・オーシャンヒストリー

エターナルフェニックス

A NEW LEGEND クウガ・金色龍のアギト

龍騎 IN ミラーワールド・ファイズ進化人類史

昆虫遊戯ブレイド・音撃伝響鬼

高速カブト語録・電王童話全集

俺様はキバである・デイケイド世界旅行記

ダブル探偵日誌・OOOアニマルコンボ録

2011フォーゼオデッセイ

希望の竜使いウィザード

戦国鎧武絵巻・ドライブ警察24時

ゴースト偉人録・エグゼイド医療日誌

パンドラビットのビルド・ジオウ降臨歴の製造に成功しました。

特殊なライドブックとして、ワンダーワールドブックが製造されました。

その他のブックは、代行措置としてUQスキル・不思議な仮面の書を獲得・・・成功しました。

これに伴い、時間が経過すると共に新たなワンダーライドブックが

製造されます。

龍深

(もし生まれ変われるなら・・・隣に誰かいて欲しいな・・・)
(友達とかできたら・・・大事にしないと・・・)

確認しました

UQスキル・相棒(アユムモ)の獲得に挑戦・・・成功しました。

EXスキル・絆の架け橋を獲得・・・成功しました。

龍深

(ああ・・・なんかもう・・・本当に・・・ヤバいな・・・)
(あ・・・)

龍深

(・・・あれ？俺・・・どうなったんだ？)

俺はたしか、飲食店のガス爆発に巻き込まれて死んだ・・・はず？
なのに今は

龍深

(・・・うん、意識はハッキリしているな。)
(手は・・・ある。足は・・・ある。体は？どこか痛いところは

?)

あれだけの爆発だったのに、手足や体のどこにも痛みがない。治療されてかなりの時間が経過しているということだろうか？

龍深

(・・・いや、待てよ・・・この手や顔に感じるのは・・・石?)
冷たい感触が伝わってくる。

妙にザラザラした感じから、俺は石、または石畳の上にうつ伏せで倒れているようだ。

・・・ということ、ここは病院とかじゃない？

カサカサ

龍深

(うん?・・・何だこれ?)

手を動かすと、カサカサというか、サラサラした感触がある。

龍深

スンスン(いい香りだな。清涼感のある匂いだ。)

鼻で呼吸をすると、顔の近くにいい香りが漂ってくる。

これらの事から、手に感じる感触の正体は花だろうか。

重たい目を開けてみる。

龍深

(・・・おお! 見えてきたぞ。)

(・・・緑の葉に、白い花・・・やっぱりか。)

だが、こんな花は見たことがない。

一体なんて花だろうか？

そうやって目の前の花を凝視していたら、目の前に

『ヒポクテ草』

・濃い魔素が充満している場所に生えることで、魔素の影響を受けた草。

成分を抽出することで、回復薬を生成することができる。

と、いきなり表示された。

龍深

「・・・は?」

(今の何だ？ ヒポクテ草？)

そんな草聞いたことがない。

それに回復薬？ 魔素？

何だそれ？

色々疑問に思っていると、体に力が入ってきた。

この分なら起き上がれそうだ。

未だに気だるさが残った自分の体を起こすと、周囲の景色を確認した。

辺りは暗いが、所々に青く光る鉱石のおかげで周囲の状況は分かった。

どうやらここは洞窟か何かのようだ。

お誂え向きに、目の前に窪みがあり、その中には水が溜まっていた。

そこまで行って自分の姿を水面の映してみた。

龍深

「……………誰？」

そこには、よく知った自分の顔ではなく別人の顔があった。

髪は青みがかった黒色で、瞳は赤く瞳孔は縦長になり、耳は先の方が若干尖っている。

だが、極め付けは頭に後ろに向かって生えた二本の黒い角だ。

龍深

「どうなってるんだ？ ……そう言えば意識が薄れ始めた時、声が聞こえたような？」

「体を再構築するとか……………」

前世の俺の面影はかけらもない。

前世の俺は、お世辞にもイケメンと言える人種じゃなかった。控えめに言ってフツメンだと思う。

それが今の俺の顔立ちは、イケメンと言っても過言ではない。

次いで体を見てみた。

着ている服は、『仮面ライダーセイバー』に登場する、尾上 亮が着ていた服とコートだった。

腰にはソードオブロゴスバックルが巻かれておりブックホルダー

と必冊ホルダーが付いている。

服の上からでも分かるくらいには、鍛えられた体になっている。

前世では、多少の筋トレはしていたけどここまでガッチリしてなかった。

龍深

「そう言えば、バックルに必冊ホルダーがあるなら聖剣もあつたりするの？」

???

《解 EXスキル・無限収納の内部に保管されています。》

龍深

「?! だ・・・誰?!」

???

《解 貴方が持つUQスキル・相棒の効果です。》

《能力が定着したため・反応を速やかに行う事が可能になりました。》

龍深

「相棒・・・スキルって能力のことだよな。」

「無限収納って？」

相棒

《解 無限収納とは・収納する物の大きさ種類関係なくあらゆるものを収納するスキルです。》

《さらに無限収納と・貴方の持つUQスキル・龍瞳の効果と同期させることにより・解析鑑定を行い・無限収納内で精錬・生成が行えます。》

《解析できない有害なものを隔離することもできます。》

龍深

「え？ 俺無限収納以外にもまだスキルを持つてるの？」

相棒曰く、俺は現在20のスキルを持っているようだ。

内訳はこんな感じだ。

スキル

- ・ 痛覚耐性
- ・ 刺突耐性
- ・ 爆発耐性
- ・ 自己再生

EXスキル

- ・熱変動耐性
- ・虹の毒
- ・無限収納
- ・強制異常
- ・心核穿ち
- ・絆の架け橋
- ・龍特攻防御

UQスキル

- ・聖剣者
- ・龍歌覚醒
- ・龍瞳
- ・巨神体躯
- ・龍支配
- ・至高の盾
- ・不思議な仮面の書
- ・相棒
- ・極光者

ただのスキルだけではなく、通常よりも能力・威力共に高性能なスキルであるEXスキル。

さらにEXスキルよりもさらに高性能で、唯一無二とも言えるUQスキル。

そんな能力を合計20個も獲得している俺って、結構すごいんじゃないだろうか？

そんなことを考えていると、目の前から水の音がした。

龍深

「うん？」

顔を上げて音のした方を見ると、何か丸いものがものすごい勢いでこっちに突っ込んで来る。

・・・あれ？ この位置ヤバくね？

龍深

「おいおいおいおい?!?!」

「hey stop! hey stop! hey stop!」

自分でも分かるくらいテンパっている。

そして案の定、その丸い物体は俺目掛けて突っ込んで来た。

ドシャ!

龍深

「ぐへええええええええ!!」

見事に俺の腹にクリーンヒットした。

その勢いのままに、俺と丸い物体は回転しながら吹き飛んだ。

途中で何か壁みたいな物にぶつかり、ようやく止まった。

龍深

「いってて……うん？ ……あれ？」

あんなに物凄い勢いで吹き飛び、壁にぶつかったのにあんまり痛くないな。

相棒

《解 スキル・痛覚耐性の効果により・痛みが緩和されました。》

《身体損傷率は・1%未満です。》

《自己再生が発動します。》

なるほど、痛覚耐性のおかげか。

頬の辺りに微かに擦り傷みたいなのがあったが、スキル・自己再生のおかげですぐに治った。

俺の腕の中には、例の丸い物体がいた。

よく見るとこいつは……

龍深

「え？ ……スライム？」

透明な青い体。

プニプニと、弾力がある。

無駄のない流れるような、流線型。

ゲームや漫画でも、雑魚モンスターと名高い、あのスライムか？

まあ、実際にスライムがいたらかなりの強敵なんだけどな。

まず物理攻撃が効かないし、顔に張り付かれて口や鼻を塞がれたら窒息死するし、捕食されたら内側で溶かされてお陀仏だらな。

スライム

プルプル ギュル ギュル

だが、こうやって見るとなかなか愛くるしいな。

感触は……あれだ、冷んやりしたビースクツションに近いか？

それに、今こうやって抱きかかえているが、俺を捕食したりする気配がない。

何だか、戸惑っているように見える。

???

『聞こえるか？ 小さき者たちよ。』

龍深・スライム

「?!」

突然、どこからともなく声が聞こえた。

だがこの感じ、耳で声を聞いている感じじゃない。

まるで頭に直接言葉をねじ込まれているような？

???

『おい、返事をせよ。』

龍深

「ええ〜つと、……………!!!」

スライム

プルプルプル!!

周りをよくみると、確かに目の前にそれが居た。

壁かと思っていたが違った。

???

『ほお、我をハゲ呼ばわりとは、いい度胸ではなか。』

龍深

「いつ!?!」

(いやいや、俺そんなこと言っていないけど。)

???

『うん？ いや、お前ではない。』

『そっちのスライムだ。』

龍深

「え？ 通じた?!」

どうやら心の中で思ったことが、目の前にいるこの存在に通じたらしい。

やっぱり直接会話をしているのではなく、テレパシーや念話みたいなものか？

???

『久方ぶりの客人だと思って下手に出ていれば、どうやら死にたいよ

うだな。』

スライム

グニグニ ビチビチ

何となく、謝っている感じがするスライム君。

体を必死に動かして、まるで頭を下げるような仕草をしている。

???

『クアアアアハハハハハハハハハハ!!』

龍深

「いゝっ!!」

ただ笑っただけでこの衝撃。

至近距離でスピーカーで大音量で喋っているようだ。

???

『私の姿を見ての発言かと思っただが、貴様、目が見えぬのか?』

『よし、見えるようにしてやろう。』

龍深

「え?」

確かにこのスライムには目も口もない。

いったいそんな状態のやつにどうやって?

???

『ただし、条件があるがどうする?』

龍深

「条件?」

???

『簡単だ。 見える様になったからと言って我に怯えるな。』

『そして、また話をしに来い。』

『それだけだ、どうだ悪い話ではあるまい?』

何だ?

そんなことでもいいのか?

それぐらいならお安い御用だが、スライムくんは?

スライム

グニグニ

まるで頷く様な仕草だ。

???

『うむ。では、『魔力感知』と言うスキルがあるのだが、使えるか?』

龍深

「いえ、使えません。」

???

『ふむ。周囲の『魔素』を感知するスキルだ。』

龍深

「魔素?」

相棒

《解 魔素とは・この世界に満ちるエネルギー・魔物にとっては生命の元になる物です。》

つまり、生命エネルギーみたいなものか?

それを感知する・・・

漫画やアニメなら、周囲に漂っているそれを感じ取ることで、魔法とかを発動したりする描写があるが。

龍深

(試してみるか。)

目を瞑り、集中してみる。

感じは、自分の体をこの世界に広げる様な感じで。

すると、虹色の風みたいな物が、目を閉じていても見える様になった。

龍深

(これが魔素か?)

相棒

《告 EXスキル・魔力感知を獲得しました。》

龍深

(え?! こんなアツサリ?)

相棒

《警告 魔力感知を発動することにより・膨大な情報が流れ込む危険性があります。》

《情報の管理のため・『相棒』と同期させることを推奨します。》

情報過多で俺の脳だけじゃ処理仕切れないと言うことだろうか？

そう言うのも漫画とかにあるよな。

その結果頭痛に襲われるオチ。

相棒

《魔力感知を使用しますか？》

龍深

「Yes。」

すると今まで薄暗かった洞窟の中が、まるで昼間のようにはっきりと見える様になった。

周囲の状況が事細く知る事ができた。

相棒の言う通り、この情報量を俺の頭一つで処理しようと思ったら、頭がパンクするだろうな。

スライム

「お？ おお!! 見える！ 見えるぞ！」

龍深

「え？」

スライム

「あ！ そうだ！」

急にそばにいたスライムの声が聞こえる様になった。

さっきまではそんな事も無かったのに。

何でだ？

そう思っていたら、そばにあった水溜りまで跳ねていった。

相棒

《解 意思の込められた言葉は・魔力感知の影響で・理解できる言葉に変換されます。》

龍深

(そうなのか？ 便利だな魔力感知。)

相棒

《逆に思念を乗せて発声すれば・会話も可能です。》

まるでスマホの自動翻訳機みたいだ。

スライム

「・・・やっぱ俺・・・スライムだ。」

龍深

「やあ、スライム君。」

スライム

「うん？ おお！もしかして俺があの時ぶつかった人か？」

龍深

「ああ、水切り石みたいに飛んできたから、ビックリして回避できなかったけど。」

スライム

「あく、ごめん。」

「あの時『水圧推進』っていうスキルを獲得したんだけど、うまくスピードを落とせなくて。」

龍深

「いや、大丈夫だよ。」

「気にしないでくれ。」

???

『どうだ？ できたか？』

スライム

「はい！ できました。」

「有難うございます。」

「・・・・・・・・！！！！」

そう言つて振り返つたスライム君が見たのは、何と！
???

『では改めて自己紹介をしよう。』

『我は暴風竜・ヴェルドラ。』

『この世に4体のみ存在する『竜種』の一体である。』

『クアーーーーハハハハ!!』

スライム

(竜じゃねーかあああああ!!!)

それから暫くして

ヴェルドラ

「何と！ お前達、異世界から転生してきたのか。」

スライム

「そうなんですよ。」

龍深

「よく分からないけど、そうみたいですな。」

最初こそビビったが、この竜、思っていた以上に親切で話しやすかった。

どうやら俺とこのスライムくん、転生前の名前は三上 悟（ミカミ サトル）と言うようだ。

彼は俺と同じ日本人のようだ。

俺達はとても稀な生まれ方をしたようだ。

ヴェルドラ曰く、異世界からこの世界に呼ばれる人間はいるが、異世界からの転生者は初めて見たらしい。

そういった者は、世界を渡る際に望んだ能力を獲得する。

つまり、俺が持っている数々のスキルや聖剣は、俺が望んだから手

に入ったと言うことだ。

それに、もしかしたら俺達以外の日本人が居るかも・・・

スライム

「ちよつとその異世界人を探して、会ってみようかな。」

龍深

「そうだな。」

ヴェルドラ

「なんだ？ もう行ってしまうのか？」☒？

スライム・龍深

(ジョンボリしてる!!)

露骨に寂しそうに俯いてしまった。

この竜、見た目以上に人間臭いな。

スライム

「えくつと、もうちよつと此処に居ようかな？」

龍深

「そ・・・そうだな。 急ぎの用もないし。」

ヴェルドラ

「！ そうかそうか！ ゆっくりしていくが良いぞ。」

スライム・龍深

(このオッサンは・・・)

それから話が弾み、ヴェルドラがなぜこの洞窟にいるのかを語ってくれた。

それは、今から300年前にうっかり街一つを破壊したことから始まった。

ヴェルドラの前に『勇者』を名乗る人物が現れた。

目の前にいるヴェルドラはかなり強そうなのに、何とその勇者に封印されてしまったのだ。

その勇者は強く、『UQスキル・絶対切断』で圧倒し、『UQスキル・無限牢獄』で封印したのだ。

それ以来、300年の間ずっとこの洞窟の中で、一人でいたらしい。スライム

「・・・もしや、見惚れていて負けたんじゃ・・・」
ヴェルドラ

「!! ば・・・馬鹿者! そんな訳が無かろう!!」
「・・・まあ、あの勇者はやや小柄で細身で、白い肌に黒い髪を一つに纏めていて、深紅の小さな唇・・・」

龍深

(ガッツリ見てるじゃん。)

スライム

(絶対見惚れてたろ。)

なんかもう、この竜。

見た目は凄いいけど、怖いどころか親しみ易いな。

寂しがり屋だし。

自分が負けた話を楽しそうに語るし。

・・・多分この竜、人間が好きだな。

それにしても、300年もずっとこの洞窟で一人って、どんだけだ。
まあ、竜みたいな長命種から見れば、300年なんてアツと言う間に過ぎていく時間だろうけど、この竜よく心を病んだりしなかったな。

スライム

「・・・よし。じゃあ、俺と・・・いや、俺達と友達にならないか?」

龍深

「お! いいね。これも何かの縁だし。」

ヴェルドラ

「何! 生まれたてのスライムと龍の分際で、この暴風竜・ヴェルドラと友達だと!?!」

スライム

「い・・・嫌なら良いんだけど・・・」

ヴェルドラ

「馬鹿者! 誰も嫌だとは言っておらぬではないか!!」

龍深

「え、そう。じゃあ、どうする?」

ヴェルドラ

「そ．．．そうであるな．．．」

そうやって、ウンウンと暫く考えた結果。

ヴェルドラ

「．．．どうしても言うのなら．．．考えてやっても．．．良いんだからね。」／／／／／

スライム・龍深

(ツンデレかい!!)

おいおい、可愛い女の子ならまだしも竜がツンデレって．．．
しかもヴェルドラって、話し方から察するに男だろ？

男のツンデレなんて、男には．．．

スライム

「うん。 どうしてもだ！」

「嫌なら絶交。 二度とここには来ない！」クルツ

龍深

「そう言う事！」クルツ

俺とスライム君がそう言って後ろを向くと、少し慌てた様子で
ヴェルドラ

「ちよっ!! し．．．仕方ないであるな、友達になつてやる。」

「感謝せよ！」

スライム

「全く．．．素直じゃないね。」

龍深

「じゃあ、今後ともよろしくな。」

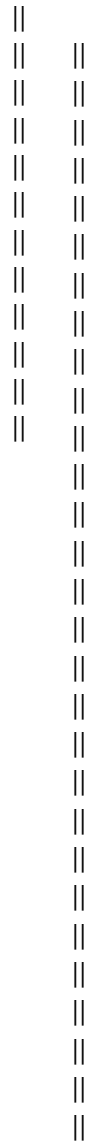
ヴェルドラ

「あ．．．ああ！」

そう言つて俺は拳を突き出し、スライム君は体を伸ばして、ヴェル
ドラは左手の爪で、『トン！』っと軽く触れた。

なんて事のない、ごく普通の本屋としての人生を歩んでいた俺・嵐
山龍深は、ガス爆発に巻き込まれて死に、異世界に転生し、聖龍に生
まれ変わった。

洞窟で目覚め、そこで出会った1匹のスライムと1匹の竜と友達になるのだった。



○オリ主

名前：無し

前世の名前：嵐山龍深

種族：聖龍

好きな事：読書（小説・漫画）

特撮鑑賞（主に仮面ライダー）

嫌いな物：生のトマト

理不尽な暴力

所持スキル

○UQスキル

・龍歌覚醒ロアかくせい

発動すると、基礎能力値、スキルの性能が上昇し、思考能力が加

速する

・龍瞳ドラゴンアイ

解析・鑑定の能力があり、対象物の精錬・生成方法の情報を得る

・巨神体軀きよしんたいく

物理攻撃耐性・魔法攻撃耐性を持ち、全身、又は任意の部分を龍

の鱗で覆い各種防御力を上昇させる

・龍支配りゆうしはい

自身以外の『龍』の因子を持つ味方の各種基礎能力値を強化する

自身以外の『龍』又は『竜』の因子を持つ敵の各種基礎能力値を

弱体化する

・至高の盾シールド・オブ・シュプリム

物理攻撃・状態異常・遠隔攻撃等（魔法含む）を確率で無効化する

る

・不思議な仮面の書

時間経過と共に、未所持のワンダーライドブックを製造する
基本的に未所持のライドブックが優先される。

既に所持しているライドブックも低い確率で製造される。

・相棒^{アユムモノ}

世界の言葉の権能の一部を流用し、持ち主の疑問や質問に応答する

他にも思考加速・スキル同期・並列演算・詠唱破棄・森羅万象の
スキルを持つ

・思考加速：通常の1000倍に知覚速度を上昇させる

・スキル同期：所持しているスキル同士をリンクさせ、同時に使
用する

・並列演算：解析したい事象を思考と切り離して演算を行う

・詠唱破棄：魔法等を行使する際、呪文の詠唱を必要としない

・森羅万象：この世界の、隠蔽されていない事象の全てを網羅す
る

・聖剣者^{セイバー}

11本の聖剣と各種ワンダーライドブックを使用できる

・極光者^{ヒカリアルモノ}

状態異常耐性と自然影響耐性を得る。

周囲の光を吸収して傷の治癒ができる。

自分で自分を治癒することはできない。

○EXスキル

・熱変動耐性

熱さと寒さに対して耐性を得る

・虹の毒

毒・呪い・麻痺・攻撃力低下・防御力低下・速度低下・意識レベ
ル低下の状態異常を与える

・強制異常

状態異常の耐性や治癒の効果を見逃して状態異常を与え続ける

魅了・スキル封印・吸血は対象外

・無限収納

収納する物の大きさ種類関係なくあらゆるものを収納する

・心核穿ち

実態を持たない者、体が不定形な者に対してダメージを与える

・龍特攻防御

『龍』に該当する種族に対する特効攻撃を半減する

・絆の架け橋

絆や縁を結んだ者との間に魂の繋がりを得る

・魔力感知

周囲の魔素を感知し、周囲の状況を認識する事ができる

意思が込められた音波や魔力を理解できる言葉へ自動的に変換する

思念をのせて音波や魔力を発すると、会話も可能

○Cスキル（コモンスキル）

・痛覚耐性

痛みに対して耐性を得る

・刺突耐性

鋭利な刃物で刺されても傷付きにくくなる

・爆発耐性

爆発に対して耐性を得る

・自己再生

体の欠損した箇所、傷ついた箇所を自動的に修復する

容姿：全体的なイメージは Venus Blood—RAGNARK
—の主人公ロキ

角の生え方は『スライム倒して300年、知らないうちにレベルMAXになってました』に登場する、ライカやフラットルテのイメージ

瞳は赤く、瞳孔は縦長。

スキル・龍瞳を使うと、瞳に七芒星が浮かび青く光る、そのせいで瞳の色が紫に見える。

七芒星には『不可能を可能にする』という意味がある。

服装は仮面ライダーセイバーに登場する『尾上 亮』の服と

コートとブーツ。

腰にソードオブロゴスバックルと必冊ホルダーとブックホルダーが左右についている

聖剣は無限収納の中にあるが、聖剣ソードライバーは無い。

覇剣ブレードライバー及び邪剣カリバードライバー及び最光ドライバーは所持しているが、無限収納内で封印されており、使えない。

ドゥームズドライバーは未所持。

外へ、そして出会い

なんて事のない、ごく普通の人生を生きていた本屋の店員であるこの俺、嵐山アラシヤマ 龍深タツミ。

不運なことからガス爆発に巻き込まれ、その時に死に、なんと異世界で『龍』に転生する。

そこで出会ったのは、俺と同じ異世界の転生者のスライムこと『三上 悟』ミカミ サトル。

そして、一匹の竜『暴風竜 ヴエルドラ』との出会いが待っていた。俺達三人？ は友達になるのだった。

スライム

「それで、どうする?」

ヴェルドラ

「うん?」

龍深

「勇者がかけた『無限牢獄』だよ。」

「友達が300年も封印されたままなんて、可哀想だ。」

スライム

「そうだな、なんとかして出してあげたいんだけど?」

ヴェルドラ

「……お前達!」

スライム・龍深

(そんなウルウルした目で見られても?!)

可愛い女の子ならまだしも、ドラゴンになんて。

まあ、助けてあげたいのも事実なので、なんとかしてあげたい。

ヴェルドラ

「脱出する方法があるのなら、有難いのだが……」

スライム

「うん……試してみるか。」

そう言つて、スライム君は無限牢獄に近づき、体の一部で触れてみる。

何をしているのだろうか？

相棒

《解 対象のスライムの持つUQスキル・『捕食者』クラウモノの発動を確認しました。》

《『捕食者』の能力で『無限牢獄』の捕食を試みたと思われます。》

龍深

「『捕食者』？」

相棒アユムモノの話だと、スライム君にはUQスキル・『捕食者』と言うスキルを持っているらしい。

それは対象が有機物・無機物問わず、体内に取り込む。

ただし、捕食対象に意識が存在する場合、抵抗されると成功率が下がってしまうらしい。

取り込んだ対象を解析鑑定をする。

これにより、制作可能なアイテムの創造が可能になる。

素材があればそれを使ってコピーを作ることができる。

捕食対象がスキル及び魔法なら、術式の解析に成功すると対象のスキル及び魔法を習得可能。

さらに捕食対象が生物だった場合、取り込んだ対象に『擬態』し同等の能力が使用可能になる。

ただし、対象の解析が成功したときに初めて『擬態』が可能になる。

『胃袋』と言うものがあり、捕食対象を収納することができる。

解析鑑定で制作された物質も保存可能で、『胃袋』の中は隔離された空間になり、時間が経過しない。

龍深

(……なんだそれ！ スライムが持っているいいスキルなのか？)

相棒の言っていることが正しければ、かなり強力なスキルだと思う。

しかし、そんなスキルでも『無限牢獄』の捕食はできないと言うところか。

ヴェルドラ

「・・・無理であろう。」

スライム

「ダメか。」

龍深

「・・・」

(なあ、相棒さん。俺にも何かできないか?)

相棒

《解 マスターの持つ『無銘剣虚無』むめいけんきよむであれば・『無限牢獄』を消滅させることが可能です。》

龍深

「マジか?!」

スライム・ヴェルドラ

「?!」

相棒

《ただし・『無銘剣虚無』の『全てを無にする』力により・『無限牢獄』だけでなく・暴風竜ヴェルドラも消滅してしまいます。》

《実行しますか?》

龍深

「て! アホかい!! できるかー!!」

スライム

「ど!? どうしたんだ?」

龍深

「いや、実は・・・」

二人に事情を説明すると、解除か可能だと言った時は喜んでいたが、もろとも消滅すると言った時「やめてくれ!!」、と言われた。

まあ、当たり前だな。

龍深

(もう少し穏便に済ませる方法はないか?)

相棒

《解 可能性としましては・『闇黒剣月闇』あんくくけんぐらやみの『空間切断』能力を使えば・可能かと思われませぬ。》

龍深

「お！ じゃあ、そっちでいくか。」

俺は、『無限収納』から『闇黒剣月闇』を取り出した。

ノコギリのような形状の刃と顔のようなエンブレムがついた、紫と金とガンメタという配色の剣である。

スライム

「おおー！ そんな剣を持ってたのか？」

龍深

「ああ、名前は『闇黒剣月闇』だ。」

スライム

「・・・なんか悪役が使うような名前の剣だな？」

実際仮面ライダーセイバーでは、登場当初はダークライダーとして登場したから、間違いではないかもしれない。

ヴェルドラ

「ふむ、それでどうするのだ？」

龍深

「この剣で『無限牢獄』を斬ってみるよ。」

ヴェルドラ

「何?! できるのか？」

龍深

「やってみないと分からないけどな。」

そうやって俺は、月闇を必冊ホルダーに納刀して、グリップについているトリガーを引いた。

『月闇居合!』『読後一閃!』

パイプオルガンのような音が鳴り響き、抜刀すると同時に頭身に紫のオーラが発生し、俺は剣を上から下へ振り下ろした。

すると、『無限牢獄』に縦に亀裂ができた。

ヴェルドラ

「おお!!」

スライム

「『無限牢獄』を斬った!」

確かに、月闇は『無限牢獄』の一部を斬り裂いた。
しかし、次の瞬間には修復されていた。
そう上手くは行かない、と言う事か。

スライム

「一瞬だけか。」

ヴェルドラ

「流石の我でも、あの一瞬で外に出るのは難しいな。」

だが何か方法があるはずだと、三人揃って頭を捻る。

暫くすると、スライム君がこう切り出した。

スライム

「・・・俺の胃袋に入る気はないか？」

龍深・ヴェルドラ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スライム

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

暫く沈黙が続いた。

龍深

「いや、それだと説明不足だ。」

「詳しく頼む。」

スライム

「お、おう。」

スライム君の話だと、『無限牢獄』の内側と外側、両方から解析すれば解除できるかも知れない。」と言っている。

スライム君には、俺のUQスキル『相棒』と似たスキル、『大賢者』エンチアルモフというスキルがあり外側からはこのスキルが解析を試みる。

そしてヴェルドラも、『龍瞳』の解析鑑定の結果、彼にはUQスキル『究明者』シリタガリというスキルがあり、内部からはこのスキルで解析を試みる。

スライム君の『胃袋』の中は隔離された空間になるので、魔素が漏れ出て消滅する心配もない。

これを聞いたヴェルドラは・・・

ヴェルドラ

「・・・ククク・・・クハハハ・・・クハハハハハハハハハ!!!」

龍深・スライム

「「「「「「!!!」」」」」」

ヴェルドラ

「それは面白い！ 是非やってくれ!!」

「お前に、我の全てを委ねる!」

提案したのはスライム君なのだが、こうも簡単に快諾してくれるとは思っていなかった様で、少し戸惑っていた。

ヴェルドラはこう言った。

ヴェルドラ

「ここでお前達の帰りを待つより。」

「共に『無限牢獄』を破った方が面白そうだ!」

スライム

「・・・そうか。」

龍深

「一人じゃなく、皆んなでか・・・いいね。」

スライム

「ああ、そうだな。」

俺達にもこの世界に同郷の者が居るかどうか探したいし、いちいちこの洞窟?に戻ってくるのは大変だし、ヴェルドラが快諾してくれてよかった。

そして、スライム君が『捕食者』を発動しようとした時に、ヴェルドラが待ったをかけた。

何かと聞いてみると。

ヴェルドラ

「お前達に名を与えよう。」

「そして、お前達も我らの共通の名を考えよ。」

スライム

「? どういう事だ?」

ヴェルドラ曰く、自分達が同格だと言う事を魂に刻むためらしい。

それに、俺とスライム君は前世の名前はあっても、この世界での名前がないから、名を与えられる事で『名持ちの魔物』ネームドモンスターの仲間入りができるらしい。

確かに、名前がないと不便だもんな。

それにしても、共通の名か？

これは中々責任重大だな。

龍深

(暴風竜・・・暴風・・・嵐。)

(嵐は他の言葉で・・・なんだっけ?)

ストーム、サイクロン、ツイスター、トルネード？

色々あるがいまいちシツクリ来ない。

暫く考えていると。

龍深

(！テンペスト・・・これが良いんじゃないか。)

スライム

「なあ、思いついたか？」

龍深

「おう、一応な。」

スライム

「・・・それって『テ』から始まる五文字の言葉か？」

龍深

「・・・どうやら同じみたいだな。」

俺とスライム君は、タイミングを合わせて。

龍深・スライム

「テンペストはどうだ？」

これを聞いたヴェルドラの反応は？

ヴェルドラ

「何いいいいいい!!! テンペストだとおおおお!!!」

突然叫び出した。

駄目だったのだろうか？

ヴェルドラ

「素晴らしい響きだああああ!!!」

「今日から我は、ヴェルドラIIテンペストだああああああ!!!」

龍深・スライム

「気に入ってたのかよ!!」

全く、人さわがせな竜だ。

ヴェルドラ

「そして、まずスライムのお前には、『リムル』名を与えよう。」

「今日から、リムルIIテンペストを名乗るが良い。」

リムル

「リムルIIテンペスト!」

ヴェルドラ

「そして、龍のお前には、『リアル』の名を与えよう。」

「今日から、リアルIIテンペストを名乗るが良い。」

リアル

「リアルIIテンペスト!」

その時、俺の中で何かが変化した。

『リアルIIテンペスト』という名が、俺の魂に刻まれたのだ。

だが、それだけで終わることが無かった。

相棒

《告》 EXスキル・『絆の架け橋』の発動条件が整いました。》

《个体名・ヴェルドラIIテンペストと・リムルIIテンペストとの間に・魂の回廊が確立しました。》

《告》 个体名・リムルIIテンペストの『捕食者』の情報をもとに・UQスキル・『闇吸収』を獲得しました。》

《告》 个体名・ヴェルドラIIテンペストの『究明者』の情報を元に・UQスキル・『龍瞳』の解析鑑定のパフォーマンスが上昇しました。》

なんと新たに、UQスキル一つと、『龍瞳』の効果が増した。

これが俺のEXスキル・『絆の架け橋』の能力なのだろうか?

『絆の架け橋』の効果は曖昧な者だったが、『絆や縁を結ぶ』とは名前を付け合うことも含まれるのだろうか?

リムル

「うん？」

ヴェルドラ

「？ なんだ？」

リーアル

「？ どうした？」

リムル

「いや、今スキルを獲得した。」

ヴェルドラ

「我もだ。」

どうやら二人も新たにスキルを獲得したようだ。

聞いてみたところ、リムルはUQスキル・『水勢』、ヴェルドラはUQスキル・『光剛』というスキルだ。

名前を聞いた瞬間に、『もしかして？』と思った。

おそらくこの二人は、『水勢剣流水』と『光剛剣最光』が使える様になったのではないだろうか？

相棒

《告 魂の回廊を辿り・UQスキル『水勢』及びUQスキル『光剛』を解析・・・成功しました。》

相棒の解析の結果、どうやら2人共『水勢剣流水』と『光剛剣最光』が使えるようになった。

2人が使っていない場合に限り、俺も使えるようだが。

リムル

「じゃあ、これからは俺もリーアルが使っていたような剣が使えるのか？」

リーアル

「そうだけど、リムルはともかく、ヴェルドラは無理じゃないか？」

ヴェルドラ

「うむ。この巨体では掴むこともできないだろうな。」

ヴェルドラには悪いが、封印が解けるときに依代になる人間サイズの肉体があれば、聖剣が使えるようになるだろうな。

それまで我慢してもらえない。

そして、スキルの確認も終わったので、改めてリムルが『捕食者』を発動し、ヴェルドラを飲み込んだ。

リムルがヴェルドラのサイズにまで大きく広がった時は、「おお！」と驚いてしまった。

ついさつきまで普通に話していたのに、今は目の前にもうヴェルドラはいない。

消えて訳では無いのは分かっているが、やはり寂しいな。

相棒

《告 个体名リムルⅡテンペストのUQスキル・『大賢者』が・『無限牢獄』の解析を開始しました。》

《魂の回廊をたどり・UQスキル・『相棒』も・解析に加わることができます。》

《『無限牢獄』の解析を開始しますか？》

リアル

(もちろんYESだ。)

リムルの『大賢者』だけでなく、俺の『相棒』が加われば更に速く解析が進むだろう。

それまでに、ヴェルドラに聴かせてやれる面白おかしい話を、沢山用意しておかないとな。

そのためには。

リアル

「まずはこの洞窟を出ないとな。」

リムル

「そうだな。・・・とりあえず、歩くか。」

リアル

「おう。」

この日、天災級モンスター『暴風竜・ヴェルドラ』の消失が確認された。

これにより、この世界の各国がその原因を突き止めようと躍起になっっていた。

その原因が、一匹のスライムと龍だとは知らず。

世界がそんな騒ぎになっているとは知らず、俺とリムルはあれから数日、洞窟の中を彷徨っていた。

目につく草や鉱物を、リムルは『捕食者』で、俺は闇黒剣月闇を手にかけている時に使える『闇吸収』を使って『胃袋』と『無限収納』に貯めつつ、精錬・生成をしながら。

これにより、『ヒポクテ草』は回復薬『フルポーション完全回復薬』へ。

鉱石の『魔鉱石』は『魔鉱塊』にしながら。

その合間にリムルは、スキルの練習ついでに、スキル『水流移動』を獲得し、攻撃手段の『水刃』を獲得した。

それに伴い、スキルの統合進化が発生した。

『水圧推進』『水流移動』『水刃』が統合され、EXスキル『水操作』に統合進化したのだ。

俺はというと、リムルみたいに統合進化はないが、幾つかスキルを手に入れた。

この世界に『魔力』というのがあるのなら、その魔力を体に纏うことができないか試してみた。

試しに体全体に魔力を集中してみる、その状態で、足元にあった拳くらいの大きさの石を掴んで、力を込めてみたら、ボロボロに砕け散ってしまった。

これによりEXスキル『魔闘法』、及びEXスキル『魔力操作』を獲得した。

更に、その状態で更に足の裏に魔力を集中さ、思いつきり地面を駆けようとしたら、一步で5mの距離を一瞬で移動できた。

その際、うまく踏ん張れなくて、目の前の壁に突っ込んでしまった。これによりEXスキル『縮地法』を獲得した。

そんな感じで、スキルを獲得しつつ俺達はこの洞窟の出口を探して、彷徨い歩いていた。

そんな時、俺達は出会ったのだ。

『赤い糸で結ばれた運命の人』・・・ではなく。
リムル

「・・・ぎよええええええ!!!」

リアル

「おお！ デカイ蛇？」

俺達の前に現れたのは、黒い大きな蛇だった。

解析鑑定の結果、この蛇は『黒蛇』ブラック・サベントという魔物らしい。

俺達を威嚇し、逃すつもりはなさそうだ。

リムル

(おいおい、冗談じゃないぞ。)

(こんなおっかない・・・あれ？)

(意外と・・・怖くない？)

リアル

(ヴェルドラと比べれば・・・大したことないな。)

「どうするリムル？ 俺がやろうか？」

リムル

「いや、俺がやる！」

そう言っただけでリムルは飛び跳ねて、黒蛇の上空に飛び『水刃』を放った。

『水刃』一発で、黒蛇の頭は胴体と切断された。

リムルは、思っていた以上に『水刃』の切れ味がよかったことに驚いていた。

立ち去ろうとした時、リムルは黒蛇を『捕食者』で捕食した。

そのおかげで、リムルはスキル『熱源感知』と『毒霧吐息』を獲得し、黒蛇への擬態が可能になった。

その時、俺にも相棒から報告があった。

相棒

《告 『絆の架け橋』の効果により、個体名・リムルIIテンペストが獲得したスキル、『熱源感知』を獲得しました。》

リアル

(お!? 俺にもか。)

こうして、俺達は様々なスキルを獲得していった。

次に出会ったのは、背中に分厚い装甲を纏った、『アーマーサウルス甲殻トカゲ』という大きな蜥蜴だった。

こいつは、俺の聖剣『かえんけんれつか火炎剣烈火』の必冊ホルダーによる『読後一閃』で縦に斬り裂いてやった。

リムルが捕食すると、スキル・『身体装甲』を獲得した。

俺の場合は、『身体装甲』のスキルはUQスキル・『巨神体躯』に統合され、『巨神体躯』の物理・魔法防御力が上昇した。

次は『エビルムカデ』という巨大なムカデだった。

このムカデは、リムルが黒蛇に擬態し、『毒霧吐息』を吐いて溶かした。

見た目、かなりグロかった。

それでも、リムルがエビルムカデを捕食すると、リムルはスキル・『麻痺吐息』を獲得した。

残念ながら、俺は獲得できなかった。

リアル

(……種族的な問題か?)

他にも、『ブラックスパイダー黒蜘蛛』からは、俺とリムルはスキル・『粘糸』と『ジャイアントバット鋼糸』を獲得した。

『ジャイアントバット巨大蝙蝠』からは、リムルはスキル『吸血』と『超音波』し、俺は残念ながら、獲得出来なかった。

そしてリムルは、『超音波』のスキルを応用して、遂に声を出せるようになった。

リムル

「アー、アー、アメンボアカイナアイウエオ。」

「ワレワレハ、ウチユウジンデアル。」

リアル

「タベモノヲスベテ、ヨコセ！」

リムル

「うん? なんでも食べ物?」

リアル

「あー、ほら、スライム的に……な。」

そして遂に、俺達は見つけた。

リムル

「うん？」

リアル

「お！」

そこにあつたのは、大きな金属の扉だった。

長い間放置されていたのか、全体的に錆び付いている。

リムル

「もしかして、ここが出口か？」

リアル

「かもな。」

さてどうしたものか？

いつその事、聖剣でぶった斬るか？

そんなことを思っていると、不意に目の前の扉が開き出した。

開いた扉の隙間から光が差し込む。

リムル

ワクワク！

リアル

「・・・うん？」

その時俺は、扉の外に俺達以外の気配を感じた。

人数は三人だ。

リアル

「リムル！」 ガシッ

リムル

「うお?!」

俺はリムルを抱えて、近くの窪みに身を隠した。

扉が完全に開き、そこにいたのは。

盗賊風の男

「ふう、やっと開いたでやす。」

「鍵穴も錆び付いていて、ボロボロでやすよ。」

剣士風の男

「仕方ねえって、300年誰も入っていないんだろ？」

魔法使い風の女

「いきなり魔物に襲われたりしないですよね？」

「・・・まあ、いざという時は『強制離脱』^{エスケープ}使いますけど。」

初めて見る人間に、内心ドキドキしている。

格好から察するに、冒険者だろうか？

声をかけてみるべきだろうか？

リアル

(でも、俺は見た目は人間だけど、頭の角がな・・・)

俺の角を見て、襲い掛かられても嫌だしな。

ここは、見送るべきだろう。

盗賊風の男

「じゃあ、アツシの技術『^{アツ}隠密』を発動しやすよ。」

リムル・リアル

(隠密?)

盗賊風の男がそう言っつて、両手の拳を合わせると、彼らの姿が見えなくなった。

リムル・リアル

(おお!!)

俺たちが驚いていると、先ほど姿が見えなくなった三人が、洞窟の奥へと歩いていくのがわかった。

なぜ分かるかって？

足跡が残っているからさ！

リムル

「さっきの、『隠密』って言っつてたっけ？」

リアル

「あんなスキル・・・いや、技術っつて言っつてたっけ？」

リムル

「そんなのまで有るんだな。」

「・・・けしからん奴だ！ 後で友達になる必要があるな。」

リアル

「・・・リムル、さっきの技を何に使っつつもりだ？」

リムル

「……聞くだけ野暮だろ？」

リアル

「……まあ、いいけど。」

そんなことを言い合っている内に、冒険者たちは更に奥の方へと進んでいき、もうここからだと思える足跡を確認することができなくなった。チャンスだと思いき、俺とリムルは扉をくぐり、洞窟の外に出るのだった。

唯一、三人の冒険者のうちの1人、魔法使い風の女だけが、俺達の存在に微かに気づいていた。

魔法使い風の女

(……さつき魔物の気配がしたけど……気のせいかな?)

洞窟を出た俺達は、久しぶりの外の空気を堪能していた。

これまでずっと洞窟の中だったからなのか、見る物全てが鮮烈に感じ、色鮮やかに感じる。

洞窟の湿った空気とは違う、適度に潤いのある緑の香りと土の香りがする空気は、とても心地いい。

あれからヴェルドラからはなんの反応もない。

この景色を見せてやりたかったな。

それにしても、洞窟にいたときは魔物に頻繁に襲われたが、外はこれまでのが嘘のように全く襲われなかった。

まあ、唯一魔物に遭遇した時があった。

あれは、リムルが発声の練習をしていて、俺が近くにあった果実に舌鼓を打っている時。

リムル

「カキノキクリノキカキケコ。」

リアル

モグモグ ゴク 「……ウマ！ 何より甘い。」

魔物

「グルル！」

リムル・リアル

「うん？」

俺達の前に現れたのは、五匹の狼の魔物だった。

今にも襲いかかってきそうだったので、俺達は少し威嚇すると。

狼の魔物

「!!」

一目散に逃げていった。

それ以降、魔物が現れることはなかった。

しばらく歩いてみると、整備はされていないが道みたいなものがあつたので、そつちにいってみることにした。

すると、目の前から小柄な体をした集団がやってきた。

リムル

(…：ヴェルドラ、面白可笑しいエピソード、早速用意できそうだよ。)

俺達の目の前にいる集団は、貧相な体つきにボロボロの武器、極め付けは緑の肌。

ゴブリンというやつだろうか？

相棒

《是　この集団は・ジュラの森に生息する魔物であり・この世界の人間たちの定めた強さの基準で言うと・Eランク相当の魔物です。》

リアル

(やつぱりゴブリンか。)

すると、剣と盾を持つリーダー格のゴブリンが一步前に出て。

リーダーのゴブリン

「グガ、つ…・強き者達よ、この先に何かようですか？」

リアル

(お！　言葉がわかる?)

(…・あぁ、『魔力感知』のおかげか。　…・ていうか『強き者達』?)

リムル

(それって、俺達のことか?)

2人揃って自分を指差すと、ゴブリンは首を縦に振る。
どうやら間違いないようだ。

リムル

(思念を乗せれば、会話も出来るんだよな。)

スーツ「えーっと、初めまして。」ブワツ!

リアル

「!!?」

ゴ布林達

「ヒイヒイヒイヒイ!!!」

リムルが喋ったと思ったら、なんだこれは?!

至近距離でスピーカーが大音量で音が鳴っているようだ。

リムル

「俺はスライムの、リムルと言う」

リアル

「リムル! ストップストップ!!」

リムル

「え?」

リムルを抑え、大音量の暴力からゴ布林達を救った。

見るとゴ布林達はすっかり怯え切っており。

リーダーのゴ布林

「貴方様の力は十分理解しました!! どうかお声を鎮めてください!」

リムル

「あれ? 思念が強すぎたか?」

リアル

「ああ、さっきのリムル…まるでヴェルドラが喋っている見たいだったぞ。」

リムル

「マジか!」

改めて、思念を抑え気味にゴ布林達の話の話を聞くと、どうやら強力な魔物の気配が近づいてきたから、警戒に来たようだ。

で、その『強力な魔物』とやらが、俺達らしい。

何かの間違いじゃないかと思ったが、ゴ布林達は『間違いない』と

言う。

リーダーのゴブリン

「強き者達よ、貴方達を見込んでお願いしたい事があります。」

リムルはその体から？マークを出した。

・・・今更だが、面白い表現の仕方だ。

俺達は、ゴブリンの村に案内された。

村・・・と言うか、集落っぽいけど。

ヴェルドラの鼻息一つで吹き飛びそうだ。

案内されたのは、村長の家だった。

そこには杖を持ったヨボヨボのゴブリンが一匹いた。

リアル

(・・・ゴブリンって『匹』でよかったよな。)

ゴブリンの村長

「初めまして、私はこの村の村長をしています。」

リムル・リアル

「初めまして。」

リムル

「俺達にお願いとは、なんですか？」

村長と、俺達を案内してくれたリーダーのゴブリンが頷き合い。

俺達に話し始めた。

ゴブリンの村長

「実は最近魔物の動きが活発になっているのですが、ご存じでしょうか？」

リムル・リアル

「いいや？」

ゴブリンの村長

「我らの神が、一月程前にお姿をお隠しになったのです。」

「その為に近隣に住む他の魔物達が、この地にちよっかいを出すようになったのです。」

リアル

(神?・・・もしかして、ヴェルドラのことか?)

時期的には合いそうだ。

この森、『ジユラの大森林』の魔物除けになっていたのだろうか？

リーアル

(なんか、悪いことしたな。)

ゴブリンの村長

「我々も応戦をしたのですが、戦力的に厳しく……」

リーダーのゴ布林

「それで、貴方達に！」

リムル

「力を貸してほしいと……でも俺スライムなんで、期待に添えるかどうか？」

リーアル

「俺も、生まれたばかりなんで、何が出来るか？」

ゴ布林達が何と戦っているかわからないが、ぶっちゃけ、洞窟に出てきた魔物程度ならなんとかなると思うが。

それを言わないのは、……まあ、面倒だもんな。

ゴブリンの村長

「ハハハ、ご謙遜を。」

リーダーのゴ布林

「ご謙遜を。」

リムル・リーアル

「ん？」

ゴブリンの村長

「ただのスライムにそれだけの『^{オーラ}覇気』は出せませんよ。」

「さぞかし名の知れた魔物だとお見受けします。」

リーダーのゴ布林

「そちらの方も、見た目は人間に近いですけど、『覇気』の感じからすると、相当なお力を持った魔物とお見受けします。」

リムル・リーアル

「え??」

覇気？

そんなものを出した覚えはないが？

ここは相棒さんの出番だな。

リアル

(相棒さん、『魔力感知』の視点を切り替えて、自分を客観的に見せてくれ。)

相棒

《了 視点を切り替えます。》

そして見えたのは。

俺とリムルから虹色の膨大な魔素が溢れ出ている光景だった。

リムルを見ると、俺と同じ様に驚いていた。

『大賢者』に頼んだのだろう。

それにしても、俺達は普段からこんな膨大な魔素を無意識の内に垂れ流していたのか？

リアル

(これはアカン奴や！)

(だからゴブリン達は怯えていたし、森で魔物に襲われなかったのか。)

リムル

「・・・フツ、さすが村長。」

「わかるか？」

リアル

(リムル？)

知らずに魔素を漏れ出していることを、誤魔化すようにリムルは言った。

それからは、俺達の『覇気』に怯えているゴブリン達もいたので、『覇気』を抑えることにした。

俺は『魔力操作』のおかげでスムーズに出来た、漏れ出ている魔素が0になったからか、さっきまであった角が引っ込んだ。

相棒曰く、この状態だと、人間と認識されるとのこと。

誰かに会う時はこの方法を使うとしよう。

そして、ゴブリンの村長の話だと、狼の魔物『牙狼族』が攻めてき

たのだ。

本来、狼一匹につきゴブリンの戦士が十人がかりで相手をして、勝てるかどうか分からない程の強さらしい。

その戦いで多数のゴブリンの戦士が、討死した。

この村には、名持ちの守護者のようなゴブリンがいたが、そのゴブリンも討死し村は危機に瀕している。

ゴブリンの村長

「牙狼族は全部で百匹程度です。」

リムル

「・・・こつちの戦力は？」

ゴブリンの村長

「戦えるものは雌も含めて六十匹程です。」

絶望的な戦力さだ。

村長の話なら牙狼族は一匹でゴブリン十四分の強さだ。

人間の兵法なら、『攻める側は守る側の3倍の兵力が必要』なのだが、魔物としての格が違うし、そもそも人間の常識なんて通じないか。

リアル

「その・・・名持ちのゴブリンは、勝てないとわかっていて戦ったのか？」

ゴブリンの村長

「いえ、牙狼族の情報は・・・その戦士が命懸けで知らせてくれた物なのです。」

「その戦士は・・・私の息子で、これの兄でした。」

リーダーのゴブリン

「グウツ！」

悪いことを聞いてしまったな。

勝てなくても、せめて情報だけでも持ち帰ってきたのだろう。

自分の家族と仲間達のために。

家の入り口をチラツと見ると、複数のゴブリン達がこちらの様子のを見ていた。

ヴェルドラの話では、この世界は『弱肉強食』が絶対のルールだと

言っていた。

仮に俺達がこの場を去り、ゴブリン達が牙狼族に殺されても、それは俺達には関係のないことだ。

……けど。

リムル

「……村長、仮に俺達がお前達を助けるとして、見返りはなんだ？」

「お前達は、俺達に何を差し出せる？」

村長・リーダー

「……」

リムルのこの言葉には納得がいく。

本当はリムルも見返りなんて望んではないだろう。

ただ、無償の行為と言うのは、最初だけならいいと思う。

だが、それが何回も続くと周りの者は『その行為の裏に何か有るんじゃないか』とか『何を考えているのか分からない』とか疑い始める。

最終的には、異端者扱いしてこちらに牙を剥きかねない。

こうやって体裁を整えておくべきだろう。

ゴブリンの村長

「……我々の忠誠を捧げます！」

「我らに守護をお与えください！ さすれば我らは、お二人に忠誠を誓いましょう。」

リーダーのゴブリン

「誓いましょう！」

そう言つて、二匹は深く頭を下げてきた。

随分と重たい見返りだと思う。

だが、元人間として、そして今はまだ変身すらできないが、仮面ライダーの力を持つ者として、助けを求めている者を見捨てることはできない。

リムル

（……なんだかんだで、俺は頼まれ事に弱いな。）

リアル

（……やるか。）

その時、遠くから雄叫びが聞こえた。

リムル・リアル

「!!?」

村長・リーダー

「!!」

まるで狼の遠吠えのようだ。

おそらく牙狼族だろう。

百匹の牙狼族が一斉に叫んでいるのだろうか？

まるで地響きのようだ。

その遠吠えを聞いて、外にいたゴブリン達はパニックを起こしていた。

頭を抱えてその場に座り込む者。

涙を流し叫ぶもの。

どうしたら良いのか分からず、慌てる者。

村長が外に出て、ゴブリン達を落ち着かせようとするが、治る気配がない。

リアル

「・・・なあ、リムル。」

リムル

「わかってる。」

リムル・リアル

「・・・助けよう。」

そう言っただけ俺達は、家の外に出た。

リムル

「みんな落ち着け！」

リムルのその一言で、周囲のゴブリン達は一気に静まった。

リアル

「そうだぞ、なんたつてこれから倒す相手なんだぞ。」

「怖気付いてどうする？」

ゴブリンの村長

「で・・・では!?!」

俺とリムルは村のゴ布林達を見て。
リムル

「・・・お前達の願い、暴風竜・ヴェルドラに代わり、このリムルテンペストと。」

リアル

「このリアルテンペストが叶えよう!!」

ゴブリンの村長

「は・・・ハハア〜!!」

「有難う御座います!! 我々は、リムル様とリアル様の忠実な僕です!!」

ゴ布林達

「!!」

村長が頭を下げると、他のゴ布林達も一斉に頭を下げた。こうして、俺とリムルはゴ布林達の守護者となるのだった。

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

○ リーアルテンペスト 獲得スキル

UQスキル

・闇吸収

闇黒剣月闇を持っている時に使うことができるスキル

龍瞳と無限収納と同期しており、吸収したものは、無限収納に収納され、精錬・生成される

EXスキル

・魔闘法

発動すると、全身が魔力の鎧で覆われ、身体能力が上昇する

周囲から魔力を上乗せするか、自身の魔力を上乗せすると、強化される

・縮地法

地面に隠れたり、地面の距離を縮めることで、瞬間移動が可能になる

・魔力操作

自身の魔力や、周囲の魔力を自在に操作する

Cスキル

・熱源感知

熱を持つ物体を感知する

・粘糸・鋼糸

粘りのある柔軟な糸と、硬く頑丈な糸を操る

○ リムルⅡテンペスト 獲得スキル

UQスキル

・水勢

水勢剣流水を使用することができる

ソードライバーがあれば、変身も可能

EXスキル

・水操作

水を自在に操作して、攻撃・防御・移動に使用する

水圧推進・水流移動・水刃を獲得したことで、EXスキル・水操

作に統合進化した

Cスキル

・熱源感知

・毒霧吐息

浴びると溶ける、毒の霧を出す

・麻痺吐息

浴びると麻痺状態になる

・粘糸・鋼糸

・吸血

他者から血を吸い取る

吸血の仕方は、種族によって異なる

・超音波

超音波を発生させる

・身体装甲

皮膚を硬い装甲に変化させる

○ ヴェルドラテンペスト 獲得スキル
UQスキル

・ 光剛

光剛剣最光を使用することができる

最光ドライバーがあれば、変身も可能

戦い、そして別れ道

俺とリムルは洞窟を出た。

しばらく森を彷徨っていると、ゴブリンの一団に出会った。

そのゴ布林達は、牙狼族との勢力争いで被害が出ているらしい。

俺とリムルはゴ布林達に頼まれ、牙狼族達と戦うために準備を進めた。

今はゴ布林達を、村の中央に集めている。

リムル

「……………」

(牙狼族との戦いには、あまり期待できそうにないな。)

リアル

(貧弱そうだし、装備もボロボロだな。)

まあ、ゲームでも漫画でも、ゴ布林といえば小柄で貧相な体付きな描写が一般的だ。

中には、進化した個体で、『ゴ布林・ヒーロー』とか『ゴ布林・チャンピオン』とかが居るけど。

リアル

(この世界でそんな進化とかするの？)

相棒

『解 結論から言うと……この世界の魔物は・進化します。』

リアル

(そうなの？)

相棒

『魔素量が規定値に達している場合・もしくは・進化するに見合う数のスキル等を所持している場合・進化が始まる可能性があります。』

リアル

(そうなの？)

相棒と脳内で会話をしていると、リムルがゴ布林達を励ましていた。

ゴブリン達もやる気が出て来たようだ。

その次は、前回の牙狼族との戦いで負傷したゴブリンが収容されている場所へ案内してもらった。

ゴブリンの村長

「できる限りの手当てを施したのですが・・・」

そこには手当てをされ、横になっている複数うのゴブリン達がい
た。

全員、まるで鋭い牙や爪で引き裂かれたような傷跡が、包帯の隙間
から見える。

リアル

(どうにかしてやりたいが・・・)

相棒

『解 マスターの無限収納内にある・回復薬を使うことを推奨しま
す。』

リアル

(あー、そうか。)

相棒に言われて無限収納を開き、その中にある回復薬を取り出し
た。

それは、極薄の膜で覆われた、キラキラ輝く水だった。

リアル

(これをどうすれば?)

相棒

『解 そのまま・膜が破れるまで・押しつけてください。』

リアル

(こっか?)

相棒に言われるまま、目の前で横になっているゴブリンに、回復薬
を押しつけてみる。

すると、『パシヤッ!』と膜が破れて、中の回復薬がゴブリンに浴び
せられる。

ゴブリンの体が薄く光だし、次の瞬間には傷が全部塞がっていた。
ゴブリン

「あ……あれ？」

ゴブリンの村長

「!!」

リーダーのゴ布林

「傷が治った?!」

リムル

「おー！ すげーな、俺達の回復薬。」

リアル

「ああ、そうだな！」

それから俺とリムルは、負傷しているゴ布林達を治療してまわった。

ただ、リムルは一度ゴ布林達を捕食して、自分の体内で回復薬をぶっかけて、それが終わったら体内から吐き出していたのだが。

その吐き出し方が雑で、ゴ布林達は顔から地面にキスをするハメになるのだった。

リアル

(もう少し丁寧に出してやればいいのに。)

という訳で、これで治療は終わった。

次は村の防備を固めないとな。

とは言え、たった一日でそんなに上等なものができるはずもなく。

欲を言えば、柵の根本部分を70cmくらい高くして、高くした部分に石を積んだ、石積みの防護柵を作りたかった。

だがそれには、人手も時間もない。

なので今回は、縦に打ち込んだ丸太と丸太の間に、斜めに丸太を打ち込んだ後、先端を削って尖らせておいた。

さらにダメ押しに、俺とリムルはスキル『粘糸・鋼糸』で柵を補強しておいた。

リムル

「さて、迎え撃つ準備はこんなところか？」

リアル

「そうだな。あとは村の正面入り口に付近に『鋼糸』を張り巡らせる

「くらいか？」

リムル

「ワイヤートラップか？」

リーアル

「ああ、村長の話だと前回は入り口の方からやって来たみたいだからな。」

「あとは、索敵用の『粘糸』を貼っておくか。」

状況的にも、種族の格的にも優位な牙狼族が、わざわざ不意打ちなんてするのは考えにくいのが、念を入れておいて損は無いだらう。

そうして、村から半径500メートル四方を『粘糸』の糸を張った。それがちょうど終わった時に。

相棒

『告 魔力感知に・反応がありません。』

リーアル

「え？ 牙狼族か？」

相棒

『否 牙狼族とは別の種族です。』

『反応が微弱なため・疲弊していると思われる。』

牙狼族ではないようだ。

魔力感知を確認すると、ここから100メートルほど先に弱々しい反応がある。

本来なら、リムルにも来てもらうべきだと思うが。

様子を見るくらいなら、俺一人でも大丈夫だろう。

リーアル

「ちよつと見に行こう。何かあったら知らせてくれよ相棒さん。」

相棒

『了 承りました。』

反応のする場所までできるだけ音を立てないように進んだ。するとそこには、人が倒れていた。

ただ、髪が銀色で、頭に狐のような耳に、フサフサの尻尾があった。そして、全身にひどい怪我を負っていた。

リアル

(相棒、こいつは一体なんだ?)

相棒

『告 解析鑑定が終了しました。』

『種族名は・善狐族ぜんこぞくです。』

リアル

(善狐族? 狐の獣人なのか?)

相棒

『是 とても珍しい種族です。』

『個体数が少なく・人々に幸運をもたらすとされている獣人種です。』

リアル

(幸運をもたらすか、助けても大丈夫だろうな。)

善狐族の少女

「うう・・・」

リアル

「大丈夫、すぐ助けるから。」

そう言っただけ俺は無限収納から回復薬を出し、彼女に押し立てる。

膜が破れ、中に入っている回復薬がかかると、彼女の傷が治っていく。

うつすらと、彼女の目が開く。

善狐族の少女

「・・・あれ? 私・・・」

リアル

「よかった。治って。」

善狐族の少女

「?! 人間?」

俺の姿を見て、ビックリしたのか後ろに飛び退く。

仕方がないだろう、気がついたら目の前に見知らぬ男がいるのだから。

だが、俺を見て人間だろ思っているようだ。

相棒の言う通り、^{オーラ}覇気を抑えておけば人間と認識してくれるよう
だ。

リアル

「大丈夫、見た目は人間だけど俺も魔物だから。」

そう言っつて魔力操作で抑えていた魔素を解放した。

すると、今まで引っ込んでいた角が現れ、周囲の覇気がもれ始めた。

善狐族の少女

「?! な! . . . あ . . . ああ . . . 」

彼女は顔を青くして、震え出した。

まるで、この世の終わりをしているような顔をしている。

リアル

(俺の覇気っつて、そんなにすごいのか?)

相棒

『解 今のマスターは・个体名・暴風竜ヴェルドラから名を与えられた
ため・ただの魔物ではなく・その存在は上位魔人と遜色ないレベルで
す。』

リアル

(魔人?)

相棒曰く魔人とは、魔物の中でも特に強い力を持った上位存在。

魔素溜まりから生まれた者、突然変異によつて生まれた者、動物や
魔獣が何らかの方法で進化した者。

魔人が生まれる方法は様々あるが基本、知性があり生殖機能を持
ち、膨大な魔素を保有している者達を『魔人』と呼ぶらしい。

リアル

(そんな存在からこんな風に覇気をぶつけられたら、それが意図して
のことだけでなくとも怯えるに決まってるよな。)

「怯えないでいいぞ、俺は君に何もしないから。」

そう言っつて、もう一度魔力操作を使っつて、魔素を引っ込めた。

善狐族の少女

「 はい 」プルプル

リアル

(・・・涙目でプルプル震える姿・・・なんか・・・こう・・・保護欲を掻き立てられるな。)

善狐族の少女

「？」

リアル

「・・・コホン・・・それで、君はどうしてこんな所にいたんだ？」

「怪我をしていたのも、どうして何だ？」

善狐族の少女

「・・・それは・・・」

彼女の話が簡単にまとめると、鍛錬のために世界を旅していたのだが、このジユラの森にやってきた時、牙狼族の大群に襲われてしまい命からがら命からがら逃げ延びたが、ここで力尽きたのだ。

彼女は、彼女の部族の中でも一番強く、脚技と『仙術』という魔法とは違う術を使った戦いが得意で、本来なら牙狼族程度なら簡単に撃退できるのだが、それでも数の暴力には敵わなかったらしい。

善狐族の少女

「お腹の傷が致命傷で、もうダメだと思っていました。・・・でも・・・」

リアル

「そこへ偶然、俺がやってきたと言う訳か。」

「・・・それで、このあとはどうするんだ？」

善狐族の少女

「それは・・・」

リアル

(・・・ノープランか。)

せっかく助けたのに、また襲われでもしたら後味が悪いな。

行く宛があるかどうかは分からないが、このまま放っておくわけにもいかないし。

リアル

「・・・君さえ良ければ、俺と一緒に来るか？」

善狐族の少女

「え？」

リアル

「何か目的があったり、行く宛があるのなら無理にとは言わないけど？」

善狐族の少女

「……………」

少し悩んでいるようだ。

いきなりこんな事を言っても戸惑うだろう。

だが彼女は、すぐに顔を上げてこつちを見ると。

善狐族の少女

「…………もし宜しければ、貴方と共にいさせて頂けますか？」

リアル

「…………今俺はゴブリンの村にいて、彼らを牙狼族から守るために戦うことになるけど、それでもいいかい？」

善狐族の少女

「…………はい。力ある魔人様である貴方のお側にいさせてください。」

一瞬驚いたようだが、すぐに頷き返事をした。

リアル

「それじゃあ、これからよろしくな。」

「俺はリアルIIテンペスト、君は？」

善狐族の少女

「すみません、私に名前はありません。」

リアル

「そうなのか？」

善狐族の少女

「はい、申し訳ありません。」

名前がないか？

そう言えば自分も最初は名前がなかった。

ヴェルドラに名前をつけてもらって、初めて『ネームドモンスター名持ちの魔物』になった訳だし。

この世界じゃ、名前がないのが普通なんだろうか？

リーアル

「じゃあ、仕方ない。」

「案内するから、着いて来てくれ。」

善狐族の少女

「はい、リーアル様。」

リーアル

(リーアル様?!・・・なんかむず痒いな。)

その後、ゴブリンの村に戻った俺は、村のみんなに彼女を紹介した。彼女はすぐにゴ布林達に受け入れられ、共に牙狼族撃退のために協力することになった。

リムルからいろいろ質問攻めにあっただが、快く受け入れてくれた。

善狐族の彼女は、スライムに名前があり、普通に喋っていることに戸惑っていたが、「俺の友達だ」と言うのと色々納得したようだ。

リーアル

(さて、あとは牙狼族が来るのを待つだけか。)

ー夜ー

夜になり、戦えるゴブリンの戦士達と、善狐族の少女、そして俺とリムルは村の広場に待機していた。

すると、索敵用に張っていた粘糸が切れた感覚があった。

方角は予想していた通り、村の入り口の方からだ。

リーアル

「リムル!」

リムル

「来たか?」

リーアル

「ああ。」

俺とリムルが村の入り口に陣取ると、ゴ布林達はあらかじめ立ておいた作戦通り、柵の内側から弓矢で攻撃するグループと、柵の間から入ってこようとする牙狼族を接近して攻撃するグループに分けて陣取った。

善狐族の少女は、仙術によるゴ布林達の支援をしてもらおう。

「自分も前に出て戦う」と言ってきたが、ゴ布林達に自信をつけさせる意味もあるから、今回は引いてもらった。

丸顔のゴ布林

「………！ 来た！ 来たっす！」

見張りのために、木の上に配置していたゴ布林から知らせが入る。

ゴ布林達に一気に緊張が走る。

リアル

「焦るなよ。」

リムル

「落ち着いて、作戦通りにやるんだ。」

リアル

「それに、いざと言う時は俺達に任せろ。」

作戦が上手くいけば、そうそう苦戦はしないと思うが、世の中100%上手く行くことの方が稀だからな。

本当にいざという時以外は、ゴ布林達に任せよう。

牙狼族達はこちらの異変に気付き、一旦止まる。

牙狼族の長

「ふん！ あのような柵などを作って、何になる。」

牙狼族の長の息子

「親父殿、あの者達です。」

牙狼族の長

「お前の言っていた強大な覇気を放っていた魔物か？」

「……スライムと人間？」

「息子よ、貴様夢でも見たか？ ただのスライムと人間ではないか。」

牙狼族の長の息子

「馬鹿な？ あの者の気配は間違いなく魔物だったはず？」

「どうやらこっちを警戒しているようだ。」

それに、よく見たらあの額に星の形の模様がある狼は、以前俺とリムルの前に現れた狼達の中にいた奴だ。

リムル

「……このまま引き返すなら何もしない。」

「今直ぐここから去れ！」

牙狼族の長

「ふん！ スライムの分際で偉そうに！」

赤毛の牙狼

「長殿、油断してはなりません。」

「もしかしたら意図的に覇気を隠しているのかもしれない。」

一際目立つ赤毛の牙狼が、忠告する。

牙狼族の長

「黙れ！ 余所者が口出しするな！」

「あの柵を薙ぎ倒せ！ ゴ布林達を血祭りに上げろ！」

牙狼族のリーダーが雄叫びをあげると、他の牙狼達が突っ込んできた。

だが、村の入り口付近にまで辿り着くと、一匹、また一匹と見えな
い何かによって傷つけられた。

その隙について、ゴ布林達は善狐族の少女によって強化された身
体能力で、矢を放つ。

その全ての矢が牙狼族を貫いていく。

牙狼族の長

「何が起きている?」

「………! 糸!」

リアル

「気づいたか? 俺のスキル『鋼糸』さ。」

牙狼族のリーダーだけでなく、血が付いたことで糸が見えるよう
になり、糸を避けて柵に到達する牙狼族が始める。

しかし、柵を越えようとした時点で、鈍器や棍棒を持ったゴ布林
達の餌食になっていく。

その光景を見て、牙狼族のリーダーは怒り始める。

牙狼族の長

「たかがスライムと人間の分際で! 捻り潰してくれ!」

牙狼族の長の息子

「親父殿！」

赤毛の牙狼

「いけません！」

牙狼族のリーダーが突っ込んできた。

血がついたことで糸のトラップが露わになり、その鋭い牙で切り裂かれる。

俺とリムルの命を刈り取るために、襲いかかってくる。

ゴブリンの村長

「リムル様！」

善狐族の少女

「リアル様！」

まあ、これも俺とリムルの予想した通りの展開だな。

俺は、手を広げてスキルを使う。

牙狼族の長

「うっ?! 何だ?」

牙狼族のリーダーが空中で静止している。

勿論これは俺のスキル『粘糸・鋼糸』だ。

粘糸でも十分拘束出来ると思ったが、念のために鋼糸も発動し、粘糸を補強しておいた。

リアル

「じゃありムル、任せる。」

リムル

「おう。」

リムルは牙狼族のリーダーに近づいて行く。

リムル

『『水刃』!』

リムルの『水刃』が牙狼族のリーダーの首を切り裂いた。

遅れて、切り口から血飛沫が噴き出す。

血飛沫がおさまってから、糸の拘束を解く。

牙狼族のリーダーの体がドサツ!と地面に落ち、血溜まりができ始

める。

リアル

(普通なら吐き気を催す場面なのに、特に何とも感じないな。)
(今の俺は魔物だからだろうか?)

俺がそんな事を考えていると、牙狼族達が明らかに動揺している。

リムル

「聞け！ 牙狼族達！」

「お前達のボスは死んだ！」

「選ばせてやる。降伏か、死か！」

リアル

「ちよ!？」

「リムル、それあいつらの逃げ道潰してるぞ。」ボソ

リムル

「あー！」

そう、「降伏か、死か？」では彼らの「逃げる」という道を塞いでいる。

リムルの奴、一体どうする気だ。

リムル

(ヤベー、どうしよう?)

「……あー！ 『捕食者』！」

リムルは目の前に転がる牙狼族のリーダーの死体を、『捕食者』で捕食した。

すると。

相棒

『告 個体名・リムルⅡテンペストが・牙狼への擬態が可能になりました。』
た。』

『さらに・牙狼固有スキルの獲得に成功。』

『魂の回廊を通じ・スキルの獲得に挑戦・・・成功しました。』

『『超嗅覚』『思念伝達』『威圧』を獲得しました。』

リムルが獲得したスキルが手に入った。

リムルは、早速牙狼に擬態した。

リアル

(・・・なんか、目の前にいる牙狼達より、牙狼に擬態したリムルの方が強そうだな。)

リムル

「ククク、聞け！」

「仕方がないから今回は見逃してやる。」

「二度とこの地に手を出さないのなら、この場からさる事を許す！」

「・・・ワオオオオオオオオオオオオ!!!」

牙狼達

「!!!」

ゴブリン達

「!!!!!!!!!」

善狐族の少女

「ヒッ!!!」

リアル

「・・・・・・」

リムルが放ったスキル『威圧』により、俺以外のこの場にいる全員が威圧の影響を受ける。

リムルは牙狼の雄叫びを聞かせて、自分の方が上位の存在だと知らしめて、追い払おうとしているのだろう。

リアル

(これならワンチャンありか?)

リムル

(頼む、これで逃げてくれ。)

だがこちらの思惑とは裏腹に、牙狼族達はゆっくりと此方に近づいてくる。

この『威圧』の中でも動けるなんて、中々根性があるな。

リムル

(おいおい、まだ戦うつもりか?)

リムルが『威圧』の威力を上げるが、牙狼族達は尚もこっちに近づいてくる。

そして、リムルに接触するまであと30cmくらいのところまできた時。

牙狼族達

「二二我ら一同、貴方方に従います！」二二」

リムル・リアル

「え？」

リムル

(・・・逃げてくれてよかったのに?)

リアル

(そう来たか。)

まさか全面降伏するとは思っていなかった俺とリムルは逆に戸惑う。

まあ、このまま戦っても牙狼族が勝てないのは目に見えて明らかだ。

リーダーが倒された時点で牙狼達は戦意を喪失していた訳だし。

ゴブリンの村長

「か・・・勝ったのですか？」

リムル

「・・・あゝ、そうだな。」

リアル

「戦う気がないのなら、こちらでも争う必要はないな。」

リムル

「ああ、やっぱり平和が一番だな。」

俺達の言葉を聞き、ゴ布林達は大喜びで勝鬨をあげた。

とりあえず、今はこの勝利を噛み締めよう。

問題は・・・

――翌日――

次の日の朝、俺とリムルは改めて牙狼達とゴ布林達を村の広場に集合させた。

リムル

(ゴブリンだけじゃなく、こんなに沢山の狼達の面倒も見ないといけないのか?)

リアル

『まあ、俺達がこいつらの主なんだし、責任は取らないとな。』

リムル

(うくん・・・あれ? 今リアルの声が。)

リアル

『スキル『思念伝達』だ。』

『リムルも昨日獲得したろ。』

リムル

(あー) // // // //

どうやら忘れていたようだ?

スキル『大賢者』と言う有能なスキルがあるのに忘れるなんて、この感じだと自分がどんなスキルを覚えているか、ちゃんと把握しているかどうかも怪しい。

だが、今はこの状況を如何にかしないといけないので、深く追求しない。

リムル

『・・・みんな大体同じくらいの数か?』

リアル

『そうだな。』

大賢者

『解 牙狼族は92匹・ゴブリンは・雄雌含めて・90匹です。』

リムル

『そっか。』

魂の回廊と思念伝達のおかげか、俺にも大賢者の声が聞こえる。相棒と口調は同じだが、声が違うな。

リムル

「はくい、みんな聞いてくれ!」

ゴブリン・牙狼

「「「「?」」」」

リムル

「えーっと、これから皆んなにはペアを組んで、一緒に過ごしてもらおう。」

ゴブリン・牙狼

「」「」「ペア？」「」「」

リーアル

「意味はわかるか？」

ゴブリンの村長

「リムル様、リーアル様、ペ・アとは何でしょう？」
わからないようだ。

二人一組になる事だと言ったら、皆んな素直に各々好きな相手とペアを組んだ。

牙狼族の長の息子と赤毛の牙狼はそれぞれ、俺とリムルが組んだ。

リムル

「昨日の敵は今日の友！ これからはお互いに協力し合い、共に生きてくれ。」

リーアル

「お互いがお互いを助け合うように、困っている奴がいたら助けてやるようにな。」

ゴブリン・牙狼

「」「」「はいー」「」「」

これで取り敢えず、共存の関係ができたかな？

リムル

「あとは、そうだな・・・」

（そう言えばコイツら、名前なんだっけ？）

（そもそも、名前あったっけ？）

「なあ、お前達名前は何だ？」

リムルがゴブリンの村長に名前を聞いている。

善狐族の彼女もそうだが、この世界の魔物に名前は無いんじゃないか？

ゴブリンの村長

「普通魔物に名前はありません。」

「名前が無くとも意思の疎通は出来ますからな。」

リムル

「そうか。」

名前なしで意思の疎通は図りにくいと思うのは、人間ならでわの発想だろうか？

とは言え名前が無いと言うのは、不便だな。

リムル

「よし！ 今からお前達に名前をつけよう。」

リムルがそう言うと、この場にいるゴブリンと牙狼達が、信じられないと言う感じでリムルを見てきた。

何だろうか？

何でそんなに驚く？

ゴブリンの村長

「名前?! よろしいのですか?」

リムル

「うん? 名前がないと不便だし、いいけど?」

すると、今度は歓声が上がった。

ゴブリンの村長なんか、御老体なのに喜びを体全体で表している。名前をつけるだけで。

リムル

『なんでコイツら、名前付けるだけでこんなに喜んでるの?』

リーアル

『さあ? なんてだろうか?』

と言うわけで、若干引つかかる部分があるが、リムルが名付けを始めた。

リムル

「そうだな・・・村長には・・・そう言えば、息子はなんて名前だったんだ?」

ゴブリンの村長

「リグルです。」

リムル

「リグルか・・・よし、村長今日からお前はリグルだ。」

リムルが村長に『リグルド』と名づけると、リグルドの体が光り始めた。

これは俺とリムルにもあった事だ。

『名持ちの魔物』になったことで、パワーアップでもしたのだろう。

リグルド

「あ！ 有難う御座います。」

「リグルド、感激です！」

リムル

「お、おう。」

「それで、弟のお前は、兄の名を継いでリグルを名乗れ。」

リグル

「はい！」

リグルド

「!! 息子にリグルの名を継がせていただき、感謝します！」

リグルド・リグル

「ハハー!!」

なんなんだろうな？

名前を付けるだけでこの喜び様。

リグルドなんて泣いてるんだが？

それから順調に名付けは進んでいく。

リムル

「お前は・・・ゴブタ。」

ゴブタ

「はい！ 有難う御座います。」

リムル

「ゴブチ・・・ゴブツ・・・ゴブテ・・・お前はゴブゾウな。」

なんだか適当になってきている。

喜んでくれてるのに、なんだか悪い気分になってくる。

俺がつけている訳では無いが。

リアル

(数が数だし、仕方ないか?)

リグルドが「そんなに名前をつけて大丈夫ですか?」と聞いてくるが、リムルは「大丈夫。」と言って名付けを再開する。

次にやってきたのは、雌のゴブリンだ。

リムル

「お前は・・・ハルナ。」

ハルナ

「はい!」

なんで雌のゴブリンには普通の名前を付ける?

他意はないんだろうけど?

善狐族の少女

「あの・・・」

リアル

「うん?」

すると、善狐族の子が俺に話しかけて来た。

善狐族の少女

「もし、宜しければ・・・私にも名前をいただけますか?」

リアル

「・・・俺にか?」

善狐族の少女

「はい! 是非!」

赤毛の牙狼

「私にも、よろしければお願いします。」

赤毛の牙狼もやって来て、名をつけて欲しいと言う。

リムルの方はまだまだ終わりそうにない。

それに、2人とも俺に名をつけて欲しそうだし、俺が付けよう。

リアル

「わかった。俺が付けよう。」

善狐族の少女・赤毛の牙狼

「! 有難う御座います!」

リアル

「じゃあ、まずは善狐族の君から。」

善狐族の少女

「お願いします。」

自分が誰かに名付けをする日が来るなんて、人生何が起こるかわからないな。

・・・この世界に転生してまだまもないけど。

リアル

(・・・善狐族・・・狐・・・狐関連でなんかいい名前があつたような?)

(確か、伝説上の狐で、神の使いとも言われていた・・・く・・・く・・・くずのは?)

(！ 葛乃葉！)

「よし、今日からお前は『葛乃葉』だ。」

葛乃葉 「葛乃葉・・・素敵な名前を、有難う御座います！」
気に入ってもらえたようで何より。

葛乃葉の体が光り始める。

すると。

リアル

(うん？　なんか魔素が減ったような?)

大体4分の1くらいだろうか？

確かに魔素が減ったような気がする。

もしかして、名付けをすると魔素を消費するのか？

リアル

(けどリムルは平気そうだし?)

(気のせいかな?)

「・・・まあ、いいか。次はお前だな。」

赤毛の牙狼

「はい。」

リアル

(・・・こいつも葛乃葉と同じ様な感じで、名前を付けるか。)

(狼・・・狼の神・・・マーナガラム・・・はなんか違うな。)

(スコール・・・フレギ・・・マルコシアス・・・どれもイマイチだな。)

(うくん・・・アーセナ・・・!)

「よし！ 今日からお前は『アーセナ』だ。」

アーセナ

「アーセナ・・・有難う御座います！」

アーセナが気に入っていると云うのは嫌でもわかる。

だって、思いつき尻尾を振っているから。

そしてアーセナの体が光り、またさっきの感覚が襲ってきた。

リーアル

(！ またか！)

(やっぱりこれ、名付けに魔素を消費しているだろ!?)

(だとしたら、リムルがやばい!)

リムルに今すぐ名付けを中断させようとする。

ちようど、牙狼族の長の息子の名付けが終わったようだ。

名前は『嵐牙』らしい。

その時、リムルの体に変化が起きた。

リムル

「ぐ！ か・・・体が・・・うごか・・・なく・・・」

リグルド

「リムル様！」

嵐牙

「主！」

相棒

『告 個体名・リムルⅡテンペストの魔素残量が・一定値を下回った事を確認しました。』

『低位活動状態への・移行を確認。』

『完全回復の予定時刻は・三日後となります。』

リーアル

「遅かったか。」

―夜―

その日の夜、俺は改めてリグルドに名付けについて聞いてみた。やはり、名付けの際にはそれに見合う魔素を消費するみたいだ。リムルの魔素の量が桁外れだったから、あれだけ沢山のゴブリン達に名を与えられたんだと思う。

それだけでなく名付けの際に、より熟考したり、特別な思い入れがある名を与えた場合、与える魔素の量が多くなると相棒が言っていた。

逆に、例えばゴブタとか、ゴブチとか深く考えずに直感で名付けをすると、消費する魔素は最低限で済むみたいだ。

リーアル

(俺も葛乃葉とアーセナの名前は、神の使いと言われている狐の名前だったり、狼の神の名前だったりしたから2人合わせて俺の魔素の半分が持つていかれた訳か。)

(先に言っただけじゃなかったよな。)

それともこれは、この世界では常識の類いなのだろうか？

リムルの方を見ると、複数の雌のゴブリン達に世話をされている。

ゴブリンとはいえ、女の子にお世話をされるなんて羨ましい。

リムルが完全回復するまでは、俺がなんとかするしかないか。

リーアル

「・・・取り敢えず、寝よ。」

その日はもう寝ることにした。

―翌日―

次の日の朝になり、目を覚ました。

リーアル

「う~~~~ん！ さて起きるか。」

???

「リーアル様、おはよう御座います。」

リーアル

「ああ、おはよう。・・・!!?」

「?」
???

これは夢か幻か?

今俺の前にとんでもない美女がいる!?

銀色の髪と尻尾、金色の瞳。

確実にEほどある形の綺麗な胸。

綺麗な腰のくびれ。

丸くハリのあるお尻。

正直、見入ってしまう程綺麗で、「なんで裸?」と言う疑問が霞んでしまう。

???

「あの・・・リアル様?」

リアル

「ハッ! ごめん、思わず見入ってしまった。」

???

「いいえ、気にしてませんから。」

「…………むしろ、見て欲しいです。今の私を。」
／／／／／／／

リアル

「いやいやいや!!」
／／／／／／／

ほんとに誰なんだ?

この妙に大胆な女性は?

相棒

『解 個体名・葛乃葉です。』

リアル

「……………はあ!」

葛乃葉?

「?!」

目の前にいるのが葛乃葉?

彼女は何方かと言えば美少女だったろ?

それが今はどうしてこんな美女になった?

リアル

「え〜つと、葛乃葉、なのか？」

葛乃葉

「はい。そうです。」

リアル

「昨日の今日で、一体何があった？」

葛乃葉

「それは、名を頂いたからです。」

リアル

「・・・え？ そんだけ？」

葛乃葉の話だと。

『名持ちの魔物』になることは、魔物としての格が上がり、その魔物に進化をもたらす場合があるみたいだ。

葛乃葉の急成長も、進化によるものらしい。

リアル

「じゃあ、今葛乃葉は種族も違っているのか？」

葛乃葉

「はい。本来なら長い年月をかけないと、到底その領域に至れないのですが、リアル様から名を頂き、魔素を分けて頂いた事で今の私は、善狐族から『龍天狐』りゅうてんこに進化しました。

リアル

「龍天狐。」

確か千歳を超えた狐が、強力な力を持ち、神の領域に到達した狐のことを『天狐』と呼ばれていたはず。

そこに俺の龍としての魔素が加わり、龍の因子を持つ『龍天狐』に進化したんだらう。

さらにその上に『空狐』という存在がいたはずだが。

彼女はさらに、進化する可能性があるのだろうか？

???

「主様！ おはよう御座います。」

すると、俺と葛乃葉のいる天幕にまたしても美少女が入ってきた。

葛乃葉同様裸で、赤い髪と尻尾。

緑の瞳に、幼さの残る可愛らしい顔立ち。

体型は、葛乃葉に比べると起伏がそれほどなく、スレンダーな体型だ。

リアル

「え〜つと、もしかしてお前・・・アーセナか？」

アーセナ

「はいー！」

なんとなくそうじゃないかと思っていたが、当たったようだ。

だが、これはどう言うことだ？

昨日まで普通に狼の姿だったのに、人型になっているんだが？

リアル

「お前も進化したのか？　けど、なんで人型に？」

アーセナ

「それは多分、私がそれを望んだからだと思います。」

リアル

「望んだ？」

進化する際に本人が潜在的に望んでいることが、反映されるらしい。

身体的な成長を望めば、そのように進化し、潜在的な成長を望めばそのように進化するらしい。

今回のアーセナの場合、身体的な成長と進化を望んだ結果、このように愛くるしい人型になったのである。

ちなみに、今の彼女の種族は『龍人狼』ドラゴウルフと言う種族になったらしい。

リアル

「なるほどな。それで今の人型の姿か。」

アーセナ

「はい。」

リアル

「ところで二人共・・・」

葛乃葉・アーセナ

「はい？」

リアル

「・・・取り敢えず、これを着ろ！」

いい加減に目のやり場に困るので、さつきからスキル『粘糸・鋼糸』で編んでいた服を着せた。

服と言っても、何処からどう見ても白い色のスポーツインナーとスパッツである。

以前編み物の本を読んでいた時の知識が、こんなところで役に立つとは。

因みにサイズは、『龍瞳』ドラゴンアイの解析鑑定でバッチリである。

おかげで二人のスリーサイズもわかってしまった。

葛乃葉

「・・・リアル様、これ・・・すごく着心地がいいですね。」

アーセナ

「ん〜！ スベスベで気持ちいです。」

リアル

(・・・これはこれで・・・いやいや、考えるのはやめよう。)

これ以上考えると、本気でこの二人に対して良く無い事をしてしま
いそうだ。

リアル

「・・・なあ、アーセナ。」

アーセナ

「はい？ なんででしょう？」

リアル

「ちよつと気になっていたんだが？」

アーセナ

「？」

そう、彼女に対してどうしてもやって見たい事があったのだ。
ちよつとした好奇心だが。

俺は、アーセナの前に移動して。

リアル

「・・・お手。」

と言って手を出す、アーセナは耳と尻尾をピンツ！と伸ばして。

アーセナ

「ワン！」

と鳴いて、お手をしてきた。

リーアル

（おお！ 可愛い！）

葛乃葉

（か・・・可愛い！）

アーセナ

「・・・ハッ！ 何させるですか、主様！」

リーアル

「可愛かったぞ。」

葛乃葉

「ええ、可愛かったわ。」

アーセナ

「むく、アーセナは犬じゃなくて狼ですから〜！」

と、可愛いアーセナをみたことだし、俺達は取り敢えず外に出てみることにした。

そこにいたのは、進化したゴブリン達と牙狼族だった。

一番驚いたのはリグルドだ。

昨日までは杖をついたヨボヨボの爺さんだったのに、今は筋骨隆々のゴリマツチヨになっていた。

思わず、「誰お前!!」と驚き、聞いてしまった。

他のゴブリンも、雄のゴブリンは『ホブゴブリン』に、雌のゴブリンは『ゴブリナ』に進化していた。

そして、牙狼族も何故か進化していた。

リムルが名前を付けたのは、長の息子の嵐牙だけなのにな？

嵐牙に聞いてみると。

嵐牙

「我々牙狼族は、『全にして個』なのです。」

「我が新たに一族の長となり、我と同胞達の繋がりは、より強固になり

ました。」

「故に、我の名が種族名になったのです。」

「今の我々は、牙狼族ではありません。今の我々は『嵐牙狼族』テンベストウルフなのです。」

つまり、名付けをされた嵐牙が進化したことで、種族全体が進化したってことか。

嵐牙狼族の中でも、嵐牙の変化が一番顕著だ。

以前は2mくらいの大きさだったのに、今は5mくらいの大きさになっている。

あと、頭に一本の角が生えている。

そして、リムルが完全回復した日。

進化した村の住人を見て、俺同様驚くのがだった。

リムルも復活に、改めて村の住人全員で話し合いの場を設けた。

リムルが校長先生のモノマネをした時は、懐かしさの余り吹き出してしまったが、ゴ布林達には通じなかった。

まあ、当然だが。

そこで決まったルールは。

一つ。

・人間を襲わない

二つ。

・仲間内で争わない

三つ

・他種族を見下さない

ここでリグルが、ルールその一について「何故ですか？」と質問してきた。

うん、疑問を持つことは良いことだ。

その質問に対するリムルの答えは。

リムル

「俺達が人間が好きだからだ。」

であった。

それでひとまず納得してくれたようだが、実際、人間達とは仲良くしておいて損はないと思う。

だが、俺は一つ付け加えることにした。

リーアル

「ただ、人間達がこつちを殺すつもりで襲い掛かってきたら、その時はお前達も抵抗しろよ。」

「わざわざ殺されてやる必要はないからな。」

世の中には、良い奴もいれば悪い奴もいる。

それは人間であれ、魔物であれ変わりはない。

仲良くする気があるのなら、受け入れるし、仲良くできないのなら、無理をして付き合う必要はない。

次はそれぞれの役割分担だな、

村の周囲を警戒する、警備班。

食料調達をもらう、狩猟班。

村の整備や拡張などをやってもらう、整備・開拓班。

あと、それらを纏めて報告してもらう、調停役。

こうやって考えると、やること山積みだな。

リーアル

「.....」

『なあ、リムル。』

リムル

『どうした?』

リーアル

『提案なんだが、リグルドにみんなのまとめ役になってもらったらどうだ?』

リムル

『ああ、ちょうど俺もそう考えていたところだ。』

どうやらリムルも同じことを考えていたようだ。

と言うわけで、リグルドにはこの村の調停役『ゴブリン・ロード』に任命した。

それを聞いたリグルドは、涙を流し。

リグルド

「ハハアー!! このリグルド、身命を賭してその任、引き受けさせていただきます!」

と言つて、引き受けてくれた。

『君臨せずとも統治はせず』・・・いい言葉だよな。

まあ、最終的な決定は俺とリムルがするわけだけど。

けど、俺達の指示がないと何も出来ない様では話にならないからな。

警備や、食料調達に関しては問題なさそうだ。

目下一番の問題は、やはり衣食住の衣と住だな。

一応、ゴ布林達に家を建ててもらったが、やはり知識がないのか、まともな出来ではない。

ゴ布林達は謝っていたが、建築についての知識がないのなら仕方がない。

衣服に関しても同じである。

今は俺とリムルのスキルのおかげで、ゴ布林達は『粘糸・鋼糸』の糸で作ったスポーツインナーとゴブリナにはスパッツ、ホブゴ布林にはインナーパンツを履いてもらっているが、服とは呼べない。

荒布くらいなら作れそうだが、本職の人が作ったそれと比べると劣る。

リグルドと話し合った結果、以前何度か取引をしたものがあるらしい。

そいつらなら、もしかしたら協力してくれるかもしれないと言っていた。

それは、『武装国家 ドワルゴン』に住む『ドワーフ族』である。

あの鍛冶の達人のイメージがある、あのドワーフである。

翌日。

リムルはドワルゴンに行くことになった。

お供には、リグル、ゴブタ、他に3名

そして、嵐牙を筆頭に嵐牙狼族達。

計12匹が行くことになる。

いざという時の備えと、村の整備と拡張に協力するために残ることにした。

正直に言くと、俺も行きたかった。

まあ、また次の機会があるだろう。

リムル達の帰りを待ちながら、村を少しでも発展させておくことにしよう。

|||||

○オリキャラ紹介

名前：葛乃葉

種族：龍天狐

武器：アーマーブーツ（近接戦闘用）

鉄扇（仙術用）

好きな物：甘い物・リアル様

嫌いな物：辛い物

B：W：H：95：66：92（Eカップ）

所持スキル

UQスキル

・ヨステレイト仙術者

仙術の効果が増幅する

その他に、『神足通』『天眼通』『天耳通』『思考加速』のスキルを持つ

・神足通：自分の行きたい場所に、行くことができる

・天眼通：遠くの出来事や、隠している物を見通す

・天耳通：あらゆる音や声を、聞き取ることができる

・思考加速：通常の500倍に知覚速度を上昇させる

EXスキル

・魔力回復上昇

魔力が回復する速度が上昇する

・気功術

『気』を操ることができる

体内の『気』を循環させ、コントロールし能力を強化する『内気功』

他者から『気』を受け取ったり、外部へ排出し治療や攻撃に使う

『外気功』がある

・多重結界

異なる種類の結界を張り、さまざまな攻撃に対処する

Cスキル

・痛覚耐性

痛みに対して耐性を得る

・恐怖耐性

恐怖に対して耐性を得る

・脚術の心得

足を使った攻撃や技術アーツを使用する際、威力と命中率に補正が掛かる

仙術

・炎弾乱射えんだんらんしゃ

炎の玉を複数生み出し、対象に向けて複数の炎の弾丸を発射する
炎の球は、術者が解除するか、術者の魔力が尽きるまで止まり続ける

術者の魔力が尽きるまで撃ち続けることができる、半永久砲台

・水圧閃刃すいあつせんじん

圧縮した水をレーザーのように撃ち出す

射角を操作することで、物を切断することができる

指先から放つが、水の球を複数作り、そこから射出することもで

きる

・風神爆封ふうしんばくふう

対象を風の牢獄に閉じ込める

後に、圧縮された風の刃が牢獄内の対象を切り裂く

・地烈隆起ちれつりゅうき

土を操作する

用途は多々あり、攻撃にも防御にも使える

他にも農業や地面の整地などにも使える

土のある所でしか使えない

・心気合一しんきごういつ

筋力強化・耐久力強化・速度強化などの身体強化を行う

・鎧袖一触がいしゅういつしよく

腕や足、武器や鎧などにさまざまな能力を付与する

人物紹介

元善狐族の少女。

幸運をもたらす種族と言われ、人間族から狩りの対象とされたこともあり、個体数が少ない。

ジユラの森より南の国に住んでいたが、住んでいた国と自分の価値観が噛み合わず国を出る。

修行も兼ねて旅をしていたが、ジユラの森で牙狼族の勢力争いに巻き込まれ、重傷を負う。

リアルIIテンペストに救われ、彼に名を与えられた事で、善狐族から龍天狐に進化し、リアルに尽くすことになる。

進化したことで、美少女から美女になり、強大な魔素を持つようになる。

仙術という魔法とは違う術を使う。

本人は足を使った近接戦闘が得意で、仙術はその際の身体強化に使うのがほとんど。

容姿

イメージは『魔導巧殻 闇の月女神は導国で詠う』に登場するネネカIIハーネス。

髪や頭の耳と尻尾の色が銀色。

瞳の色は金色。

名前：アーセナ

種族：龍人狼

武器：ステークシールド

好きな物：昼寝・主様（リアル）

嫌いなもの：ベトベトする物・湿っぽい所

B：W：H：80：55：79（Bカップ）

所持スキル

UQスキル

・マモルモノ 専防者

防衛戦において絶大な身体強化の恩恵を受ける

『戦況把握』『絶対防御』『多重結界』『思考加速』を持つ

・戦況把握：戦場の状況を把握することができる

・絶対防御：盾を持っている場合、どんな攻撃を受けても盾にも自身にも傷一つ付かない

ただし、痛みは感じる

・多重結界：異なる種類の結界を張り、さまざまな攻撃に対処する

・思考加速：通常の400倍に知覚速度を上昇させる

EXスキル

・活性化

体の細胞を活性化させ、自然治癒能力を促進させる

・前進防御

他者に対する遠隔攻撃（矢や投石などの攻撃・魔法攻撃）の標的を自分に移し替える

・同朋活性

味方と認識する者の各種基礎能力値を強化する

Cスキル

・思念伝達：念話が可能になる

複数人での会話も可能

・超嗅覚：鋭い嗅覚で周囲の状況を探ることができる

・威圧：気迫や咆哮等で、周囲のものに恐れを抱かせる

・反撃倍加：武器で反撃した際に、相手が受けるダメージを倍にする

る

・痛覚耐性

痛みに対して耐性を得る

人物紹介

元牙狼族の少女

通常の牙狼とは違い、体毛が赤い

別の部族との争いにアーセナの一族は敗北し彼女だけ逃げ延びる。

後に嵐牙（後にリムルが名付け）の部族に拾われるが、余所者であり体毛が赤いことで周囲から孤立する。

心を許せるのは、親友の嵐牙と、嵐牙に従う複数の牙狼達だけだった。

リアルに名を与えられ、ドラゴウルフ龍人狼に進化し、人の姿を得る。

明るく活発な性格で、主のリアルを信頼しており、よく甘えて来る。

人の姿を得てからも、嵐牙とは無二の親友。

足の速さは健在で、全力疾走した嵐牙と並走できるほど足が速い。

自身のスキルを確認してからは、闘い方を一新し、盾を使った防御とカウンターに特化した戦い方をするようになる。

容姿

イメージは Venus Blood-HYPNOR のノエル。

髪と耳と尻尾の色が赤色

耳は垂れた耳ではなく、立ち耳。

|||||

リムル||テンペストの『大賢者』の声は、c.v. 豊口めぐみさんです
すが

リアル||テンペストの『相棒』の声は、c.v. 沢代りずさんです

素材探しと開発、そして新しい仲間

リムル達は武装国家ドワルゴンへ向けて出発した。

ドワルゴンへは大河に沿って北上した先にあるらしい。

歩いて行くと二ヶ月かかるが、牙狼族から嵐牙狼族に進化した狼達ならもっと早く辿り着けるだろう。

――1日目――

俺はこの村に残り、村の防衛と発展に役に立とうと思う。

そこで俺はリグルドに聞いてみた。

リグルド

「海ですか?」

リーアル

「ああ、この近くにないか?」

なぜ海がないか聞いているというと、別に遊びたいわけではない。

海があれば色々採れるからだ。

何より、『塩』が欲しい。

この村は基本、焼くか生食の二択だからな。

塩があれば大抵のものは美味しくいただける。

リグルド

「・・・そうですね。」

「ここから南に行けば、海があるのですが・・・」

リーアル

「何か問題でもあるのか?」

リグルド

「はい。実は、このジュラの大森林は大陸の東側にあるのですが、この森の周辺にはいくつかの国があるのです。」

リグルドの話だと、今回ドワルゴンに言ったリムル同様大河に沿って南に行けば海に出られるらしい。

しかし、途中に大河が二股に分かれている所があり、一方は『忘れられた竜の都』と呼ばれる国があり、そこには魔王の一人『破壊の暴

君』ミリム・ナーヴァが治める国であり、その国の真ん中を突っ切るように大河が流れているためこのルートは、一步間違えば魔王の怒りを買う恐れがある。

もう一方は先ほどのミリム・ナーヴァの支配領域ともう一人の魔王『獅子王』カリオンの支配領域『獣王国ユーラザニア』の国境沿いを流れるルートである。

しかし、このルートは下手をすれば二つの国の勢力から怒りを買う恐れがある。

リアル

(て言うか、この世界って魔王がいるのか?)

(・・・いや、ヴェルドラは勇者が居るって言ってたし、その対の存在の魔王がいても不思議じゃ無いか。)

リグルド

「海に何かあるのですか?」

リアル

「ああ、塩や海藻とか、他にも海の幸とかが取れるかと思っただけ。」

リグルド

「シオ? ですか?」

リグルドのこの反応。

もしかして塩を知らないのか?

まあ、彼らの食事は焼くか生だもんな。

『調理』という概念がそんなに伝わっていないのだろう。

リアル

「岩塩でもいいんだけどな。」

リグルド

「ガンエン? それもシオというやつですか?」

リアル

「ああ、海の海水から取る塩と違って、以前は海だった所や舐めると塩っぱい味がする湖が干上がった跡地から採れることもあるんだけどな。」

リグルド

「元は海だった所・・・舐めると塩っぱい?」

俺とリグルドが話していると、後ろから話しかける者がいた。

アーセナ

「主様。」

リーアル

「うん? どうしたアーセナ?」

アーセナ

「私、もしかしたら・・・そのガンエン? と言うの言ってるかもしれません。」

リーアル

「! 本当か?」

俺はアーセナの案内で村の南の方向に1時間ほど歩いた所まで来た。

アーセナは鼻を利かせ、何かを探しているようだ。

暫くそうしていると。

アーセナ

「スンスン・・・スンスン・・・! 主様、ここを掘ってみましょう。」

リーアル

「ここか?」

アーセナ

「はい!」

俺とアーセナは地面を掘ってみる。

暫く掘ると、そこから白い塊が出てきた。

そこから周囲の土を掘り進めたら、直径1メートルほどの塊が出てきた。

リーアル

「どれ。」

俺は指を擦り付け、その指を舐めてみた。

リーアル

「・・・うん。」

(相棒、どうだ?)

相棒

『告 解析鑑定の結果が出ました。』

『この白い塊は・岩塩で間違いありません。』

リーアル

「間違いないみたいだな。」

アーセナ

「これが岩塩ですか？」

リーアル

「ああ！ でかしたぞアーセナ！」 ナデナデ

アーセナ

「あー！・・・えへへ。」

頭を撫でてあげると、目を細めて気持ち良さそうに笑顔になる。

俺は月闇を取り出し、岩塩の塊を無限収納にしまう。

その日の夜は採れた塩を使って肉やキノコを焼いてみた。

やはり塩が有ると無いとは、結構味に差が出るものだ。

ゴ布林達も、いつもと一味違う肉やキノコの味に感動していた。

12日目

この世界に来てゴ布林達の村のおさの一人になって、ゴ布林達の生活を見てきたが、やはり基本は自給自足である。

自給率を上げるためには自然の恵みだけでは限界がある。

ならば、自分達で育てるしかない。

と言うわけで。

リーアル

「リグルド、この辺りに貝はいるかな？」

リグルド

「え？ 貝ですか？」

リーアル

「正確に言くと、貝殻があるところを知ってるか？」

リグルド

「貝殻ですか、それならこの村から西に湖がありますので、辺りに幾ら

でも有るはずですよ。」

そう言っていたので、俺はアーセナと葛乃葉、後複数のゴブリン達を連れて、湖に来ていた。

リグルドが言っていた通り、湖の周辺には大量の貝殻が落ちていた。

みんなと協力して拾っていると、不意に足が引っ張られる様な感覚がした。

リアル

「うん？」

何かと思つて引っ張られた右足を見ると、突然湖面から。

ザバアアア!

と、湖の中から何かが飛び出してきた。

リアル

「?! おっとー!」

咄嗟に腕?らしき部分を掴んで止める。

その飛び出してきた何かを見ると。

リアル

「・・・蟹?」

そう、大きさは俺の知っている蟹より倍くらい大きいのが、間違いなく蟹である。

相棒

《告 解析鑑定が完了しました。》

《ジュラグリーンタラバ。》

《ジュラの大森林に生息する蟹の魔物。》

《湖や湿地帯などに生息しており・普段は身を隠し・目の前を獲物が通り過ぎるときに・腕の二本の鋏を用いて捕獲し・捕食します。》

見た目は蟹だけど魔物なんだな。

・・・食べるんだろうか?

相棒

《告 ジュラグリーンタラバは・食用に適しています。》

リアル

「マジか！ よし。」

俺は無限収納から、ゴブリン達が作ってくれたロープを取り出す。まず蟹をひっくり返してふんず蹴る。

その状態で腕と足をロープで縛り、さらにハサミの部分を開かないように縛ってしまえば。

リアル

「よっしゃー！」

縛り上げた蟹を無限収納にしまってみんなと合流した。

俺が蟹を捕まえたと言うと、みんな怪我がないか心配したが無傷の俺を見て安心していた。

大量の貝殻のついでに蟹を数匹捕まえて、村に帰還した。

途中、ひまわりの種みたいな物を見つけたので、そこら中にある種を片っ端から拾っておいた。

その後は、拾ってきた貝殻をひたすら焼いて、ひたすら砕く作業に移った。

今はまだ準備ができていないが、この貝殻の粉『炭酸カルシウム』があれば畑の肥料に使えるし、砂と水を加えれば『モルタル』になる。

じゃあ、今俺は何を作っているのかと言うと、今回採ってきたひまわりの種から油を抽出している。

今回は圧搾機がないから、無限収納に入れて『相棒』の力で精錬・生成してもらっている。

抽出できた量は大体50グラムくらいだ。

今回は油が50グラムなので小さな物しか作れなかったが、『石鹼』ができた。

本来は一ヶ月ほど寝かす必要があるが、木の型から取り出し、端から1センチくらいの塊を試しに使ってみたら、軽く泡立ったのでおそらく成功だろう。

ゴブリン達や葛乃葉やアーセナも、初めて見る石鹼に興味津々だった。

その日の夜は獲ってきた蟹を使って、蟹鍋を食べた。

元の世界だと、タラバガニの蟹味噌は食用に適さないみたいだが、

このジユラグリーンタラバは普通に食べることができた。
美味かった！
と言っておこう。

―三日目―

この日、俺は村のことをリグルドに頼んで、葛乃葉、アーセナの二人と一緒に別行動をしていた。

本当は俺一人で行うつもりだったが、二人がどうしても言うので連れて来た。

今回は、以前から気になっていたライドブック、『ワンダーワールドブック』の確認をする。

このライドブックは仮面ライダーセイバーの原作本編にも登場しなかった、未知のライドブックだ。

リアル

「・・・まあ、起動してみたらわかるか。」

そうやって俺は、ワンダーワールドライドブックのページを開いてみた。

『ワンダーワールド！』

『この本が開かれし時、不思議な世界への扉が開く・・・』

葛乃葉

「?! 本が！」

アーセナ

「喋りました!?!」

すると、俺達の目の前に巨大な本が出現し、ページが開いた。

リアル

「・・・ブックゲートみたいなものか？」

葛乃葉

「今度は本が出て来ました！」

アーセナ

「これ・・・なんですか？」

見た目はブックゲートのライドブックを使ったときに出現する本

の扉みたいだが、このワンダーワールドライドブックは扉がなくても発動できるみたいだ。

と言うことは、この先にあるのは『ノーザンベース』か『サウザンベース』だろうか？

それとも・・・

リアル

「・・・行けばわかるか。」

そう言つて、俺は本の扉をくぐっていく。

それを見て、葛乃葉とアーセナも慌ててついてくる。

その先にあつたのは、ある意味予想外で、ある意味予想通りの場所だった。

ー???

葛乃葉

「こ・・・これは?!」

アーセナ

「ふわあ〜!」

リアル

「これは・・・思っていた以上にすごいな。」

本の扉を通つた先にあつたのは、原作にあつたワンダーワールドそのものだった。

空には大小様々な浮島が浮かんでおり、巨大な鯨が空を泳いでおり、ブレイブドラゴンやワイバーンが空を飛んでいる。

遠くには一本の巨大な剣が突き刺さり、それに負けないくらい大きな樹がある。

さらには城まである。

そして、そんな中に俺のよく知っている建物があつた。

リアル

「あれは・・・ノーザンベース?」

気になって近づいて見ると、辺り一面に、雪と氷で覆われた神殿みたいな建物があつた。

建物の周囲は結界で覆われていて、侵入者を拒んでいるようだ。その結界に触れてみると。

???

《魔力反応・認証完了！》

リアル・葛乃葉・アーセナ

「?!」

???

《お帰りなさいませ・マスター。》

声が聞こえた後、目の前の結界の一部が開き、内部へ入れるようになった。

葛乃葉

「・・・あの、大丈夫なのでしょうか？」

リアル

「あく、大丈夫だろう。」

さっきの声は俺のスキル『相棒』と同じ声だった。

だからきつと大丈夫。

・・・大丈夫だよな？

そう思いながら内部へ入ると、まるで宮殿のような、超が付く高級ホテルのような、「入って大丈夫？」と思ってしまう空間があった。

左右に一階から三階にまで伸びる大きな階段。

通路全体に敷き詰められた赤い絨毯。

天井から吊るされ、各階を明るく照らすシャンデリア。

そのどれもが高価な代物だと言うことは、見ただけで分かってしまう。

土足で歩いていいか躊躇してしまう。

???

《正面の扉の先へ・お入りください。》

一階の正面に大きな扉がある。

声の通りに、扉を開けると。

部屋の中央には、八角形のテーブルがあり、聖剣やライドブックを解析する装置がある。

その奥にはさらに扉があり、俺の記憶が確かならその先には、修煉場『リベラシオン』があるはず。

左右の階段を登った先には、様々な本が並べられている。

葛乃葉

「あの、リアル様……ここはどう言う所なのですか？」

アーセナ

「なんだかすごい所ですけど!？」

リアル

「……ここは、簡単に言うと秘密基地だな。」

葛乃葉・アーセナ

「秘密基地?！」

俺は二人にこのノーザンベースについて、俺の知りうる限りを教えた。

ほとんど理解できていないようだが、俺の持つワンダーワールドブックがあれば、ここに来る事は出来る。

それだけはわかったようだ。

とりあえずノーザンベースの中核や、リベラシオンはまた今度にして、ワンダーワールドブックで元の場所へ戻った。

その時。

大賢者

《威圧の効果を報告。》

リアル

「うん?！」

大賢者

《逃走16名。 錯乱68名。 失神92名。 失禁23名。》

リアル

「ん? うん??！」

(なんだこれ?)

急に大賢者から報告が上がって来たと思ったら、リムルの奴何やってんだ?

今日は何をしようかと、計画を立てていたらゴブリン達が俺を呼びに来た。

何事かと思つて来てみると、そこには1メートルくらいの大きな蜘蛛がいた。

見た目は真つ白な体に、黒の斑点が等間隔でついていて、ピンクの八つの目を持つ蜘蛛だ。

リアル

「こいつがどうかしたのか？」

ゴブカツ

「はい。村の警備に出たらこの蜘蛛の魔物が現れて、討伐しようとしたのですが・・・」

ホブゴブリンの『ゴブカツ』はそう言つて魔物の方を見ると、蜘蛛の魔物は首を振ったり、手を振ったりして、まるで『敵意はない』と言ふことをアピールしているようだ。

もしかしたらこの魔物、高い知性があるかもしれないな。

リアル

「うくん・・・ここは任せてもらえるか。」

ゴブカツ

「危険では？」

リアル

「いや、大丈夫だよ。」

そう言つて俺は、蜘蛛の魔物に近づく。

リアル

「なあ、お前は俺の・・・いや、俺達の敵か？」

蜘蛛の魔物

「！」フルフル

魔物は顔を左右に振る。

今の質問に受け答えができると言ふことは、知性がある証拠だな。

リアル

「じゃあ、お前は『魔力感知』が使えるか？」

蜘蛛の魔物

「？」

首を傾げている。

使えないんだろうな。

俺は、ちよつとしたコツを教えて、魔力感知を獲得できないか試してみた。

すると、魔物が驚いたようにリアクションし、あつちこつちに顔を振っている。

どうやら獲得できたようだ。

リアル

「どうだ？ できたか？」

蜘蛛の魔物

「!? 貴方ノ声ガ聞こエル！」

リアル

「こつちも聞こえるぞ。 魔力感知のおかげさ。」

蜘蛛の魔物

「ソナ事ガ出来ルンデスネ。」

リアル

「ああ。 それで、お前はここに何をしに来たんだ？」

蜘蛛の魔物

「・・・実ハ」

この蜘蛛の魔物曰く。

この魔物は、ヴェルドラが封印されていた洞窟で、他の魔物に襲われないように生きてきたが、ここ最近このジユラの森に強い力を持った魔物が生まれた気配を感じ、この森にやって来たらしい。

そして、その気配を辿るとこの村に行きつき、村の状況に驚いたのだ。

この村にはホブゴブリンと嵐牙狼族が共存して生活している。

こんな状況、普通ならありえない。

もしかしたら、この村なら安心して過ごせるのではないだろうか？
リアル

「なるほど、そう思って思いつ切って俺達の前に姿を現したわけか？」
蜘蛛の魔物

「ハイ。」

リアル

「うくん……」

(思考加速！ 相棒、どう思うこいつ?)

相棒

《告 解析鑑定の結果・この魔物は『スモールホワイトスパイダー白小蜘蛛』であることが確認
されました。》

《人間が定めた脅威度で表すと・Eランクに相当する魔物です。》

《進化前のゴブリンでも・一対一で争っても・油断さえしなければ負けることはありません。》

リアル

(ちなみに、進化した今なら?)

相棒

《解 状況にもよりますが・おそらく瞬殺かと。》

リアル

(マジか!)

相棒

《ただ・この個体は高い知性を確認しました。》

《突然変異により・高い知性を獲得した可能性があります。》

リアル

(ふむ……面白そうだな。)

解析鑑定の結果、こいつには俺やリムルと同じ、『鋼糸』と『粘糸』
を持っている。

それに、『気配遮断』に『毒牙』か、他にも幾つかあるが、ずいぶん
隠密に特化した奴だな。

もしかしたら、この村の警備の強化に使えるかもしれないな。

リアル

「わかった。この村に住むことを許可しよう。」

蜘蛛の魔物

「！ イインデスカ？」

リアル

「ああ。ただし、この村で暮らすからには、しっかりと働いてもらうかな。」

蜘蛛の魔物

「ハイ！ 自分ニ出来ル事ナラ。」

リアル

「決まりだな！」

「あと、この村には俺以外にもう一人主が居るけど、今外出して居ないから、そいつが帰って来たら改めてお前を紹介するからな。」

蜘蛛の魔物

「ワカリマシタ。以後、ヨロシクオ願イシマス。」

と言うわけで、この村に新しい仲間ができた。

ゴブリン達や嵐牙狼族達、葛乃葉やアーセナに紹介したら、意外にも快く受け入れてくれた。

そして、こいつにも名前をつけた。

葛乃葉やアーセナと似たような感じで、神とか神話、昔話で良いのが無いかと思いついていたら、一つ名前を思いついた。

リアル

「今日からお前は、『かんだた 韃陀多』だ。」

蜘蛛の魔物

「韃陀多！ 有難ウ御座イマス。」

おそらく、今日までの名付けが一番悩んだだろう。

そのせいかな？ 俺の魔素がごっそりと持っていかれた。

今回も4分の1くらいだろうか？

これは、明日になったら韃陀多も進化しているんだろうな。

相棒

《告 大賢者より・魔鉱塊を利用したロングソードの情報が送られて来ました。》

《これにより・無限収納内で・ロングソードの製造が可能になりました。》

リアル

(魔鋤塊を使ったロングソード?)

(昨日の威圧といい、今回のロングソードといい、リムルの奴……ちゃんと交渉しているんだろ?)

とは言え、魔鋤塊を利用したロングソードのレシピを手に入れた。

このレシピがあれば、それを応用して他の武器だつて作れるかも知れない。

15日目

予想通り、犍陀多は進化していた。

犍陀多は『白小蜘蛛』から『スモールアサシンスパイダー暗殺小蜘蛛』に進化していた。

その際、EXスキル『眷属産卵』と言うスキルを獲得したようで、早速卵を産んで自分の眷属を増やしていた。

さらに、EXスキル『眷属支配』と言うスキルで、眷属達に指示を出すことが出来るらしい。

生まれて来た子供達も解析鑑定の結果、『暗殺小蜘蛛』みたいだ。ただ、大きさが掌に収まるサイズになっている。

犍陀多の子供達にはこの村の周囲に散らばってもらった。村と周辺の警備と監視のためである。

間違つて踏んでしまわないように注意しないと。
……と思っていたら、なんと!

犍陀多の子供達は器用にも、上空5メートル程の高さに糸で作った専用の橋……と言うか道みたいなものを作っていたのだ。

下にいる人物に用がある場合は、バンジージャンプのようにジャンプして顔の真横あたりに降りてくる。

俺は再びノーザンベースへやって来た。

目的は、武器がないか?

もしくは、武器に関する本がないか探すためである。

正面ゲートのホールで、質問してみると。
リアル

「なあ、お前って『相棒』か？」

???

《・・・はい。その通りです・マスター。》

やっぱり、思った通りだ。

雰囲気相棒そのものだったし。

どうやら相棒は、このノーザンベースと一体化しているみたいだ。この中にいるときだけ、相棒の声は他の人物にも聞こえるらしい。そして、相棒の案内で当初の目的の武器を見つけることができた。どうやら武器庫のようだ。

ただ、剣士の拠点だから剣しかないと思っていたら、そうではなかった。

武器庫には剣の他に、刀、大銃、ナイフ、戦斧、槍、ハルバート、大鎌、メイス、トンファー、モーニングスター、弓矢、スリングショット。

なんと現代武器の銃もあった。

他には、鉄扇、鉤爪、鎧、盾、籠手などの暗器や防具まであった。

まあ、今の所必要なのはロングソードだけなので、手頃な剣を手にとった。

リアル

「これを使って、魔鋳塊製のロングソードを作れるか？」

相棒

《解 このロングソードは・魔鋳塊製のロングソードを製造する上で・良い材料になります。》

大丈夫のようだ。

試しに無限収納にしまって、相棒に頼んでリムルから送られて来たレシピを元に、魔鋳塊製のロングソードを作ってもらった。

すると、あつという間に終わった。

ロングソードを見ると、仄かに刀身が光っていた。

レシピの記述には、『持ち主のイメージに沿って、成長する剣』らしい。

リアル

「物凄い厨二心をくすぐる剣だな。」

成長する剣なんて、漫画の『魔○騎士レイ○ース』くらいしか知らないが。

つまり、この世界でただ一つの、オンリーワンの武器になると言うことだ。

取り敢えず、今作った剣はリグルにでも渡すことにしよう。

俺は他にもいくつか武器を無限収納にしまい、相棒に頼んで魔鋳塊製の武器に精錬・生成して貰うように頼んだ。

16日目

今日は昨日のうちに作っておいた魔鋳塊製の武器を、この村を警備を担当しているゴ布林達に渡した。

ゴ布林達は最初、「俺個人のものを使うなんて恐れ多い」と言っていたが、「みんなの為に作ったんだから貰ってほしい。」「いざと言う時はその武器で身を守ってほしい。」と言ったら、歓喜を上げたり、涙を流したりして受け取ってくれた。

嵐牙狼族達が羨ましそうにしていた、今度は彼らの防具でも作ってみるか。

劇場版T○Vのラ○バートみたいな感じのやつを。

この日はなんと、周囲に点在する他の村のゴ布林達が、庇護を求めてこの村にやってきた。

だが、数が多い！

相棒に聞いてみると。

相棒

《告 その数・500匹です。》

リーアル

「いひゃー！」

流星にこの村で500のゴ布林は狭すぎる。

開拓するか、新しい土地を探して一から村作りをしないと。

リーアル

(・・・断ったらどうなると思う？ 相棒。)

相棒

《告 現在・ジユラの森では・豚頭族・オーク・蜥蜴人族・リザードマン・大鬼族と言った上位種族よる覇権争いが起きています。》

《進化前のゴブリンでは・淘汰されるでしょう。》

リーアル

(そんな簡単に・・・)

それってリムルがヴェルドラを『無限牢獄』ごと捕食したからだよな。

この場合、俺も共犯になるだろうか？

流石に、淘汰されると分かっているのに追い出すのは、寝覚めが悪すぎる。

だが、ここまで規模が大きくなると、俺だけで事を進める訳にはいかない。

一度リムルが帰って来てからだな。

取り敢えず、今回訪れて来たゴブリン達は村の周囲に一旦散ってもらった。

と言っても、村の中から見える範囲でだが。

住む場所を確保するため、周囲の木々を切り倒したが、ここで活躍したのは魔鋤塊製の剣や斧を持ったホブゴブリン達だった。

彼らが剣や斧を振ると、なんの抵抗もなく「スパツ！」と木が切れてしまうのだ。

切った本人達も、「木を切った感覚がほとんど有りませんでしたー」と、言っていた。

物は試しに、俺もやってみたが本当に切った感覚がなくて、逆に気持ち悪かった。

実は今日の出会いはこれだけでは無かった。

犍陀多の子供達の警戒網に、引っ掛かった魔物がいたのだ。

それは、全長30センチくらいの大きな蜂だった。

犍陀多の子供達の糸で全身を縛られて、プルプル震えている。

他にも全長15センチサイズの前足二本が鋭い槍みたいになっている、複数の蜂達も糸でグルグル巻きになっている。

小さな冠みたいなのを頭に乗せた奴が、女王蜂みたいだ。

ただ、この村を襲いに来たわけではなく、子供達の見えない糸の警戒網に誤って引っ掛かってしまっただけらしい。

敵意はないので、取り敢えず糸を解いてやった。

解析鑑定の結果。

この15センチサイズの蜂は『軍隊蜂』^{アーミーワズ}と言う種族だ。

そして冠に乗せた蜂はその女王で『軍隊女王蜂』^{アーミーワズクイーン}と言う上位種である。

女王は知性があるようで『魔力感知』を教えたら、すぐに習得して会話ができるようになった。

彼女達は今まで住んでいた巣を、新たな女王に任せ新たな巣を探して旅をしていたらしい。

リアル

(分蜂ってやつか?)

そして、たまたま偶然この辺りの上空を飛んでいた時に、さっきの様な目にあつたとの事。

リアル

「すまなかった。君たちの旅を邪魔してしまって。」

女王蜂

「イエ、ソチラノ事情モ分カリマシタカラ。」

そう言ってくれると助かる。

すると、改めて女王蜂が話しかけてきた。

女王蜂

「アノ、宜シケレバコノ村ノ近クニ住マセテハ頂ケナイデシヨウカ？」

リアル

「この近くにか？」

女王蜂

「ハイ。貴方ハ^{ちから}力アル魔人様ト才見受ケシマス。」

「貴方様ノ才側ナラ、安心シテ暮ラスコトガ出来ルト思イマス。」

「貴方様ノ配下ニ加ワラセテクダサイ。」

そう言つて女王が頭を下げると、そばにいた蜂達もそろって頭を下

げる。

まあ、500匹のゴブリンよりマシだろう。

彼女達に住むところの希望はないか、聞いてみると。

女王蜂

「花ガ沢山アル所ガ一番イイデス。」

と言うので、近くを探してみたら村の北の方に300メートルほどの場所に花が咲いている所があり、近くには果実の木がなっている。

ここを見つけたとき、彼女達はとても喜んでいた。

俺は一旦ワンダーライドブックを起動し、ノーザンベースからノコギリやハンマーやのみ等の工具を持ってきた。

リアル

(何でも有るな、ノーザンベース。)

俺はゴブリン達の力を借りて、蜂達の為の木製の小屋を作った。

縦横高さ3メートル位の大ききで、風通しと蜂が外へ出る為の通り道として直径20センチの穴を開けてある。

小屋と言っても、天井に関しては犍陀多がスキル『操糸』で『粘糸』を多く含んだ糸で編んでくれた、防雨性を高めた布を張っているだけである。

俺の世界では蜂にとって暑さは子育てをする上で、障害になる。

この布は「日除け」の意味で天井に張ってある。

念の為に、一人が入れるように横にスライド出来るドアも作っておいた。

素人大工にしては、意外に上手く行った方だと思う。

相棒のおかげでも有るけどな。

相棒

《・・・ふん。》

リアル

(なんか得意げだな。)

ついでに、女王蜂の彼女には『アリスタ』という名前をつけた。

元ネタは養蜂の神様の名前からもらった。

勿論この時も、魔素が4分の1くらい持って行かれた。

彼女も進化するんだろうな。

さて、そんなこんなで村の住人が確実に増えていく。

リアル

「・・・リムルはどうしてるかな？」

「上手く行っているといいけど。」

この時、俺は知る由もなかった。

まさかリムルが、武装国家ドワルゴンで裁判沙汰を起こしているなんて。

そしてそこで、英雄・ガゼルⅡドワルゴに出会っているなんて。

ーリムルsideー

俺は今、裁判所にいる。

そして今俺の目の前には、ドワーフの英雄であり国王、ガゼルⅡドワルゴが鎮座している。

リムル

(・・・ヤバイ！ あいつはヤバイ！)

あの男は本格的にヤバイ！

明らかにこの中で一番強い！

俺も自分の強さには多少自信があったが、この男にだけは絶対勝てない。

こんな男の前で裁判とか、冗談だろ？

|||||

○オリキャラ紹介

名前：犍陀多

種族：暗殺小蜘蛛

好きなもの：糸を使った技の考案

嫌いなもの：寒さ

所持スキル

UQスキル

・隠蔽者
カクレモノ

- ・ 隠密：世界そのものに同化する
- ・ 攻撃に転じる際、効果が薄くなる
- ・ 無音：移動する際、完全に音が立たなくなる
- ・ 思考加速：通常の300倍に近く速度を上昇させる
- ・ パリング：ダメージを確率で無効にする

EXスキル

・ 魔力感知：周囲の魔素を感知し、周囲の状況を認識することができる

意志が込められた音波や魔力を理解できる言葉へ、自動的に変換する

思念を乗せて音波や魔力を発すると、会話も可能

- ・ 猛毒牙：致死性の猛毒を牙を使って、相手に注入する
- ・ 眷属産卵：自分の眷属を生み出すことができる
- ・ 眷属支配：自分の眷属に指示を出すことができる

このスキルを持つ限り、眷属は裏切らない

Cスキル

- ・ 粘糸・鋼糸：粘りのある柔軟な糸と、硬く頑丈な糸を操る
- ・ 操糸：生み出した糸を自在に操ることができる
- ・ 斬糸：斬撃を付与した糸を出す
- ・ 斬撃耐性：斬撃に対して耐性を得る
- ・ 打撃耐性：打撃に対して耐性を得る
- ・ 耐熱耐性：熱に対して耐性を得る
- ・ 状態異常強化：与える状態異常を強化し、成功率が上がる
- ・ 自己再生：体の欠損した箇所、傷ついた箇所を自動的に修復する
- ・ 毒合成：状態異常を与える毒を生み出す
- ・ 薬合成：回復薬、状態異常を回復する薬を生み出す
- ・ 思念伝達：念話が可能になる

複数人での会話も可能

○人物紹介

元々は、ヴェルドラが封印されていた洞窟で隠れながら生きてきたが、ヴェルドラの消失したことで洞窟内の魔物たちが活性化したた

め、洞窟を出てきた。

その途中でリアルが守っているホブゴブリンと嵐牙狼族が共に暮らしている村を発見する。

この村なら安心して過ごせると思ってホブゴブリンたちの前に姿を現した。

リアルから許可をもらい、村に住むことになる。

『犍陀多』という名前を与えられたことで、『白小蜘蛛』から『暗殺小蜘蛛』へと進化した。

進化によつて手に入れたスキル『眷属産卵』と『眷属支配』を使い、村の警備と周辺の監視に貢献する。

基礎能力も上昇しており、今の犍陀多なら嵐牙狼族なら2匹同時に戦つても勝てる。

容姿

イメージは『蜘蛛ですが、何か?』アニメ版に登場する蜘蛛子さん。ファンシーな方ではなく、リアルな方。

外見は『白小蜘蛛』の時は『スモールレッサータラテクト』。

『暗殺小蜘蛛』の時は『ゾア・エレ』。

○

名前：アリスタ

種族：龍蜂女王
ドラゴワスプクイーン

好きなもの：花の蜜・果物

嫌いなもの：暑い日差し

所持スキル

UQスキル

・穿通者
ツキサスモフ

・鋼針：針を使った攻撃の貫通力が増す

・蜂の報復：針を使った攻撃が、相手より後に出た場合、必ず相手より先に攻撃が当たるようになる。

・心核穿ち：実体を持たない者、不定形な者に対してダメージを与える

- ・思考加速：通常の280倍に知覚速度を上昇させる
- ・眷属管理

- ・眷属産卵：自分の眷属を生み出すことができる
- ・眷属支配：自分の眷属に指示を出すことができる

このスキルを持つ限り、眷属は裏切らない

- ・眷属感知：眷属の状態を知ることができる

- ・陣地構築：自らに有利な陣地を作り出すことができる

E X スキル

- ・麻痺毒針：毒針を放ち、相手に強烈な麻痺の状態異常を与える
- ・魔力感知：周囲の魔素を感知し、周囲の状況を認識することができる

意志が込められた音波や魔力を理解できる言葉へ、自動的に変換する

思念を乗せて音波や魔力を発すると、会話も可能

C スキル

- ・状態異常強化：与える状態異常を強化し、成功率が上がる
- ・熱源感知：周囲の熱源を感知する
- ・思念伝達：念話が可能になる

複数人での会話も可能

- ・爆発耐性：爆発に耐性を得る
- ・痛覚耐性：痛みに耐性を得る
- ・耐熱耐性：熱に対して耐性を得る
- ・自己再生：体の欠損した箇所、傷ついた箇所を自動的に修復する

○人物紹介

以前住んでいた巣を、次の女王に任せ半数の眷属達と安住の地を探して旅をしていた。

そんな時、犍陀多の子供達が張り巡らせた警戒網の糸に誤って引っ掛かってしまい、眷属諸共拘束されてしまう。

リアルに出会い、彼の配下となることで名前と新しい住処を与えられ、眷属達と巣を作っている最中。

『アリスタ』の名を与えられ、『軍隊女王蜂』から『龍蜂女王』に進化した。

リーアルの要望で、定期的にハチミツを届けている。

眷属達もアリスタの進化に合わせて、『軍隊蜂』から『軍隊龍蜂』アーミードラゴワスに進化した。

新たに生まれてくる眷属達も軍隊龍蜂で、それぞれ『偵察』『育児』『採取』の役割を与えられている。

容姿

イメージは『ポケットモンスター』の『ビークイン』で、冠を載せたイメージ。

ちなみに眷属の容姿は同じく『ポケモン』の『スピア』である。数は少ないが、女王であるアリスタを守る、近衛兵の役割を与えられた者の容姿は『メガスピア』になっている。

名前：ゴブカツ

種族：ホブゴブリン

人物紹介

なんて事のない、モブのホブゴブリン。

この先活躍するかは、本人次第。

ドワーフの国、裁判

ーリムル side ー

俺は今、武装国家ドワルゴンに来ている。

目的は俺の住んでいるゴブリンの村に技術者を招く為で有る。

三日目の昼頃にドワルゴンの検問所に着いたのだが、そこで複数のゴロツキに絡まれ、仕方なく撃退した。

しかし、そのせいで警備兵に捕まってしまった。

だが、この俺が牢屋の中で樽の中に入れられている時に、鉱山で事故が起き複数の作業員が巻き込まれたようだ。

そこで俺はとっておきの回復薬を提供したのだ。

そのお陰で、作業員は全員無事だったようだ。

翌日無事釈放された俺は、警備隊の隊長のカイドウさんと一緒に街へ繰り出した。

ドワーフの国はゴブリンの村に比べてとても文明的な国だ。

中でも特にすごいのは武器や防具である。

一部の武器はうっすら光って見える。

カイドウさんの話だと、これから行く鍛冶屋にそれらの武具を作ったドワーフがいるようだ。

その鍛冶屋に行くと、「カーン！」「カーン！」という音がした。

目の前にいるのはカイジンと言う鍛冶職人。

頑固一徹の職人みたいだ。

すると、昨日牢屋で会ったドワーフの3兄弟と出会った。

彼らは長男のガラム、次男のドルド、三男のミルド。

そしてその奥に、一心不乱にハンマーを叩く女のドワーフが一人いる。

剣を鍛えているみたいだ。

カイジン

「なんだ？ お前達知り合いか？」

ガラム

「カイジンさんこの方ですよ！」

「昨日俺達を助けてくれたスライムは。」

カイジン

「何！ そうだったのか。」

ガラムからそう聞くと、カイジンは俺に礼を言ってきた。

しかし、今は立て込んでいるようだ。

どうやら今週末までに、ロングソードを20本納品しなければなら
ないらしい。

だが、作ろうにも素材が足りない。

カイジン

「国が各職人に割り当てた仕事だ、引き受けたからには、出来なかった
じゃ最悪、職人の資格を剥奪されかねない。」

カイドウ

「無茶な仕事なら、引き受けなければいいじゃねえか？」

リムル

「その通りだ。」

カイジン

「俺だって最初はむりだって言ったんだよ！」

「そしたら、あのクソ大臣のベスターが・・・」

「おやおや。 王国でも名高い鍛冶職人であるカイジンともあろう
者が、この程度の仕事もできないのですか？」

と言ってきたらしい。

しかも、国王の前で。

そのベスターという大臣、かなり嫌なやつだな。

どこの世界でも、人間関係って面倒だな。

あと五日で仕上げないといけないのに、いまだに一本しか作れてい
ないらしい。

ドワーフ三兄弟、そして未だに槌を降り続けている女ドワーフ。

そしてカイジンの5人体制で、フル回転で回している状況。

リムル

「ところで彼女は？」

カイジン

「うん？ ああ、あいつか。」

「あいつは……まあ、俺の自称弟子だ。」

リムル

「弟子?!」

カイジンの弟子

「フツ！ ……うん？」

「あれ？ お客さんですか？」

カイジン

「オメエ、今気づいたのか？」

かなり集中していたもんな。

彼女はカイジンの腕に惚れ込んで、所属していた王国騎士を除隊して、カイジンに弟子入りしたらしい。

カイジン本人はそれを認めておらず、自称弟子とのこと。

カイジンの弟子

「初めまして、私はエイダと言います。」

彼女の名前は、エイダードリュウズ。

なんか彼女だけ他のドワーフと違う。

まず肌が色白だし、体格も細身だな。

ただ、華奢かと言われればそうではなく、きちんと引き締まった健康的な身体付きをしていた。

やはり、元騎士と言うだけあって、鍛えていたのだろうか？

ロングソードの足りない材料は『魔鉱石』という鉱石だ。

ドワーフ三兄弟が昨日鉱山に採りに行ったが、甲殻アーマサウルストカゲが出て坑道が崩れてしまったらしい。

しかし、どのみち掘り尽くしており、もう魔鉱石は残っていないようだ。

その時俺は気付いた。

リムル

（あれ?! 魔鉱石って、俺……持ってるよな!）

大賢者

《告 胃袋に収納されている・『魔鉱石』を現在精錬・生成中・すでに完了している・『魔鉱塊』を取り出しますか?》

リムル

(YES!)

俺はカイジン達の前に魔鉱塊を吐き出した。

カイジン達は最初、純度の高い魔鉱石だと言っていたが、俺がよく見ると言うと、カイジンは目の前にあるそれが魔鉱石ではなく、魔鉱塊であることがわかり、驚いていた。

これがあれば、さらに強力な武器が作れると言う。

カイジンは明らかに目の色が変わっていた。

譲ってくれるのなら、代金はこっちの良い値を出すとも言ってきた。

どうしようかと、勿体ぶっている俺に、「俺に出来る事なら、なんでもする。」と言ってきたので、俺は親父さんに。

リムル

「親父さんの知り合いで、技術指導として俺の村まで来てくれる人が居ないか、探して欲しい。」

と言ったら、カイジンは予想外だったのか。

カイジン

「……そんなことで良いのか?」

と言ってきた。

今俺の村に必要なのは、衣食住の『衣』と『住』だ。

あと、定期的な衣類や武具の調達も頼んだ。

カイジンはそれを、引き受けてくれた。

「任せておけ」と。

話が一段落すると、早速5人は仕事に取り掛かった。

しかし、今から20本揃えらるとなると、かなりの無茶だよな。

リムル

(大賢者さん、ちょっと宜しい?)

大賢者

《はい。》

俺はカイジンに、すでに出来ているロングソードを見せてもらった。

これは見事だ！

素人目にもカイジンの腕が一流だと言うことがわかる。

この剣もうつすら光って見える。

カイジン曰く、魔鉱石を剣の芯に使っているかららしい。

魔鉱石を使用して鍛えた武器は、「持ち主のイメージに沿って、成長する武器」になると言っている。

すごい一言だ！

こんなのを見せられたら、この親父さんにうちに来て欲しくなるな。

しかし、カイジンはこの国の王様に恩義があるだろうし、無理はできないな。

俺は持ってきてくれたロングソードを、『捕食者』で捕食した。

周りのみんなが慌てているが、心配ない。

リムル

(大賢者さん、解析鑑定よろしく！)

大賢者

《解 魔鉱石を使用したロングソード・・・解析鑑定・成功しました。》

リムル

(魔鉱塊を使用して、コピーを作ってくれ。)

大賢者

《了。・・・魔鉱塊を使用したロングソード20本・コピー完了。》

コピーしたロングソードを出すと、その場にいる全員が大きな叫び声を上げた。

カイジン達はすぐに剣の鞘を作って、納品しに行った。

しかし、よく見ると一本多かったので、それだけ俺が持っている。

リムル

(大賢者さん、一本多いよ。)

大賢者

《告 21本目は・私の遊び心です。》

リムル

(なんだすりゃ?)

よく見るとその剣は、まるで俺が使える『水勢剣流水』とよく似ていた。

大賢者曰く、外見を真似ただけの魔鉱塊を使用したロングソードだそうだ。

これはこれで面白そうだし、リアルに見せてみるか。と思っっていたら。

エイダ

「リムルさん!」

リムル

「は! はい?」

エイダ

「その剣、見せてもらって良いですか?」

リムル

「え? 良いけど。」

そう言っつて剣を渡すと、彼女の目つきが変わった。

まるで、「原子の動き一つ一つを見逃してたまるか!」と言わんばかりに、剣を凝視している。

そうこうしている内に、カイジン達はロングソードの納品を済ませてきたようだ。

すると、カイジン達が打ち上げをすると言ってきた。

「ぜひ俺にも参加して欲しい」と言っつて。

リムル

「いや、そんないいよ。」

(俺味覚ないし。)

ガルム

「まあ、まあ、そう言わず。」

「綺麗なお姉ちゃんだっていっぱいいるよ。」

リムル

ピクツ!

ドルド

「そうそう! 『夜の蝶』って言ってね、若い子から熟女まで、紳士御用達の店だよ。」

リムル

ピクピクツ!

ミルド

コクコク

リムル

(なんか言えよ!)

カイジン

「おいおい、旦那がこねえと、始まらないぜ。」

リムル

「………そ、そこまで言うなら……な。」

俺がそう言っていると、男衆はテンションが上がったみたいだ。

リアル、濟まない。

俺だけこんな良い思いをして。

今度連れて行くから。

エイダ

「……ふう。」

「リムルさん。」

リムル

「え? はい。」

ここで、今までじつと剣を見ていたエイダさんが口を開いた。

エイダ

「この剣、オリジナルがありますよね。」

リムル

「?!」

エイダ

ガシツ! 「……それ。 見せてくれますか?」 ゴゴゴゴゴゴゴゴ

ゴ!

リムル

「ひっ！」

エイダさんは俺を掴んで、そう言ってきた。

デザインの元になった剣があるなんて、よく分かったものだ。

しかし、今のエイダさん怖！

有無を言わさぬ気迫がある。

鼻息も荒くなっている。

断ったら粉々に潰されそうだ。

俺は聖剣を出すしかなかった。

リムル

「ど、どうぞー！」

俺は水勢剣流水を渡した。

その剣を見たエイダさんは。

エイダ

「……………!!!」

(う……美しいいいいいいい!!!)

流水を見た瞬間、まるで感極まったように、流水を見てウツトリとしている。

おおよそ、女性がしていい顔じゃない。

リムル

(……………もしかしてこの人、武器マニアか剣マニアか?)

エイダ

「……………リムルさん、しばらくこの剣を拝見させていただいても？」

リムル

「どうぞー！ 心ゆくまでー！」

エイダ

「……………はい！」

カイジン

「あゝ、また始まりやがった。」

カイジンの話だと、彼女は武器マニアというより、見たこともない

武器を見ると調べたくて仕方がなくなるらしい。

カイジンから見ても、俺が出したあの剣は相当の業物だと言うことがわかるみたいだ。

業物どころか、聖剣なんだけどね。

ああなると、エイダは納得するまで止まらないから、放っておいてカイジン達の案内で打ち上げに行くことになった。

扉入ると、綺麗なお姉さん達が出迎えてくれた。

リムル

(FOOOOOOO!!)

どつちを見てもエルフ！ エルフ!! エロフ・・・もといエルフ!!!
ちよつと待て、これはどう言うことだ？

魔力感知を全開にしているのに、絶妙に見えない境界線を死守している。

エルフの一人が。

エルフの女性

「きゃあああ！ 可愛い！」ギューー！

リムル

(来たあああああ!!)

俺は抱きしめられた。

ちよ！ やばい！ 服薄い!!

俺は取っ替え引っ替え、彼女達の胸の中に収まる。

彼女達はこのスライムボディが気持ちいいと言っているが、むしろ気持ちいいのはこつちだ。

これが女の人の胸の感触か！

やばい！ 初めてだ！

カイジン

「乗り気じゃ無かった割に、ずいぶん楽しそうじゃねえか。」
リムル

「……………はっ！ そ、そんなことは。」

カイジン達男衆はそんな俺を見て、ニカッ！つと笑う。

ミルドはさらにサムズアップしている。

リムル

「……………くう。」

エルフのママさん

「さあ、楽しく飲みましょー！」

その声と共に楽しい打ち上げが始まった。

…この時、俺は間違いなく天国にいた。

許されるのなら、一生ここで暮らしたい。

そう思える一時だった。

カイジンが自分の力作を俺があつという間に量産してしまったことに、複雑な表情を浮かべていたが、次はもつと凄いのを作って見せると意気込んでいた。

余計なことをしたかなと、ちよつとした罪悪感みたいな感情が湧いたが。

人助けができて、良かったと思っておこう。

そんな時、褐色肌のエルフのお姉さんが、水晶玉を出して「私得意なんだよ。やってみる？」と言ってきた。

どうやら占いをしてくれるみたいだ。

何を占って貰おうか悩んでいると、俺を膝の上に乗せているお姉さんが、「スライムさんの運命の人とかどう？」といった。

ここにいる全員が気になるようだ。

確かに俺も気になる。

じゃあ、それで占ってもらおう。

褐色肌のエルフさんが、水晶玉に手をかざす。

どんな人なんだろうか？

いや、人じゃなくてスライムだったり？

けど、リアルやヴェルドラとの出会いも運命といえ、運命的な出会いだったし。

運命の人⇨恋人というわけじゃないか。

そんなことを考えていると、水晶玉に何か移り始めた。

そこには5人の子供達と、黒髪で白い服を着て、左目の下に火傷み
たいな跡がある女の人がある。

この人がそうだろうか？
俺の運命にどう絡んでくるんだらう？

・・・綺麗な人だったけど。
その時だった。

突然水晶玉が光り出した。

褐色肌のエルフ

「え?! 何?」

リムル

「な、なんだ?!」

水晶玉に映し出されたのは、俺の親友の一人、リアルIIテンペストだった。

だが、彼の周囲は炎に包まれており、手には俺の見た事が無いゴツゴツとした聖剣が握られている。

しばらくすると、一人の人間がやって来た。

黒い服を着た青みがかった銀髪に金色の瞳を持つ美少年・・・いや美少女？

手には水勢剣流水を握っている。

二人はそれぞれ、ワンダラーライドブックを手に取り、ページを開く。

『ブラッドデイドラゴン!』

『全てを血で染め、自らも血で染め上げた神獣がいた・・・』

『ライオン戦記!』

『この蒼き鬣が新たに記す、気高き王者の戦いの歴史・・・』
というところで、突然消えた。

テレビの電源を消すみたいに。

リムル

「・・・ねえ、お姉さん。」

「いまのって?」

褐色肌のエルフ

「わ、私にもわからない。ごめんなさい。」

リムル

「いや、いーよ。」

なんとなくだけで、こんな事にはならないで欲しい。
そう思う光景だった。

そんな時、嫌味そうな声が聞こえてきた。
???

「こんな所で油を売っていて良いのですかな？ カイジン殿。」

その声の方向に目を向ければ、男が一人椅子に座っていた。

カイジンが小さい声で、「大臣のベスターだ。」と言ってきた。

あいつがそうか。

なんか、いかにも粘着質そうな感じだ。

ベスター

「ちやんと間に合うのですか？ 確かロングソードの期限は「さつき納めてきた。」間に合わなければ・・・」

「え?! 納めてきた!!」

カイジン

「ああ、20本きつちりとな。」

ベスター

「え? いや・・・しかし・・・」

カイジン

「納品書の確認でもするか?」

これ以上の追及は悪手だろう。

実際、納品書がこっちにはあるんだし、確認すればすぐにわかることだ。

ロングソードに対する大臣の追求は終わった。

しかし、次は矛先が俺に向いた。

ベスター

「ところで、それは何ですか?」

リムル

「え? 俺?」

ベスター

「いけませんね。この上品な店に下等な魔物がいるなど・・・気分が悪くなる。」

リムル

(ムッ！)

大臣のクレームに、エルフのママさんが対応しているが、いくら言っても聞く耳持たない大臣。

おもむろ徐に、酒の入ったジヨツキを手に持って。

ベスター

「ふん！ 魔物にはこれがお似合いよ。」

と言って、俺に酒をぶっかけてきた。

俺は咄嗟に『捕食者』を発動し、体にかかった酒を捕食した。

そのおかげで、俺を膝に乗せているお姉さんのドレスが汚れないで済んだ。

エルフの女性

「スライムさん！ 大丈夫？」

リムル

「ああ、大丈夫だよ。」

エルフの女性

(あれ？ ドレスが濡れていない？)

正直カチンときたが、相手は一国の大臣だ。

俺の短気でカイジンやこの店に迷惑をかける訳にはいかないな。

と思つて、堪えていたのに。

いきなり、カイジンがベスターに鉄拳制裁した。

それにより、ベスターは縦に錐揉み回転しながら吹き飛んだ。

カイジン

「ベスター！ 俺の客人に舐めた真似しやがって、覚悟はできてんだろうな！」ゴキゴキ！

ベスター

「き、貴様！ 私にそのような「やかましい!!」」

そう言つて、またしても鉄拳制裁。

それで気絶してしまった。

ていうか、こんなことをして、カイジンはもうこの国に居られなくなるんじゃない？

そう思っていたら、カイジンが自分を俺の村に行かせてくれないか
と言ってきた。

リムル

「願ってもないことだが、良いのか？」

カイジン

「ああ。」

まさか来てくれるなんて。

こんな嬉しいことはない。

……だが、そう喜んでもいられない。

店での騒ぎを聞きつけて、警備隊がやってきた。

大臣は担架で担ぎ込まれ、店に来ていたカイジン達は手錠をかけられ、俺はというと全身を鎖で締め上げられていた。

カイドウ

「兄貴、一体何やったんだい？」

若干呆れ顔で、カイドウさんがカイジンに聞いた。

カイジン

「……フン！ あのバカ大臣が、リムルの旦那に失礼なことをしやがるもんだから、ちいとお灸を据えてやっただけよ。」

カイドウ

「ええ……大臣相手にそれはまずいだろ。」

「とにかく、こつちも仕事だから、裁判まで拘束させてもらうぜ。」

リムル

「え？ 裁判？」

それで俺達はまた牢屋の中に逆戻りした。

牢屋の場所も以前と同じだった。

なぜわかるかって。

なぜなら、ゴブタが逆さ吊りで眠っているからさ！

ゴブタがなぜこんなことになったのか？

最初にこの牢屋に連行された時、呑気に自分だけ寝ていたので、暇潰し兼お仕置きを兼ねて、天井に吊るしたのだ。

だがしかし、今この瞬間まで寝ているのか。

リムル

「ロングスリーパーかい!!」

思わず突っ込んでしまった。

そして、牢屋に入れられてから2日後、裁判の日がやってきた。

―裁判所―

武装国家ドワルゴンの裁判では、王の許しがない限り、当事者ですら発言は許されない。

発言した瞬間、即有罪なんて当たり前らしい。

冤罪も何もあつたもんじやない。

おつかない事この上無い。

よつて、ドワルゴンでの裁判には弁護士を立てるのが普通なのだ。だが……

弁護士

「……とこのように、店で酒を嗜んでいたベスター殿に対し、カイジン達は複数で暴行を加えたのです。」

リムル

(おいおいおい!!!)

カイジン

「……買収されたな。」ボソ

リムル

「あの野郎……」ボソ

カイジンはベスターのことを悪人ではないと言っていたが、あいつ悪人だろ。

非常にまずい。

発言が許されないこの状況では、事実無根であることも主張することもできない。

どうしたものか?

ベスター

「王よ……この者たちに厳罰をお与えください!」

カン! カン!

裁判官

「静粛に！ 判決を言い渡す！」

「・・・カイジンには、鉦山での強制労働20年を申し渡す。」

「その他者は、鉦山での強制労働10年を申し渡す。」

「これにて、裁判を閉廷します。」

リムル

「ちよっ！」

発言が許されていなくても関係ない。

罪のない者が罰せられ、罪を犯した者が救われるなんて納得できるか！

最悪カイジン達だけでも助けないと。

ガゼル

「・・・待て。」

「「「「「？」」」」」」

この場にいる全員の視線がガゼルとドワルゴに集まった。

今まで一言も喋らなかつた人物が、口を開いたのだ。

ガゼル

「カイジンよ。 久しいな、息災か？」

カイジン

「はっ！ 王におかれましては、ご健勝そうで何よりです。」

先ほどの鋭い眼光は鳴りを潜め、久しぶりに友人に出会えて、懐かしんでいるような眼差しをカイジンに向ける。

カイジンもなんだか嬉しそうだ。

ガゼル

「良い。・・・カイジンよ、余の元に戻ってくる気はないか？」

ベスター

「！」

リムル

（おおー！）

やっぱりカイジンって、王に気に入られているんだろうな。それだけの信頼関係があるってことだ。

このままいけばカイジン達だけでも助かるんじゃない。

カイジン

「・・・恐れながら王よ、私はすでに新たな主を得ました。」

「この誓いは、私にとつて宝です。」

「これは、例え王命であつても、覆ることはありません。」

リムル

(カイジン。)

もしかしたら、また王のために働けるかもしれないのに、王に
対してここまで言えるなんて。

いや、お互い信頼しているからこそ、嘘偽りなく言えることもある
よな。

ガゼル

「・・・であるか。」

「新たに判決を言い渡す!」

「カイジン及びその一味は国外追放とする。」

「今宵、日付が変わつて以降、この国に滞在することは許さん。」

「余の前より消えるが良い!」

その王の言葉で、裁判は閉廷となつた。

どうにか命はつながつて、何よりだ。

・・・けど、ガゼル王もカイジンも、寂しそうだつた。

俺達は知らなかつたが、この後ベスターはガゼル王に呼び出され
た。

それは、カイジンの弁護人を買収しとことではなく、俺がこの国に
来たときに警備隊に渡した回復薬をベスターに見せるためである。

それを見たベスターは驚愕したのだ。

俺も大賢者に聞くまでは知らなかつたが、俺の作った回復薬は
『完全回復薬』^{フルポーション}と言つて、ヒポクテ草の成分を99%抽出することで作
ることができると、ドワーフの技術の全てを集めても、98%の
抽出しか出来ず、この場合は『上位回復薬』^{ハイポーション}になるらしい。

たった1%の違いだが、現在ドワーフ国ではこの1%の壁を越える
ことが出来ないでいる。

ベスターはガゼル王に問う、「誰がこれを作ったのですか？」と。ガゼル王は言う、「それを我が国にもたらしたのは、あのスライムだ。」と。

結果を見ればベスターは、この国と俺の繋がりを切ってしまったのだ。

ガゼル

「ベスターよ、何か言いたいことはあるか？」

ベスター

「お・・・王よ、私は・・・」

ベスターは何も言えなかった。

そして考えていた、なぜ自分は自身が仕える王に問い詰められているのか？

まだ幼い日に見た、この国へ凱旋した王を見た時、自身に誓いを立てた。

『この王に仕え、役に立つのだ。』

そう誓いを立てたはずなのに。

自分はいつ道を誤ったのだろうか？

カイジンに嫉妬した時から？

・・・それとも、もつと以前から？

ガゼル

「・・・もう一度問う。ベスターよ、何か言いたいことはあるか？」

ベスター

「・・・・・・・・何も、何もありません。王よ。」

(私は・・・なんて愚かなのだ。)

ガゼル

「そうか・・・ベスターよ、其方そなたの王宮への出入りを禁止する。」

「二度と余の前に姿を見せるな！」

「・・・最後に一言、其方に言葉を送ろう。」

ベスター

「？」

ガゼル

「……これまでの働き、大義であつた！」

ベスター

「!!」

そう言つて、ガゼル王はベスターの前から去つた。
ベスターは暫く、その場に崩れ、涙を流していた。

ードワルゴン 検問所前

カイドウ

「兄貴、元気でな。」

カイジン

「おうー。お前もな。」

俺は今、カイジン達と一緒に検問所の前にいる。

裁判の後、カイジン達は急いで身支度を整えて、ご近所に軽く挨拶をして今ここにいる。

店で聖剣に夢中になっていたエイダさんは、みんながなかなか帰つてこなかったことに心配していた。

事情を話すと、エイダさんも一緒に行くことを決めてくれた。

「師匠達が出て行くのなら、私も一緒に行きます。」と言つて。

カイドウ

「リムルの旦那、兄貴達をよろしくな。」

リムル

「心配ない。ただこき使うだけさ。」

カイドウ

「はは、そうか。」

まあ、こき使うと言うのは言葉のアヤだけだな。

本人達が「ここで働きたい。」と言えるような職場を作らないとな。
ブラック企業、それは悪い文化である。

カイドウ

「判決に則り、カイジン及びその一味は国外追放とする。」

「早々に立ち去れ！」

と言つて、カイドウさん達警備隊は、門の内側に帰つていった。

リムル

「・・・さて、行くか。」

「森の入り口で俺の仲間が待っている。」

カイジン

「・・・ああ。」

一悶着あったが、無事に目的は果たせた。

それも、これ以上ない位最高の腕を持つ職人達が来てくれた。

そして、もう少しでリグル達が待つところに着くときに、ふと思っ
た。

リムル

「・・・何か忘れているような？」

そう思った時、ドワルゴンの方から俺達の方に向かって何かがやっ
てきた。

ゴブタ

「リムル様ー！！！！」

「ひどいっすー！！！！」

リムル

「あ！！ ゴブタ忘れてた！」

すっかり忘れていた。

ゴブタを置き去りにしてきたことを。

リムル

（・・・あれ？ 今ゴブタの奴、嵐牙狼族に乗ってきたよな？）

一体どうやった？

と思っていたら、「ひどいっすー！」「あんまりっすー！」と、収まりが
つかなくなってきたので、今度綺麗なお姉さんのいる店に連れて行く
ことで、手打ちにしてくれた。

・・・けど。

リムル

（ドワーフ国出禁になったから、当分先になるだろうけど。）

（・・・まあ、いいか。）

ードワーフ国 王宮の通路―

ガゼル

「・・・弁護人は捕らえたか？」

???

「は！」

ガゼル

「厳罰に処せ。」

「あのスライム動向を監視せよ。」

「決して気取られるなよ。絶対にだ！」

???

「は！」

ガゼル

「・・・あのスライムは化け物だ！」

「まるで『暴風竜ヴェルドラ』の如く！」

|||||

人物紹介

名前：エイダ||ドリユウズ

種族：ドワーフ

使用武器：剣・戦斧

好きなもの：見たことがない武器や研究

嫌いなもの：シヤバ訝えないいと言われること

B：W：H：80：56：79（Cカップ）

所持スキル

EXスキル

・ 殺意感知：他者からの殺意を感知する

・ 知覚強化：知覚速度を50倍に強化する

Cスキル

・ 剣術の心得：剣を使った攻撃や技術を使った時、威力と命中率に補正がかかる

・戦斧の心得：戦斧を使った攻撃や技術を使った時、威力と命中率に補正がかかる

・身体強化：自身の身体能力を強化する

・武器破壊：相手の武器を攻撃し、確率で破壊する

所持技術

・蒼破刃：斬撃を飛ばし、離れた敵を攻撃する

・雷神剣：電撃を纏った踏み込み突きで攻撃する

・爆碎斬：地面に武器を叩き付け、発生した石礫で前方を攻撃する

・裂旋斧：武器を振り回し、全周を攻撃する

人物紹介

武装国家ドワルゴンの王国騎士に所属していた、元騎士。

外見は少女のようだが、それはドワーフだからであり、実年齢は80歳を超えている。

騎士であると同時に研究者でもある。

次期将軍に抜擢されるほどの実力者。

騎士団に所属する女性騎士からは、『働く女性の理想像』と言われ、その凛とした立ち居振る舞いから男女問わず人気があった。

しかし、彼女は『見たこともない武器』や『新たな研究や技術』を見つけると、夢中になってしまい休憩無し食事無し睡眠無し、ひどい時は服の着替えすらしないで長時間、もしくは数日も没頭してしまうという欠点がある。

本人はこの歳になっても未だにいい人が見つからない事を、気にしている。

が、恋愛に関しては奥手で、男性と手を繋いだことがなく、自分が理想とする男性とキスをするところを想像しただけで顔耳首を真っ赤にってしまう程。

カイジンがまだ王国の工作部隊の団長だった時、当時副官だったベスターが計画していた『魔装兵計画』が失敗に終わり、その責任をカイジンになすり付けたことに激怒し、カイジンを擁護し必死になつて

庇った人物の一人。

しかしカイジンは、無実の罪の責任を取り、軍を辞めることになり、ベスターはお咎めなしになった事が納得がいかず、その時自分も騎士団を除隊している。

それからは、自称カイジンの弟子を名乗り、一緒に鍛冶屋を営んでいたが、鍛冶の腕はカイジンの方が上である。

リムルがやって来た事がきっかけで、カイジン及びドワーフ3兄弟と共にドワルゴンを去ることになる。

現在の興味はリムルが持つ『水勢剣流水』を調べること。

容姿

イメージは『魔導巧殻 闇の月女神は導国で詠う』に登場する、エルフエリアIIプラダ元帥。

彼女は原作では、三つあるルートの内二つは生存できるが頼れる仲間間的なポジション、残り一つのルートでは、メインヒロイン級の存在になるが必ず死亡するという不遇な女性。

この作品で、ドワーフでオリキャラを出すことを決めた時、エルフエリアが思い浮かんだので、この作品で容姿と『エイダ』という愛称を名前に使わせていただきます。

リムルとリアル 運命の出会い

ーブルムンド王国ー

ー自由組合 ギルドマスター執務室ー

今この部屋には、四人の人間が集まっている。

机を挟んで、窓側に座っているのはブルムンド王国自由組合の
自由組合支部長フューズ。

反対側に座っている三人は、「重戦士」のカバル。

「法術師」のエレン。

「盗賊」のギド。

三人はフューズからの依頼で『ジユラの大森林』に存在する『封印の洞窟』の調査をしていたのだ。

『封印の洞窟』には『暴風竜ヴェルドラ』が封印されているのだが、今から数十日前にその存在が消失したのだ。

一体何が起こったのかを調べるために、この三人が派遣されたのだ。

そして、彼らは今その調査の報告をしているのだ。

フューズ

「では聞こうか、ジユラの大森林の報告を。」

カバル

「大変だったんだぜ。」

「劳いの言葉もないのかよ?」

フューズ

「・・・報告を聞こう。」

彼らは長い期間洞窟の調査と、危険な森の中から帰ってきたばかりで、身なりがボロボロである。

フューズは先を促すように、報告のみを聞こうとする。

カバル

「帰ってきたばかりだって言うのに、ったく。」

エレン

「・・・お風呂に入りたい。」

ギド

「大変だったのは、旦那と姉さんの口喧嘩を宥めなければならなかったアツシの方だと思うんですがね？」

フューズ

「・・・ん。」

フューズの顔が強張る。

彼はこの三人の実力はわかっている。

だからこそ彼らの調査を依頼したのだ。

ただ、三人のリーダーであるカバルは危機回避能力に関しては、危ういものがある。

この三人のトラブルの原因は大概カバルが原因である。

それにエレンが噛み付いて喧嘩になり、それをギドが仲裁する。

そう言う構図が出来上がっている。

この三人は大概こうだ。

カバル

「洞窟ではヴェルドラの消失をか確認。」

「洞窟内を隈なく探したが、何もありませんでした。」

フューズ

「・・・何も？」

エレン

「何もです。」

ヴェルドラが消失したのだ。

それを裏付ける何かがあると思っていたが、何もない。

彼らが嘘を言っているようにも見えないし、仕事を適当に済ませて来た訳でもないようだ。

フューズ

「うん・・・洞窟のことは分かった。」

ギド

「では、アツシらはこれで・・・」
フューズ

「三日間の休養をやろう。」

カバル・エレン・ギド

「え?!」

フューズ

「今度は、洞窟ではなく森の調査だ。」

カバル・エレン・ギド

「え?!」

てつきり仕事はこれでお終いで、やっと休めると思っていた三人は、フューズのその言葉で固まった。

なんと今度は、森の調査をしろつと言ってきた。

フューズ

「ヴェルドラの消失により、魔物が活性化しているかもしれん。」

「何でもいい、変化を見逃すな。」

「以上、行つていいぞ。」

カバル・エレン・ギド

「・・・」

そう言われた三人は、青い顔をしてギルドを出て行った。

そして、しばらく歩き十分ギルドから離れたところで。

カバル

「・・・行つていいぞ。 じゃねえーよ!」

エレン

「何ですか三日つて?! もっとお休みくださいよ!」

「帰つて来たばかりなんですけど!」

と、叫んだ。

二人の叫びが虚しく響く。

ギド

「・・・それ、ギルマスに直接言つて欲しいでやすよ。」

本人の前で言わないと聞き届けてはくれないだろう。

言つたとしても聞いてもらえるとは思えない。

だからこうして叫ぶしかないのだ。

所詮雇われの冒険者の扱いなんてこんな感じである。

カバル・エレン

「はあく。」

エレン

「またあの森か。」

カバル

「言うなよ、気が滅入るだろ。」

三人は一刻も早く休みたくて歩みを進める。

ジユラの大森林は封印の洞窟と違い、魔物の脅威度は格段に下がる。

それでも、大鬼族をはじめ、リザードマン蜥蜴人族、オーク豚頭族といった種族がいるのだ。

他にも、この三人だけでは対処できない魔物が沢山いる。

そんな森を調査しろと言うのだ。

気が滅入るのも仕方がない。

そんな三人に。

???

「君たちはもしかして、ジユラの大森林に向かうのかな？」

カバル

「うん？」

白い服にマント、腰には剣。

黒い髪に特徴的な白い仮面をつけた女性が声をかけてきた。

カバル

「・・・そうだが？」

仮面の女

「森を抜けるまで、同行させて貰えないだろうか？」

カバル

「・・・」

カバルはこの町では見たことがない彼女に警戒していた。

一応彼もリーダーを任されているのだ。

危険を持ち込むわけにはいかない。

しかし、エレンが軽いノリで動向を許可してしまった。

軽く自己紹介をしたことで、仮面の女の名前が『シズ』と言う名前だと言うことはわかった。

こうして、即席のパーティーが出来上がり、三日後に出発することになった。

この調査が、シズにとって、運命的な出会いが待っているのだった。



ーゴブリンの村ー

俺は今、アリスタの巣のところに来ている。

リーアル

「どうだ？ 住み心地は？」

アリスタ

「ハイ。涼シクテトテモ住ミヤスイデス。」

「皆ンナモトテモ元氣デスヨ。」

どうやら彼女達はこの場所が気に入ったみたいだ。

日陰を確保する為に外壁の上に布を貼ったのも良かったのだろう。

最初に見た時と比べて、だいぶ大きな巣が出来上がっている。

ただ、俺の知っている蜂の巣とは違い、まるで蟻塚のような巣ができていた。

アリスタ達とは話し合いの結果、ここで暮らす代わりに蜂蜜を定期的に提供してもらうことになった。

あと、犍陀多の眷属達と協力して、この村の警備もしてくれている。喧嘩しないか不安だったが、今のところそんなことは無い。

仲良くしてくれている様で何よりだ。

リムルがドワルゴンから帰って来た時、初めて見る人物が五人いた。

鍛冶職人のカイジン。

防具職人のガラム。

装飾品を作ったり、細かい作業が得意なドルド。

建築や芸術に詳しく、基本無口なミルド。

そして、自称カイジンの弟子のエイダ。

彼らのお陰で、村が一気に発展した。

鍛冶・建築に関しては、カイジン・ミルド・エイダ担当している。

初めて鍛冶職人の仕事を見たホブゴブリン達は、興味深そうに、そして真剣にカイジンやエイダの話を聞いていた。

ミルドは無口だが、何となく言いたいことは分かる。

必要な木材を調達し、直径4メートル、高さ2.6メートルほどの遊牧民などが住んでいた『ユルト』っぽいものが出来上がっている。

衣服・防具・装飾品の製作に関しては、ガラム・ドルド・犍陀多が担当している。

防具は装飾品は鍛冶の時と同じで、ホブゴブリン達は少しでもその知識を吸収しようと真剣に聞いている。

犍陀多が自分の糸で布を作り、それを使ってガラムとドルドが衣服を作っている。

村のみんなは初めて着るまともな衣服に感動している。

それはいいのだが、リムルが帰って来た直後は大変だった。

それは、500匹いるゴブリン達のことだ。

犍陀多やアリスタにも驚いていたリムルだが、ゴブリン達の方に驚いていた。

最初はお引き取り願おうと思っていたリムルだが、大賢者からの助言で思いとどまり、この村で受け入れることになった。

そして、俺とリムルはゴブリン達を半分に分け、名付けを行い。

三日間寝込む事になったのだ。

俺は初めて低位活動状態スリープモードを経験した。

体は動かせず、まさしく眠っている状態だ。

だが、不思議と周囲の気配を感じることはできた。

葛乃葉とアーセナが三日間寝たきりの俺の面倒を見てくれた。

有難い事だ。

一時はどうなるかと思ったが、この調子なら何とか全員住めそう

だ。

だが、エイダさんはちよつと怖かった。

実はリムルは、エイダさんに水勢剣流水を見せたことで、この村に同じ剣を持つ俺のことを道中話していたのだ。

俺が低位活動状態から復活した次の日、俺の聖剣を見せて欲しいと
いって来たのだ。

取り敢えず、今ある聖剣全部を出すと。

エイダ

「……………!!!」

「なんて美しい剣なのおおおおお!!!」

リーアル

「いつ?!」

と叫んで、おおよそ女性が見せてはいけない顔になってる。

一言で言うくと、蕩けている。

エイダ

「この赤と黄色の剣!」

「見た目はリムルさんが見せてくれた青い剣とそっくりですけど、赤い剣からは熱く燃えるような炎、黄色い剣からは貫き^{ほとばし}進む稲妻の様な
力を感じます!」

リーアル

(!、この人、わかるのか?)

エイダさんはそれぞれの聖剣の特性を、見ただけで見抜いていた。

その中でも、特に気になったのは。

エイダ

「!? リーアルさん、この剣を持ってみてもいいですか?」

リーアル

「いいですよ。」

エイダさんが手に取ろうとしているのは、音銃剣錫音である。

聖剣の中で、一番気になる一振りみただ。

エイダさんが錫音を握ると、突然錫音が光り出した。

リーアル

「な?!」

エイダ

「何?!」

確認しました。

個体名・エイダⅡドリユウズはUQスキル『音銃』獲得・・・成功しました。

確認しました。

個体名・リアルⅡテンペスト及びエイダⅡドリユウズが・魂の回廊で繋がりました。

相棒

《告》 EXスキル・『絆の架け橋』の効果の発動を確認。《

魂の回廊で繋がりました。》

《告》 個体名・エイダⅡドリユウズは・個体名リアルⅡテンペストの『無限収納』へのアクセス権が与えられます。《

リアル・エイダ

「え!」

何と俺とエイダさんが魂の回廊でつながり、俺の『無限収納』にアクセスできる様になった。

しかも俺とリムル、そしてヴェルドラが聖剣に選ばれたように、エイダさんも音銃剣錫音に選ばれたようだ。

ただ、無限収納へのアクセスは、聖剣とライドブックを取り出す時と、収納する時限定みたいだ。

選ばれたのなら仕方がないので、俺が持っているこれらの剣は聖剣であることを話した。

超レアな存在である聖剣が11本もある事に、そして自身も聖剣に選ばれたことに驚愕していた。

物は試しに、『ヘンゼルナッツとグレーテル』のライドブックをエイダさんに渡し、変身を試してもらった。

エイダ

「この小さな本を起動して、この聖剣に取り付けられればいいんですね。」
リアル

「うん。 ちょっとやってみてくれるかな？」

エイダ

「わかりました。」

エイダさんはブックを起動する。

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

『とある森に迷い込んだ小さな兄妹の、おかしな冒険のお話・・・』

エイダ

「おお！ 音が鳴るんですね。」

音が鳴ったことに驚いたが、エイダさんは次にブックのページを閉じ、スズネシエルフにセットした。

そして錫音の柄の部分についているトリガーを引く。

しかし・・・

エイダ・リアル

「・・・」

リアル

「・・・あれ？」

エイダ

「??？」

変身できなかった。

ソードライバーを使わない錫音なら変身できると思っていたが、ダメみたいだ。

相棒

《告 音銃剣錫音に・解析不可能な封印が施されています。》

《何らかの条件を満たさない限り・変身できないと思われまます。》

リアル

(条件か・・・)

何をどうしたらいいのか、見当もつかないが。

ひとまず、音銃剣錫音と『ヘンゼルナッツとグレーテル』のライドブックはエイダさんに渡しておいた。

最初エイダさんは、自分がこんな美しい聖剣を持っているのか戸惑っていたが、他でもない錫音を選んだから使って貰わないとかわ

いそうだ。

だから遠慮はいらないと俺は言った。
なんだかんだ言つて、エイダさんも嬉しそうだ。
足がルンルンだし。

◇

ーノーザンベースー
ーリベラシオン内ー

そして今俺はリムルと一緒に、ノーザンベースのリベラシオンの中
にいる。

リムルが新しいスキルを獲得したらしく、どこか試せる場所はない
か相談して来たので、ここに来たのだ。

リムルは最初、このワンダーワールドに驚いていた。
見た事もない幻想的な空間に、大はしやぎしていた。

今はリベラシオンの中に3メートルくらいの岩を出現させて、二人
で眺めている。

相棒曰く、リベラシオンの中は本来何も無い暗い空間が広がってい
るだけだが、相棒に頼めばこうやって立体物を置く事も出来るみたい
だ。

リムル

「よし、じゃあやるか。」

リアル

「おう！ ここなら周囲を気にする必要がないから、思いっきりやつ
ていいぞ。」

リムル

「おう！ リムル、へ〜んしん！」
ボフツ！

リムルはスライムボディの姿で、昭和ライダーのような変身ポーズ
をとった。

リムルが黒い霧に包まれ、次に出て来たのは『嵐牙狼族』デンベストウルフではなく

その進化した姿の『黒嵐星狼』デンプエストスターウルフであった。

リムルが強くなったから『擬態』もそれに合わせてパワーアップしたのだろうか？

リムル

『黒稲妻！』

リムルがそう言うと、上空で一瞬光ったと思ったら、黒い雷が目の前の岩に直撃した。

後に残ったのは砕かれて、バラバラになった岩の破片だけだった。

リアル

『黒稲妻』か・・・すごい威力だな。」

リムル

「・・・だな。 自分でもこの威力は引くわ。」

リムルは『黒稲妻』を余程の事がない限り使わないように、封印することにした。

この威力なら大抵の魔物なら一発で倒せてしまうんじゃないか？

リアル

「さて、検証も終わったし、出るか。」

リムル

「そうだな。 ありがとうな、ここを使わせてくれて。」

リアル

「いいて事よ。」

俺とリムルはリベラシオンを後にした。

問題はここからである。

実はこのワンダーワールド、入る時はいつでも入れるのだが、出る時に問題を抱えているのだ。

リムル

「どんな問題があるんだ？」

リアル

「実は・・・出るところがランダムなんだよ。」

リムル

「は？・・・マジか？」

リアル

「マジで。」

幸いにも、入った地点から半径1キロ圏内のどこかに出るから、全く知らない土地に出ることはない。

まるで、壊れた『どこ〇もドア』みたいだ。

もしくは『どこ〇かドア』だな。

そして、俺達はワンダーワールドから出ると案の定、村とは別のところに出てしまった。

魂の回廊で繋がった皆んなの気配を辿れば、迷うことなく帰れるのだが、これはどうにかならないものだろうか？

そんな俺達の耳に（リムルに耳はないが）悲鳴みたいなものか聞こえてきた。

◇

ージユラの大森林ー

ー森の中ー

カバル

「うおおおおおおおおお!!!」

エレン

「いやあああああああ!!!」

ブルムンド王国を出発した彼等は、今魔物に追われていた。

全長4メートルはある大型の蟻の魔物『巨大妖蟻』ジャイアントアントである。

何でこんな事になっているのか？

それは・・・

ギド

「カバルの旦那がいけないんでやすよー!」

「巨大妖蟻の巣に剣なんてぶっ刺すからー!」

そう、何とカバルは巨大妖蟻の巣穴に剣を刺したのだ。

それを敵対行動と受け取った巨大妖蟻が、彼らを追いかけてきてい

るのだ。

かれこれ三日の間、追いかけている。

カバル

「しようがねえだろ！ 気になったんだから！」

エレン

「リーダーの癖に迂闊すぎなのよ！」

カバル

「うぐー！」

全くもってその通りである。

何を考えているのやら。

エレン

「死んだら枕元に化けて出てやるんだから！」

カバル

「ハハハッ！ それは無理ってもんだな！」

「なぜなら・・・その時は俺も死んでるからだああ!!」

エレン

「いやああああ!!」

シズ

「貴方達、無駄口叩いてないで走りなさい！」

この中で唯一冷静でいたのはシズのみだった。

そもそも、彼等が三日も生き残っているのは、彼女がいるからだ。

カバル達も薄々気づいてはいたが、シズは自分達より格上の冒険者

だ。

危機感知能力、戦闘能力、サバイバル技術、どれを取っても熟練の

冒険者のそれである。

今もシズが殿しんがりになり彼等を守っているのだ。

シズ

（・・・このままじゃ追いつかれる。）

「・・・少しだけなら。」

不意に、シズは後ろに向き直り、剣を抜く。

エレン

「シズさん?!」

カバル

「おい!・よせ!」

すぐそこまで巨大妖蟻が迫ってきている。

しかしシズは冷静に、自身の力を解放する。

剣の刀身に炎が渦巻き始めた。

剣を構え、巨大妖蟻に斬りかかる。

剣で切った箇所^がに炎が燦り、暫くすると内側から爆発した。

内側から燃やされた巨大妖蟻は地面に倒れ、それ以降動くことはなかった。

その調子でシズは、残りの巨大妖蟻を斬り伏せていく。

エレン

「す・す・すい。」

一見順調に倒している様に見える。

しかし、カバル達は気づかないが、シズ本人は焦っていた。

シズ

(早く・早くしないと。)

まるで、自身の使っている炎の力に制限でもあるかのように。

巨大妖蟻相手に全力に近い勢いで、相手をしていた。

しかし、そのお陰で巨大妖蟻はすぐに討伐された。

シズ

「ふう〜。」

(よかった・間に合った。)

だが、シズは気付いていなかった。

後ろにいる巨大妖蟻がまだ生きていることに。

その時。

???

「その人! 伏せろ!」

シズ

「!？」

誰かにそう言われたシズは、咄嗟に地面に伏せた。

次に見たのは、炎の鳥だった。



リーアル side

俺とリムルは騒ぎが起きている方へ走っていた。

と言っても、走っているのは俺だけで、リムルは俺の頭の上に乗っかっているのだが。

リーアル

(リムルの奴、器用だな。)

騒ぎが起きている現場に来てみると、どうやらもう終わっているようだ。

周囲には、赤い巨大な蟻の魔物、解析鑑定の結果、『巨大妖蟻』という魔物が炎に焼かれて倒れていた。

その中に、黒く長い髪の女性が剣を持って立っていた。

リムル

(あれ？ あの人どこかで?)

しかし、その時1匹の巨大妖蟻がその女性に襲い掛かろうとしていた。

リーアル

「！ その人！ 伏せろ！」

黒髪の女性

「!?!」

俺は走り出し、火炎剣烈火とライドブックの『ブレイブドラゴン』と『ストームイーグル』を取り出した。

火炎剣烈火のシンガンリーダーに二冊のブックのスピリーダーを読み込ませた。

『ブレイブドラゴン！』『ストームイーグル！』

『ふむふむー！』

俺のジャンプと、女性が伏せるタイミングが重なる。

火炎剣烈火の柄にあるトリガーを引く。

『習得二閃！』

火炎剣烈火に炎と風の力が宿る。

その時、技のイメージが浮かんだ。

リアル

『鳳凰天駆！』

烈火を突き出し、巨大妖蟻に向かって飛翔する。

その姿は、炎を纏った鳥だった。

技が巨大妖蟻に直撃すると爆発が起こり、跡形もなく消滅した。

法師の女性

「シズさん！ 大丈夫？」

シズ？

「え……ええ。」

盗賊の男

「い……今の、何でやす？」

重戦士の男

「炎の鳥みたいだったが？」

シズと呼ばれた女性の元に、彼女のパーティメンバーだろうか？

三人の男女が集まってきた。

リムル

「俺の黒稲妻もそうだけど、お前のその技も大概だな。」

リアル

「ああ、使い所を考えて使わないとな。」

「?!?!」

爆発の際に生じた土煙が晴れ、俺とリムルの姿が露わになる。

重戦士の男

「……え？ 人間と、スライム？」

リムル

「ムー！ スライムで悪いか？」

重戦士の男

「あ、いや……」

リアル

(虐めてやるなよリムル。 まあ、俺も人間じゃないけど。)

今の俺は覇気を制御しているから、パツと見人間にしか見えないようにしているが、上手くいつている様だ。

リムル

「この仮面、お姉さんのだろ。 返しとくな。」

シズ?

「ありがとう。」

リムル

「!？」

(・・・思っていたより早く出会えたな。 運命の人。)

リアル

「ごめん。 使い慣れていない技を使ったもんで、加減がわからなくて。」

「どこか怪我とかしてないか？」

シズ?

「ええ、大丈夫。」

「お陰で助かったよ。 ありがとう。」

どうやら何ともないようだ。

まあ、こつちには俺とリムルが作った回復薬があるから、大丈夫だと思っけど。

それにしてもこの人、美人だな。

左目の下に火傷みたいな跡があるけど、それ込みで美人だ。

若干幼い感じのする顔だけど、大人の女性みたいな雰囲気があつて、とても魅力的だ。

「「はあああああゝ・・・」」

大きなため息をして、シズと呼ばれていた以外の三人が地面に座り込んだ。

リムル

「? あんた達、どこか怪我でもしたのか？」

重戦士の男

「いやゝ、精神的な疲労というか・・・」

盗賊の男

「あつしら、巨大妖蟻に三日間追いかけていやして・・・」

重戦士の男

「荷物は落とすし、振り切ったと思って休めば寝込みを襲われるし・・・」

法術師の女性

「装備はボロボロになるし、くたくただし、お腹減ったし・・・」

リアル・リムル

「・・・」

三日間も追われていたとか、一体何をしたんだ。

それに、よく見たらこの三人、ヴェルドラの洞窟ですれ違った冒険者の三人組だ。

まさかこんな所で会うなんて、縁があるな。

リアル

「みんな、よかったら俺達の村に来るかい？」

法術師の女性

「え？ 村があるの？」

リムル

「ああ、仲間達と一緒に暮らしているんだ。」

リアル

「食事もご馳走するぜ。」

「ここで会ったのも何かの縁だし。」

法術師の女性

「魔物が村？」

盗賊の男

「まあ、悪いスライムじゃなさそうですし、もう一人は人間でやすし。」

重戦士の男

「うくん。」

まあ、警戒するのは当然か。

こっちは完璧善意なんだけど。

シズ？

「いいんじゃないかな。」

法師の女性

「シズさん？」

シズ？

「お邪魔しよう。この人達は信用できると思うから。」

重戦士の男

「・・・シズさんがそう言うなら。」

リムル

「じゃあ、行くか。」

リアル

「おう、ついて来てくれ。」

そう言つて、俺とリムルは彼等を村まで案内した。

村に着いたら、ホブゴブリンや嵐牙狼族、スモールアサシンスパイダー暗殺小蜘蛛に
ドラゴワスプクイーン龍蜂女王などの上位種の魔物を見てシズと呼ばれていた女性以外
はもれなく気絶してしまった。

暫くしたら起きたので、料理を振る舞った。

と言つても、鉄板の上で肉や野菜を焼くだけの簡単なものだが、今の彼等にはご馳走だろう。

現に今彼等は一心不乱に肉や野菜を食いまくっている。

そんな中、シズさんはマイペースに食事をしていた。

一つ分らないのは、仮面越しでも飲食が出来ている言うこと。

リムル

(器用だな、運命の人。)

リアル

(どうやって食べているんだ?)

リグルド

「ええ・・・お客人方、寛くわんいでいただけでしありませんか？」

「改めて紹介します。こちらに座す御方々が、我らの主人、リムル様とリアル様であります。」

リムル・リアル

「よろしく。」

リグルドのその言葉を聞いて、シズさんを除いた三人は驚いていた。

シズさんは相変わらずマイペースにお茶を飲んでいる。ちなみにシズさんが飲んでいるお茶は、偶然見つけたものである。森を散策している最中、香りのいい葉を見つけたので、試しに焙煎して御湯を注いで飲んでみたところ、意外と美味かった。

感覚的にほうじ茶に近いかもしれない。

すると、リムルがいまだに戸惑っている三人を見て。

リムル

「初めまして。俺スライムのリムル。」

「悪いスライムじゃないよ。」

と、俺にしか分からないネタを披露したので、思わず。

リアル・シズ？

「プフッ！」

法術師の女性

「？ シズさん？」

リアル

（うん？…これって・・・）

リムル

（ネタが通じた？）

今のネタは、ドクエに出てくるスライムのセリフだ。

それが通じたと言うことは、彼女も転生者なのだろうか？

それを見て毒気が抜けたのか、彼等が話し始めた。

重戦士の男がこのパーティのリーダーのカバル。

盗賊の男がギド。

法術師の彼女がエレン。

そして、向かう方向が同じと言うことで、臨時のメンバーとなったシズ。

やっぱりシズさんって、日本人っぽいな。

正座してるし。

それからカバル達は、ここに来ていた理由を話してくれた。

ブルムンド王国のギルドマスターの依頼を受けて、調査をしにやって来ていたのだ。

「どうやらヴェルドラが消えた影響は周辺に影響を及ぼしていたようだ。」

洞窟だけでなく、周辺の調査までするくらいだ。

リムル

「俺達、ご覧の通り村を拡大している最中なんだが、ギルド的には何か問題があるのか？」

リーアル

「まあ、多種多様な魔物が集まっているからな。」

「一応、敵意を向けられない限り攻撃はしないように言うてはいるけど、人間からしたら結構な脅威だと思うし。」

カバル

「・・・いや、多分大丈夫だろ。なあ。」

エレン

「そうね、魔物のやっっている事に口を出せる立場じゃないし・・・国としてはどうなんだろう？」

ギド

「うーん、事が国家規模となると、アツシには想像もつかないでやすね。」

まあ、彼等は冒険者だからな。

国の考えている事なんて分からんだろう。

それこそ、ギルドマスター位じゃないと、国との直接の関わりなんてないだろうし。

リムル

「まあ、話はわかった。」

「今日のところはここに泊まっていくと良い。 ゆっくり疲れをとってくれ。」

カバル・エレン・ギド

「ありがとうございます。」

リーアル

「リグルド、リグル、彼等を空いているユルトに案内してやってくれ。」
「丁重に頼むな。」

リグルド

「ハッ！」

リグル

「分かりました。」

◇

彼等との話が終わり、カバル・エレン・ギドの三人は食事が終わった後未だに発展途上のこの村を散策していた。

そしてシズさんは一人、夕日に染まるこの村を、一本の木が聳える小高い丘から眺めていた。

シズ

「……………」

リムル

「どうかな？ この村は気に入ってくれたかな。」

シズ

「スライムさん。 あ！ リーアルさんも。」

リーアル

「此処にいたんだな。」

リムルがシズさんと話したそうにしていたので、二人で彼女を探していたのだ。

夕陽を眺めながら黄昏ているシズさんも、何だか絵になる。

何となく儂さも感じるけど。

シズ

「この村ってすごいね。」

「ホブゴブリンだけじゃない、嵐牙狼族にリゆうてんこ龍天狐、ドラゴウルフ龍人狼、暗殺小蜘蛛、龍蜂女王、聞いたことのない魔物達が共存しているなんて……」

リムル

「ビックリした？」

シズ

「すごい。でも、良い村だと思うよ。」

リムル

「へへ。」

自分達が造った村を誉められるのは良い気分だ。

いずれは彼女達みたいに、人間達も気軽に来れるような町にしたい
と思っっているからな。

リムル

「・・・なあ、シズさんつてもしかしてには「スライムさん、さっきの
はゲームのセリフでしょ。」・・・え?」

シズ

『『悪いスライムじゃないよ。』ってやつ。』

リムル

「・・・」

リーアル

「やっぱり知ってたのか。」

シズ

「うん。私はやった事がないんだけど、同郷の子から聞いた事がある
んだ。」

そう言っつてシズさんは、リムルを持ち上げ抱き抱えた。

リムル

（おう！ この姿になってから、よく女の人に抱かれるな。）

（役得だなく。）

リーアル

（うん? 今リムルから邪よこしまな気配きはいが・・・）

シズ

「二人とも日本から来たの?」

リムル

「ああ、そうだよ。」

リーアル

「うん。」

シズ

「そっか！ 会えて嬉しいよ！」

俺とリムルは、お互いのことをシズさんに話した。

リムルはこの世界に転生する前は、職場の後輩達の相談に乗ろうとしていたところ、通り魔に刺されて死んでしまったようだ。

俺は飲食店のガス爆発に巻き込まれて死んでしまった。

そして、気が付いたらリムルはスライムに、俺は『聖龍』という龍種になっていた。

シズ

「え?! リーアルさん人間じゃないの?」

リーアル

「ああ、普段は覇^{オーラ}気をスキルで抑えてるんだ。」

そう言ってから、覇気を少しだけ解放すると頭に二本の角と、龍の瞳が出現した。

シズ

「! すごい!」

(覇気もすごいけど、綺麗な赤い目。)

リーアル

「こんな感じさ。修行すれば龍の姿にもなれるみたいだけど、今の俺じゃ無理みたいだ。」

(相棒が言ってたし、間違い無いだろう。)

シズ

「そっか、二人は転生者なんだ。」

「大変だったんだね。」

リムル

「シズさんは違うのか?」

シズ

「・・・私は、『召喚者』なの。」

リーアル

(召喚者? それってヴェルドラが言ってたな。)

ヴェルドラが封印されていた洞窟で、俺達は転生者のことを聞い

た、その他にもこの世界にやってくる方法があるらしい。

それが『異世界召喚』を可能にする大規模魔法だ。

これは30人以上の魔法使いが何日もかけて儀式を行い、異世界から呼び出す魔法だ。

異世界から呼び出す側の意図は、呼ばれた側に『強力な兵器』としての役割を期待して、異世界から呼び出すのだ。

呼び出す側を『召喚主』、呼び出された側を『召喚者』と呼ぶ。

その際に、召喚者は召喚主に逆らえないように、魔法で魂に呪いを刻まれるらしい。

だが、シズさんに呪いがかけられているようには見えない。

相棒

《告 解析鑑定の経過報告をします。》

《個体名・シズの魂には『呪い』に関する状態異常は確認できません。》

リアル

(そうか。引き続き頼むぞ。)

(シズさんに気付かれない様に慎重にな。)

相棒

《了。》

実はこっそり相棒に解析鑑定を頼んでいたのだ。

でも良かった、『呪い』の類いがかけられていなくて。

だとしたら、シズさんを呼び出したやつはシズさんをどうしたかったんだらうか？

どうやらシズさんは、後に『東京大空襲』と呼ばれる時代、日本が戦争をしている時代からこの世界に召喚されたらしい。

シズさんの話だと、シズさんは特定の個人によって召喚されたみたいだ。

その男はシズさんではなく別の人物を召喚しようとしていたらしく、ひどく落胆しその場を去ろうとしたがどんな気まぐれか、シズさんに精霊を憑依させ、死にそうになっていたシズさんの命を繋ぎ止めたのだ。

その時、同時に炎を操る力を手に入れた。

リアル

「要するに、人違いでこの世界に……」

シズ

「……」コク

リムル

「なんて傍迷惑な。」

戦争中に人違いでこの世界に召喚されるなんて。

相当苦労したんだろうな、シズさん。

リアル

「……でも、ある意味よかったのかもな。」

シズ

「え？」

リアル

「だって、そいつがシズさんをこの世界に召喚していなかったら、俺達三人が時代を越えてこの世界で出会うことなんてなかっただろうしさ。」

リムル

「確かに……それに関してはこの出会いを与えてくれたそいつに感謝だな。」

シズ

「……そうだね、私も二人に会えて嬉しいよ。」

かと言ってシズさんを召喚したそいつを許せるかと言われれば、許すことはできない。

一発ぶん殴ってやりたい。

リムル

「……あ！ そうだ、面白いものを見せてやるよ。」

シズ

「？」

リムル

（大賢者、『思念伝達』でシズさんに俺の記憶の一部を見せてやってくれ。）

大賢者

《了。》

リアル

「？」

(相棒、リムルは何してるんだ?)

相棒

《解 『思念伝達』 用い・個体名：シズに自身の記憶の一部を見せているようです。》

リアル

(あく、なるほど。)

思念伝達で俺達の時代の景色を見せているんだな。

シズ

「・・・？ 誰かの部屋？」

リアル

「え？」

リムル

「NOOOOO!!? 違う！ これじゃない!!」

シズ

「綺麗だったよ！」

部屋って、リムルの奴自分の部屋の景色でも見せたのか？

かなり慌てているが、何かシズさんに見られてはならない物でもあったのだろうか？

まあ、男が女に見られたく無い物なんていくらでもあるが。

リムル

「見せたいのはこっち！ こっちだから！」

すると、シズさんはまた別の景色でも見ているのか、表情が驚きに変わっていた。

シズ

「え?! これが・・・あの炎に包まれていた町？」

リムル

「俺も自身で見て、経験したわけじゃ無いけど、終戦後に復興に励む人

「達だよ。」

シズ

「こんなに綺麗に・・・！　すごい！」

「まるで、絵葉書で見たニューヨークの摩天楼みたい！」

リムルが見せているのはおそらく現代の東京の景色だろう。

シズさんの時代の人から見れば、物凄く発展した景色だろうな。

リムル

「こつちの世界でも、この景色に負けなくらいの街を作りたいと思っているんだ。」

リアル

「みんなが安心して、笑顔でいられる街にな。」

シズ

「そつか・・・できると思うよ、二人なら。」

俺とリムルの目的は、気の良い仲間達と面白おかしく毎日を過ごすことだからな。

その為にはまだまだ問題が山積みだけど、そう言われるとモチベーションが上がるというものだ。

頑張ろう。

カイジン

「おーい、リムルの旦那。」

リムル

「うん？」

その時、カイジンが俺達の所にやって来た。

カイジン

「村づくりの事で、相談があるんだが・・・今いいか。」

リムル

「わかったー。」

「ちよつと行ってくる。」

リアル

「おう。」

カイジン

「お邪魔だったか。」

リムル

「いや・・・そんなことは。」

カイジン

「赤くなってるぞ。」

リムル

「え！・・・いや、俺色変わらないし！」

カイジン

「ガハハハ。」

カイジンに揶揄われ、リムルは村に戻っていった。

その時、俺は一瞬、魔素の乱れを感じた。

そっちの方を見ると、シズさんが胸を押さえて蹲っていた。

リアル

「シズさん?!」

シズ

「はあ、はあ、だ・・・大丈夫、大丈夫だから。」

リアル

「・・・」

(思考加速。 相棒どうなっている?)

相棒

《告 個体名：シズに憑依している精霊が暴れたようです。》

《現在・彼女のUQスキル『変質者』(ウツロウモ)により・肉体の主導権を奪われな
いでいます。》

《しかし・精神的老化により・スキルの効果が減衰している模様。》

リアル

(対策は?)

相棒

《検討します。 しばらく時間がかかります。》

リアル

(できるだけ早く頼むぞ。)

相棒

《了。》

俺は思考加速を解除し、シズさんに問いかけた。

リアル

「シズさん、俺に何かできることはないか？」

シズ

「・・・気持ちは嬉しいけど、これは多分どうにもならないから。」

この感じだと、シズさんも自分の状態を把握しているんだろう。

俺はシズさんにある言葉を言った。

リアル

「シズさん。もしシズさんが、本当に絶望しそうになったら、俺とリムルがシズさんの『最後の希望』になるよ。」

シズ

「？ リーアルさん・・・それって？」

リアル

「今日はもう村に帰ろう。」

「ゆっくり休めば少しは楽になるだろうし。」

シズ

「・・・うん。わかった。」

それから俺とシズさんは村へと戻った。

その道中、俺達は無言で歩いていた。

実はその時、俺は夕陽に照らされてそう見えていただけと思っていたが、シズさんの剣の鞘が赤く光っていることに俺もシズさんも気づいていなかった。

リアル

(俺も考えておかないと、シズさんを救うための方法。)

自分が使っているユルトに着いた俺は、目を閉じ方法を考えていたが、いつの間にか寝落ちしていた。

|||||

○リムル||テンペスト 獲得スキル

Cスキル

・黒稲妻

黒嵐星狼に擬態した際に獲得した攻撃スキル以降、スライムの姿でも使用が可能になる

○エイダ||ドリユウズ 獲得スキル

UQスキル

・音銃

音銃剣錫音に触れた時に獲得したスキル

錫音の所持者として選ばれたため、音銃剣錫音を使用することができる

リアル||テンペストの無限収納にアクセスする権限を持ち、聖剣とライドブックの取り出しと収納ができる

現在、解析不明の封印が施されており変身は不可能

○リアル||テンペスト 獲得技術

・鳳凰天駆

ライドブックの『ブレイブドラゴン』と『ストームイーグル』を使った技

鳳凰をかたどった炎を纏い、上空から地上に向かって突進する

変身！ レジエンドワンダーコンボ！

―シズside―

一夜が明けたリムルさんとリアルさんの村。

今日はカバル達がブルムンド王国へ帰る。

カバル達とはここで別れる。

カバルとギドは支度を終えて待っている。

エレンと私は、ユルトの中で支度をしている最中である。

エレン

「ねえ、シズさん。一緒にブルムンドに帰りませんか？」

シズ

「えー！」

エレン

「このままお別れだなんて、寂しいですよ。」

そう言ってくれるのはすごく嬉しい。

シズ

「・・・貴方達は良い冒険者達だよ。」

「みんなと一緒に冒険するのも楽しいと思う。」

エレン

「じゃあー！」

エレンは期待の籠った目で私を見てくる。

でも、私は首を横に振る。

シズ

「ここまで一緒に旅をして、やっぱり仲間っていいなって思えた。」

「最後の旅が、貴方達と一緒に本当に良かったと思ってる。」

エレン

「最後って・・・」

そう、これで最後。

多分私は、もう長くない。

自身の内に憑依している精霊の力を抑えきれなくなっている。

自分のUQスキル『変質者』効果で、今まで何とか生きてきたけど、心の老化のせいとか、UQスキルの効果が弱まってしまっている。このままだと暴走の危険がある。

彼女達に迷惑はかけたくない。
だから私は。

シズ

「・・・実は私、もう何十年も生きてるの。」

「見た目は若くても、実は結構お婆ちゃんなんだよ。」

エレン

「へ？・・・何だ冗談かく。」

「脅かさないでよ。」

冗談じゃないんだけど。

多分、冒険ができる年じゃないから、冒険者を引退すると言う認識なのだろう。

まあ、仕方がない。

私は本当にそれくらいの長い年月を生きてきたから。

そんな時、思い返すと浮かび上がるのはあの時のリアルさんの言葉。

「俺とリムルがシズさんの『最後の希望』になるよ。」

この言葉だった。

この世界で出会った同郷の転生者の二人。

私も自身の精霊の制御の方法を探さなかった訳ではない。

結局分かったのは、精霊との対話が一番の近道だと言うこと。

しかし、自分のとってこの精霊は『呪い』だ。

今更対話なんてする気になれなかった。

シズ

（・・・もつと生きたいな。）

最後くらい、自分の好きな様に生きてみるのも良いかもしれない。
いざと言う時は二人を頼ってみよう。

シズ

（どうせ死ぬんなら・・・二人の手で・・・）



リーリアル side ー

今日はカバル達がブルムンド王国へ、シズさんが単身旅に出る日だ。

カバルとギドは支度が済み、今はエレンとシズさんを待っている。そこへ、俺は葛乃葉とアーセナ、リムルがリグルドとリグルを連れて、見送りに来た。

リーリアル

「ゆっくり休めたか？」

カバル

「ええ、三日ぶりにゆっくり休めましたよ。」

まあ、三日も巨大妖蟻ジギアントアントに追い掛けられていたんだから、疲れも溜まっているはずだな。

こうやって縁ができたのだから、カバル達にはキッチンと国に帰ってもらいたい。

そして、またこの村に遊びに来てほしい。

その時は、出来ればシズさんと一緒に。

リーリアル

(相棒、シズさんを救う方法は見つかったか?)

相棒

《解 方法はすでに発見しています。》

《ですが・現状・個体名・シズを救う事は不可能です。》

? 方法が分かっているのに不可能ってなんだ?

リーリアル

(どう言う事だ?)

相棒

《解 この方法は・マスターが変身できた場合を想定しているため・現状は不可能と判断しました。》

リーリアル

(それは無理だな。)

(ちなみに、他に方法はないのか?)

相棒

《解 可能性としましては、『希望の竜使い ウィザード』『エグゼイド 医療日誌』『パンドラビットのビルド』のライドブックを用いた『習得三閃』であれば・42・5%の確率で成功します。》

《ウィザードの『アンダーワールドへ入る力』で彼女の精神世界から精霊を分離し・エグゼイドの『リプログラミング』で個体名・シズの細胞にマスターの細胞の情報を上書きし・ビルドの『創る』力で細胞の生命力に耐えうる肉体を形成することで・個体名・シズの種族を『人間』から『龍人』へ進化させる事で急激な老化による死亡を防ぐ事が可能です。》

42・5%って、成功率五割もないのか。

だが、なるほど・・・方法は理解した。

リアル

(・・・原因は?)

相棒

《解 エネルギ 魔素の絶対量が足りないのが原因です。》

相棒によると、変身前と後では魔素量が3倍は違うらしい。

変身するとその恩恵でスキルの性能が上がるらしい。

スキルから生み出されたライドブックにもそれが当てはまるみたいだ。

変身が可能ならば、成功率は98・2%にまで上がるらしい。

変身による『三冊撃』ならば、ブックと聖剣の力をライダーキックの一点に集中できるため、『習得三閃』よりも効率良くシズさんに俺の魔素を伝えやすくなる。

こうなつて来ると変身できない自分が恨めしい。

一体どうやったら変身できるんだろうか?

葛乃葉

「? リーアル様、どうかしましたか?」

リアル

「いや、何でもない。」

そんなことを考えている内に、エレンとシズさんが支度を終えて出てきた。

リグル

「あ！ 来たようですよ。」

エレン

「お待ちせう。」

ギド

「待ってたでやすよく。」

カバル

「女は支度が長いよな。」

その時、シズさんが歩みを止めた。

エレン

「？ シズさん？」

シズ

「・・・グッ！ ガア・・・」

突然シズさんが胸を押さえて蹲った。

エレン

「シズさん!?!」

リーアル

「何だ？ どうしたんだ？」

相棒

《告 対象の魔力の増大を確認。》

《警戒を！》

リーアル

「!?!」

ゴオオ!!

地面から炎が立ち上り、シズさんを包む。

球状に変化したと思ったら、突然爆発した。

その爆風で、俺達は吹き飛ばされた。

リムル

「おつと！ おい！ みんな無事か？」

リーアル

「何とかな。」

リグル

「我々も大丈夫です。」

リグルとリグルドも平気みたいだ。

あの三人は？

カバル

「何だよこれ？ 危険手当上乘せしてくれよ！」

ギド

「だから！ それはフューズの旦那にいうでやすよ！」

エレン

「シズさん！」

大丈夫そうだな。

シズさんはいまだに炎を纏い、宙に浮いていた宙に浮いていた。今のシズさんには、シズさんとしての意志が感じられない。

カバル

「シズ？・・・炎。」

「・・・まさか!? シズエーイザワ！」

エレン

「え!!？」

ギド

「シズエーイザワって、『爆炎の支配者』でやすか?!」

『爆炎の支配者』？

シズさんのことを言っているみたいだが？

エレン

「それって、50年前に活躍したギルドの英雄じゃないの？」

カバル

「あの人か！ もう引退したんじゃないのかよ？」

シズエーイザワ。

ギルドの英雄か。

やっぱりシズさんってすごい人だったんだな。

しかし、そんな人でも精霊の暴走を止められなかったのか。

リムル

「リグルド、リグル、村のみんなを避難させろ。」

リーアル

「ここは俺たちが引き受ける。」

リグルド

「しかし！」

リグル

「お二人を置いていくわけには。」

リムル

「命令だ！ 行け！」

リーアル

「葛乃葉、アーセナ、お前達も行くんだ。」

「いざという時はお前達が村の住民を守れ。」

リグルド・リグル

「・・・ハッ！」

葛乃葉

「わかりました！」

アーセナ

「主様、気を付けて！」

俺とリムルの命令を聞き、急いで村の住人を避難させにいく四人。

俺も、必冊ホルダーから聖剣を抜き、前に出る。

リムル

『嵐牙、いるか？』

嵐牙

『ハッ！ 主よ、ここに。』

リムル

『戦いが始まったら頼むぞ。』

嵐牙

『承知！』

リムルも自身の影に身を潜めている嵐牙に『思念伝達』で指示を出していた。

シズさんの顔からいつも付けている仮面と、腰に差している剣が地面に落ちる。

仮面の下にあったシズさんの目は真っ赤に光っており、そこから涙が流れていた。

その涙も周囲の炎によって瞬時に蒸発してしまう。

またしても球状の炎に包まれたと思っただら、そこから出て来たのはシズさんではなかった。

炎の精霊

「……ギイイイイイイイイ！」

髪のように見える部分が、まるで炎の様に揺らめく。

二本の角に、褐色の肌。

2 mサイズの人型の精霊が出現した。

カバル

「炎の上位精霊、『イフリート』！」

エレン

「あ……あんなの勝てる気がしないんですけど！」

ギド

「無理でやす……あつし達はここで死ぬんでやす。」

「短い人生でやしたね。」

リアル

「おいおい、縁起でもないこと言うなよ。」

リムル

「そうだぞ、お前達も逃げとけ。」

「俺とリアルが何とかする。」

イフリートはさつきから叫ぶばかりで、こちらを攻撃してこない。しかし、放たれる殺気が尋常ではない。

普通の人間では身体がすぐんで動かなくなるだろう。

しかし、カバル達も冒険者。

万が一の時の覚悟は決まっているのか、この殺気の中でも十分に動

けるみたいだ。

リムルが三人に逃げろと促すが。

カバル

「・・・そういう訳にはいかねえよ。」

そう言つてカバルは背中中の剣を抜く。

それを見て、ギドはナイフを抜き。

エレンも杖を構える。

カバル

「あの人が、どうしてこんな事になったのかしらねえけど。」

ギド

「あつしらの仲間ですすよ！」

エレン

「放つておけないわ！」

こいつらはやっぱりいい奴らだな。

無茶だけはしない様に、見ておかないとな。

リムル

「そうか。」

(いい奴らだな。)「いくぞ！」

リーアル

「おう！ イフリート、ノーコンティニューでお前を攻略してやるぜ！」

俺は『言つてみたいセリフ集』の中の一つ。

仮面ライダーエグゼイドに登場する、『宝生 永夢』のセリフを少しアレンジして言い放ち、火炎剣烈火をイフリートに向ける。

リムル

「一応聞くが・・・イフリート、お前の目的は何だ？」

イフリートはその質問に答える気がないので、左手を上に向ける。

左手の指先に炎の球が出現し、それをリムルに向けて放つた。

リムルはその炎の球を後ろに飛び跳ねて躲し、『水刃』を放つ。

しかし、当たる寸前で「ジュッ！」と、蒸発してしまった。

すると、イフリートは3本の火柱を出現させ、何かを呼び出した。

見た目は炎を吐く空飛ぶトカゲみたいだが。

リアル

「何だあれ？」

相棒

《解 イフリートが呼び出した炎の使い魔・『サラマンダー火炎蜥蜴』です。》

リアル

「使い魔！ そんなの呼べるのか、あいつ。」

あれもスキルだろうか？

呼び出された3匹の火炎蜥蜴は、リムル、俺、カバル達にそれぞれ向かっていった。

リアル

「アイツって、物理攻撃は効くのか？」

相棒

《解 精神生命体である火炎蜥蜴に・物理攻撃は無意味です。》

リアル

「だよな。」

相棒

《ですが・マスターの聖剣であれば・直接ダメージを与えることは可能です。》

リアル

「マジか！ なら問題ないな。」

こうなつて来ると、一番心配なのはカバル達だが、彼らは防御の障壁を張りつつ、エレンの氷結魔法による遠距離攻撃で対応している。

リムルは嵐牙と共にイフリートを警戒しつつ、火炎蜥蜴の攻撃を躲しながら、対策を考えているようだ。

リムル

「つてアホかー！ 意味ねえだろー！」

リアル

「？ リムルはどうしたんだ？」

相棒

《解 個体名・リムルⅡテンペストより・体内に溜めている水を火炎蜥

蜴に放射する案を『大賢者』に提案したところ・水蒸気爆発が起きるといふ返答を聞き・先程の反応に至りました。》

リアル

「？ 水蒸気爆発が起きるとどうなる？」

相棒

《解 建設中の村を含めた・周囲一帯が更地になります。》

リアル

「あゝ、なるほど。」

火炎蜥蜴

「ギイイイ！」

リアル

「鬱陶しい！」

さて、聖剣が効くと分かればどうとでもなるが、大量の水を浴びせるのはNGだな。

『タテガミ水獣戦記』の力なら、火炎蜥蜴を氷漬けにしてやれるんだが、生憎まだ持っていない。

『オーシャンヒストリー』は作中も詳しい能力は描写されていないかったが、おそらく海とか水の生き物に関する力だろう。

戦い方が限定される相手だな。

リアル

(いつそ純粋な魔素の塊をぶつければ消滅するかな?)

俺がそう思っていると、突然リムルがエレンが放った氷の魔法アイシクルランス『水氷大魔槍』の前に飛び出し、捕食した。

すると。

相棒

《告 個体名・リムルⅡテンペストが『水氷大魔槍』の解析鑑定に成功。》

《『水氷大魔槍』の習得に成功しました。》

《告 EXスキル『絆の架け橋』の効果が発動。》

《魂の回廊を介して・『水氷大魔槍』の情報を取得。》

《『水氷大魔槍』の習得に成功しました。》

《告 UQスキル『不思議な仮面の書』が『水氷大魔槍』の情報二元にライドブックを生成。》

《ライドブック・『氷結魔槍の書』が使用可能になります。》

なんと！

実にタイムリーだ。

リムル、グツジョブ！

俺は無限収納から『氷結魔槍の書』を取り出し、火炎剣烈火に『氷結魔槍の書』を読み込ませた。

『氷結魔槍の書！』

『ふむふむ！』

火炎蜥蜴がこっちに向かって突っ込んでくる。

その瞬間、また技のビジョンが浮かんだ。

リアル

『ファンドル・グランデ』！

火炎剣烈火を地面に突き刺すと地面が盛り上がり氷塊が出現する、すると氷塊が火炎蜥蜴を飲み込み氷結させる。

その状態で、氷の塊を烈火で横一文字に斬り裂く。

氷塊に亀裂が生じ、粉々に砕け散った。

リムルの方も、習得した『水氷大魔槍』をアレンジした魔法、アイシクルショット『水氷大魔散弾』を使って、火炎蜥蜴を撃破していた。

残りの一体も始末しようと、俺とリムルがエレン達に駆け寄るが、残りの一体の腹部が赤く光だした。

カバル

「こいつ！ 自爆する気か?！」

その瞬間、カバルは火炎蜥蜴に背をむけありったけの魔力を障壁に注ぎ、ギドはエレンを守るために覆いかぶさる。

しかし、爆発の規模が大きく、張っていた障壁は砕け散り、三人は吹き飛ばされた。

リムル

「おい！ 大丈夫・・・じゃないな。」

リアル

「これ以上は無理だな。」

リムル

「ああ、嵐牙お前はこの三人を安全な場所に運んでくれ。」

嵐牙

「しかし！」

リムル

「行け！」

嵐牙

「ハッ！ 仰せのままに、ご武運を。」

リムル

「安心しろ。 イフリートは俺とリアルが何とかする。」

それを聞くと、嵐牙は三人を連れて走っていった。

改めて、俺とリムルはイフリートの前に立ちはだかる。

すると、イフリートは炎で自分の分身を作り出し、俺達を囲む。

地面に降りてきたことで、高温により地面が溶けドロドロになっていく。

リムルが体をバネの様な形にし、回転し始める。

すると、周囲に氷の槍が出現する。

これは、さつき見せたやつだ。

リムル

『『水氷大魔散弾』！』

この魔法により、イフリートは本体以外の全ての分身が消滅した。

本体にも何本か直撃していたが、顔色ひとつ変えない。

効いているかどうか分からないが、問題なく戦えそうだ。

しかしその時、地面が赤く光っていた。

いつの間にか魔法陣が出現していた。

イフリート

「・・・イエアアアアアア!!」

俺は危険を感じ、咄嗟に飛び退く。

しかし、リムルが遅れた。

イフリートの叫びと共に、炎の竜巻がリムルを襲った。

リアル

「リムル!!」

相棒

《告 イフリーストのスキル・最上位範囲攻撃『フレアサークル炎化爆獄陣』です。》
《・・・しかしながら・個体名・リムルⅡテンペストには無力であると進言します。》

リアル

「え?・・・あ!　そうか、リムルには。」

相棒

《解 『熱変動耐性』により、熱によるダメージは・自動的に無効化されていきます。》

リアル

「なら大丈夫か。　さて、シズさんを助けないと。」

相棒

《警告 『習得三閃』が失敗した場合・肉体と細胞のバランスが崩壊し・個体名・シズエⅡイザワの肉体は消滅します。》

リアル

「マジか?!」

相棒

《マジです。》

いや、聞いてない。

成功率42・5%じゃ、いまいち心許ない。

どうして自分は変身出来ないのか?

今から別の方法を探そうにも、そんな悠長なことをしていたらシズさんが持たないだろう。

リアル

(くそー!　リムルに捕食してもらうしか方法はないのか?)

しかし、その方法だとイフリーストとシズさんを分離できても、シズさんは急激な老化によって死んでしまう。

せっかく知り合ったリムル以外の異世界人。

こんな事で失いたくない。

リムルだって絶対後悔するだろう。

リアル

「・・・それでも、何もしない訳にはいかないよな。」

どんなに低い可能性でも、助かる可能性があるならやるべきだ。

・・・これは現実逃避だろうか？

無理矢理そう自分に言い聞かせているだけではないだろうか？

失敗すればきつとリムルも怒るし、恨むと思う。

リアル

「それでもやるしかない。」

「普通にやって魔素が足りないのなら、俺の全ての魔素を使えばいいはずだ。」

相棒

《解 全ての魔素を消費した場合・成功確率は75・1%に上昇します。》

《しかし・その方法では・マスターの生命活動に影響が及びます。》

《最悪・死に至る可能性も。》

なるほど、いいことを聞いた。

命懸けでやれば何とかかなりそうだ。

だが、死ぬつもりはない。

シズさんは絶対救い出す。

そのついでに、俺も生き延びてやる。

リアル

「・・・覚悟を超えた先に希望はある！」

仮面ライダーセイバーである『神山 飛羽真』の先代である、『上條大地』の言葉が思い浮かんだ。

火炎剣烈火を両手で握りしめ、イフリートに視線を向ける。

すると、地面に落ちていたシズさんの剣の鞘の部分が、強い光を放ち始めた。

イフリート

「ウウー！」

リアル

「何だ？」

鞘から剣が抜け落ち、鞘が俺の元へやってくる。

鞘は少しずつ形を変えていき、次第に俺が知っている形になった。

リアル

「っ!? ソードライバー!」

それは、『聖剣ソードライバー』だった。

どうしてシズさんの剣の鞘が？

という疑問が浮かんだが、俺は咄嗟にソードライバーに手を伸ばし、腰に当ててみた。

すると、ベルトが巻きつき装着される。

その時。

確認しました。

『聖剣ソードライバー』の起動を確認。

各種ドライバー及び・聖剣の変身機能の封印の解除……………成功しました。

相棒

《告 『世界の言葉』からの申告を確認。》

《各種聖剣の変身機能の封印が解除されました。》

《告 覇剣ブレードライバー・邪剣カリバードライバー・最光ドライバーの封印が解除されました。》

《告 『聖剣ソードライバー』の情報を元に『聖剣ソードライバー』を無限収納内に存在する・魔鉱塊を用いて複製……成功しました。》

今まで謎の封印のせいで変身ができなかったが、ソードライバーを手に入れたことでその封印が解除されたみたいだ。

リアル

「これならいける!」

すると、炎化爆獄陣の中から糸が飛び出してきた。

リムルの『粘鋼糸』だ。

それにより、イフリートを捕縛する。

炎化爆獄陣が解除され、無傷のリムルが出てきた。
リムル

「残念、俺に炎は効かないんだよ。」

イフリートは糸を焼き切ろうとするが、『熱変動耐性』を持っているリムルが出した糸だからなのか、燃えることがなかった。

リムル

「さて、シズさんを返してもらおうか?」

リムルがUQスキル『捕食者』を発動し、イフリートを捕食しようとする。

リアル

「リムル待て!」

リムル

「え?!」

リアル

「捕食するのはもう少し待て、俺が合図を出すから待ってくれ。」

リムル

「え? でも・・・どうする気だ?」

リアル

「こうするんだよ。」

俺は、火炎剣烈火をドードライバーに納刀し『無限収納』から三つのライドブックを出し、起動した。

『希望の竜使い ウィザード!』

『かつてドラゴンを従え、最後の希望となる戦士がいた・・・』

『エグゼイド 医療日誌!』

『とある病から人々を救うため、天才ゲーマーが立ち上がった・・・』

『パンドラビットのビルド!』

『この二つの力が混ざり合う時、世界にLOVE & PIECEが訪れる・・・』

それぞれのライドブックが中に浮き、俺の前に現れる。

起動音が再生し、ページが開かれるとその本の物語が朗読される。

朗読が終わると自動的にページがしまり、俺はソードライバーのライトシエルフにウィザード、ミドルシエルフにビルド、レフトシエルフにエグゼイドのライドブックをセットする。

すると、軽快な音が鳴り響く。

お馴染みのドライバーの待機音である。

烈火の柄を掴み、引き抜く。

『烈火拔刀!』

リーアル

「・・・変身!」

炎を纏った火炎剣烈火でX字の斬撃を飛ばす。

右肩に『ウイザードリング』を模したショルダーアーマーが付き、右手の甲から腕にかけて、青・緑・黄の宝石が出現する。

腰のベルトから黒いマントが出現する。

『伝説のライダーが集いし時!』

左肩に『ライダーガシャット』を模したショルダーアーマーが付き、左腕にゲーム病診断装置『ゲームスコープ』が出現する。

両肩から『ライダーガシャット』の『RGサーキットボード』の基盤を模した黒い模様が入ったピンク色のマントが出現する。

『正義の剣が〜! 悪を断つ〜!』

頭部には胸から伸びた赤・黄・青・紫の『フルボトルパイプライン』が伸び、額から左右に分かれ、赤・黄と青・紫のパイプの様な形のセンサーが伸びる。

胸の中心には、ウイザード・ビルド・エグゼイドの『ライダーズクレスト』が三角形の形に刻まれ、その中心部分にセイバーの『ライダーズクレスト』が刻まれた。

『レジェンドライダー!』

火炎剣烈火で飛ばした炎を斬撃が戻ってきて、マスクに『クロスフレイムバイザー』を形成する。

『ウイザード!』『ビルド!』『エグゼイド!』

『伝説三冊!』

『正義の心で満たされた、伝説の剣が今ここに!』

仮面ライダーセイバー・レジェンドワンダーコンボの誕生である。

リムル

「え?! それって、仮面ライダー!?!」

リーアル

「リムル、そのままイフリートを縛っておけよ。」

俺は火炎剣烈火を再度ドライバーに納刀し、トリガーを2回引く。

『必殺読破！』

『ウイザード！』『ビルド！』『エグゼイド！』

『三冊撃！』『ファ・ファ・ファ・ファイヤー！』

リーアル

『豪火三蹴撃！』

三人のレジエンドライダーの力が右足に集中する。

その状態でジャンプし、右足を突き出す。

リーアル

「ハアアアアアア！」

イフリート

「!! ガアア！」

ライダーキックがイフリートに炸裂する。

その瞬間、俺はイフリートの精神世界へ入り込み、シズさんの肉体と魂を発見しその勢いで精神世界から脱出する。

イフリートの真後ろに着地した俺の腕の中には、目を閉じ寝息を立てているシズさんがいた。

リーアル

「リムル！ 今だ！」

リムル

「よし！ 『捕食者』！」

シズさんを奪われ動揺するイフリートを、リムルは『捕食者』で捕食した。

後に残ったのは、俺とリムルそして、シズさんだけだった。

イフリートがいなくなったからなのか？ さっきまで曇っていた空が青く晴れ渡っていた。

リーアル

「どうだ？ 上手くいったか？」

相棒

《告 個体名・シズエーイザワの『龍人』への進化を確認しました。》
《肉体の急激な・老化も確認できません。》
《肉体と細胞の拒絶反応も確認できません。》

リアル

「じゃあー！」

相棒

《成功です。》

リアル

「よし！・・・あれ？」

急に視界がぐらつき、力が抜ける。

咄嗟に、シズさんを地面に落とさないようにゆっくり寝かせる。

それを見届けた瞬間、視界が真っ暗になり、倒れた。

相棒

《告 マスターの肉体的・精神的消耗を確認。》

《変身を強制解除・低位活動状態へ移行します。》

《完全回復の時刻は・2日後になります。》

リムル

「?! シズさん！ リーアル！」

俺達を心配してリムルが近づいて来る。

気絶した俺は知らなかったが、シズさんの手の中には『希望の竜使

い ウィザード』のライドブックが握られていた。

その頃、リムルに捕食されたイフリートは。

◇

ーリムルの『胃袋』の中ー

イフリートは、気が付いたら真っ暗な空間にいた。

自身の炎を使って脱出を試みるが空間が広大なためか？ 放出し

た炎はただ消えるだけだった。

???

「観念せよ、イフリートよ。」

イフリート

「？」

イフリートは気づいていなかった。

目の前に圧倒的な存在がいると言うことに。

???

「貴様にこの空間は破れんぞ。」

最初は臆げだったその存在が、次第に鮮明になっていく。

イフリートが全体像を把握した時。

イフリート

「?!？」

???

「そもそも貴様が敵う相手ではないわ。」

「リムルとリアルは我が盟友ぞ。」

この時イフリートは理解した。

どうして、たかがスライムと人間があれほどの力を持っているのか

？

ちなみに、リアルはイフリートと戦っていた時は覇気オーラをスキルで

抑えていたので、イフリートには『人間』と認識されていた。

ヴェルドラ

「我は『暴風竜 ヴェルドラ』テンペスト。」

「ちやうど遊び相手が欲しかったところだ、心ゆくまで相手をしてやるろう。」

この後イフリートがどうなったのか？

それを知るのは、イフリート本人と、俺ダチとリムルの心友ダチのヴェルドラだけである。

|||||

◆リアル||テンペスト

・各種聖剣の変身機能及びドライバーの変身機能の封印が解除された

・魔鋇塊を使用し、『聖劍ソードライバー』の複製を製作
・覇剣ブレードライバー・邪剣カリバードライバー・最光ドライバ
を使用しての変身が可能

○習得魔法

・水氷大魔槍

鋭い氷の弾丸を標的に向けて放つ

○獲得技術

・豪火三蹴撃

レジェンドワンダーコンボを使用した際の『ライダーキック三冊撃』

・ファンドル・グランデ

地面を隆起させ、氷塊を出現させ対象を凍り付かせ、対象を粉碎す
る

○獲得スキル（絆の架け橋の効果）

・炎熱操作

炎や熱を自在に操る

・炎熱攻撃無効＋熱変動耐性＝熱変動無効

炎や熱による攻撃を無効化する

・範囲結界

広範囲の結界を展開する

・分身体

魔素を消費し、自身の分身を作り出す

○統合進化

・炎熱攻撃無効＋熱変動耐性＝熱変動無効

自身に及ぶ熱の変動を無効化する

○スキル連結

・範囲結界＋各種耐性＝多重結界

・炎熱操作＋範囲結界＝炎化爆獄陣

結界と炎による広範囲攻撃

○獲得ライドブック

・氷結魔槍の書

聖剣に氷属性を付与するライドブック

ワンダーコンボには使用できない

◆リムルⅡテンペスト

○獲得魔法

- ・ 水氷大魔散弾

無数の氷の弾丸を対象に放つ。

○獲得スキル

- ・ 炎化
- ・ 炎熱操作
- ・ 炎熱攻撃無効
- ・ 範囲結界
- ・ 分身体

|||||

○補足（一応）

リムルは2013年に登場した『仮面ライダー鎧武』までの仮面ライダーは知っているが、それ以降の仮面ライダーは知らない。

その原因は、通り魔に刺されて死亡した時期が2013年だったから。

つまり、それ以降の仮面ライダー、2014年登場の『仮面ライダードライブ』から2020年登場の『仮面ライダーセイバー』は未視聴。

リアルの変身を見て、「え?! それって、仮面ライダー!?!」と驚いたのは『ウイザード』と言う単語と『ライダー』と言う単語、そして『最後の希望』と言う単語から導き出したから。

リムルとリアルは、転生前は別々の時間軸で死亡したが、転生時は同じ時間・同じ場所に奇跡的に転生した。

リムルは2013年に死亡し、『仮面ライダー鎧武』第42話まで視聴。
聴。

残り5話は未視聴。

リアルは『クロスセイバー』登場後の2021年に死亡。

『仮面ライダーセイバー』第40章まで視聴。

残り8話は未視聴。

共に歩む想い

イフリートとの戦いから2日後、俺は自分のユルトの中のベッドの上で低位活動状態スリープモードから復活した。

シズさんの事が気になり、彼女が寝かされているユルトに出向こうとした時リムルがやってきた。

リアル

「よっ！ リムル。」

リムル

「おお、リアル起きたんだな。」

リアル

「おう、ついさっきな。」

「レジェンドワンダーコンボの反動で低位活動状態になるとは思わなかったけどな。」

リムル

「それなんだけど、お前もしかして仮面ライダーなのか？」

リアル

「あれ？ 言ってなかったっけ？」

リムル

「ああ、初耳だぞ。」

俺はリムルに改めて自分のスキルについて話した。

俺が変身した仮面ライダーは令和2年、2020年から2021年の（おそらく）夏まで放送されていた『仮面ライダーセイバー』という仮面ライダーだと言うことを。

俺の持つスキルも仮面ライダーセイバーに関するスキルがほとんどだ。

ただ、イフリートと戦うまでは変身が出来ないでいた。

ソードライバーが無かったからと言うのも理由の人るだが、ドライバーを必要としない聖剣での変身や、別のドライバーを使用した仮面ライダーへの変身すら出来なかった。

それが、シズさんの剣の鞘が赤く光出したと思ったら、ソードライバーに変化し、それを腰に付けた時に他の聖剣やドライバーでの変身が出来た様になったのだ。

リムル

「じゃあ、俺も変身出来るってことか？」

リーアル

「どうだろうな？ リムルは人間の姿がないし。」

リムル

「ああ、そっか。」

仮にスライムの状態で変身した場合どうなるんだろう？

想像できないな。

ゆるキャラとかになりそう。

リムルの話だと、シズさんはまだに目を覚ましていないようだ。

一応直接みに行ったが、顔色も良く呼吸も正常だったので一安心した。

彼女が眠っている間に、イフリートの攻撃の余波の影響を受けた村の一区画が焼けてしまったので、その区画の修繕と開発を再開した。ちなみに、カバル達は回復薬のお陰ですぐに回復したので、手伝ってもらっている。

それからさらに三日が経過し、ようやくシズさんが目を覚ました。

リムルは先に来ていて、シズさんと一緒にいた。

リーアル

「シズさん！ 目が覚めたんですね。」

シズ

「リーアルさん、おはよう。」

シズさんは最初、自分が生きている事に戸惑っていたが、リムルのが事情を説明してくれていたようで俺にお礼を言ってきた。

本当に彼女を助ける事ができてよかった。

じゃなかったら絶対後悔していただろう。

リムル

「俺からも礼を言うぜ、リーアルありがとな。」

リアル

「うん？　なんで？」

リムル

「だって、俺の能力だけだとシズさんを救えなかったかも知れないからな。」

「仮面ライダーの力を持っているお前がいてくれて本当に良かったよ。」

リアル

「いや、俺は自分がしたいことをしただけだし・・・」

リムル

「謙遜するなよ、もっと胸張っていいぞ。　仮面ライダーセイバー。」

リアル

「いやいや・・・」

そう言っただけでリムルが揶揄ってくる。

だが、やっぱり謙遜はしてしまう。

自分はまだ仮面ライダーとして戦ったことなんて、イフリートの戦闘の時から初めてだし、『仮面ライダー』を名乗れるほど自惚れられない。

リアル

「あ！　そうだ、シズさん。」

シズ

「？　何かな？」

リアル

「聞こうと思っただけなんですけど、シズさんの剣の鞘がソードライバーになったんですけど、何か知ってますか？」

シズ

「それが、わからないの。」

「それは、私を救ってくれた勇者が私と別れて旅立った時、暫く一緒に旅をしていた剣士の人が、そのソードライバーを私の剣の鞘に変えて「いずれ、それを必要とする人が現れるから」って私に持たせたの。」

「自分のことを『時の王』とか、変な冗談を言ってたけど。」

リアル

「時の王？」

その言葉を聞いて真っ先に思い浮かべたのが、平成最強にして頂天である『仮面ライダージオウ』である。

しかし、仮に本当に仮面ライダージオウだったとして、どうしてこの世界にいたのか？

なぜソードライバーを持っていたのか？

今もこの世界にいるのか？

シズさんの話だと、暴風竜ヴェルドラの消失を聞いてブルムンド王国へ行く前に、その剣士とは別れてしまったのでその後どうなったかはわからないと言っていた。

ただ、その実力は確かで当時のシズさんでも絶対勝てない、もしかしたら彼女を救ったという勇者と互角かそれ以上の実力だったらしい。

一緒に旅をしている間、鍛えてもらっていたらしい。

しかし、そんな人でもシズさんの内にいる精霊に関しては、どうにもならなかった・・・のだろうか？

もし本当に仮面ライダージオウならその辺りもなんとかしてしまいたいそうだが？

まあ、いない奴の事を気にしても仕方がない。

切り替えていこう。

その後、俺の提案でリムルがシズさんを一度捕食し、吐き出した。理由は、人間の姿を得るためである。

最初はリムルも躊躇していたが、人間の姿があった方がこの先便利だというシズの説得もあり、意を決して彼女を捕食したのだ。

捕食し吐き出したリムルは見事、シズさんそっくりの人間の姿を手に入れたのだ。

しかし、その時の感想をリムルは。

リムル

「・・・なんか、やばかった。妙にゾクゾクした。」／／／／／
シズさんは。

シズ

「私も・・・その、全身がリムルさんに包まれている状態で・・・き、気持ちよかったよ。」／／／／／

こんな風に、二人とも照れ臭そうにしていた。

暫くすると、カバル達3人組がリグルド、嵐牙、葛乃葉と一緒にシズさんの見舞いにやってきた。

カバル達3人は最初目の前にいるリムルがリムルだということに気付いていなかった。

葛乃葉達に言われて初めて気づいたくらいだ。

確かに、人間の姿のリムルはまさしく小さいシズさんだ。

違うのは、身長と髪の色と目の色くらいだ。

後見えてしまったが、股間の部分に本来あるものがなかった。

それを見ていたシズさんは。

シズ

「み・・・見ちゃだめー！！！！」／／／／／

リムル

「うおー！」

と叫んで、リムルに自分に掛けてあった薄手の布団をかぶせた。

間接的に自分の裸を見られたようなものだし、流石に恥ずかしいか。

カバルとギドは、元気になったシズさんを見て安心した顔をしていた。

エレンはシズさんに抱きついて、「よかったー！」と言って暫く泣いていて、シズさんは「よしよし。」とエレンの頭を撫でて宥めていた。

さらに一日が経過し、カバル達はブルムンドに帰ることになった。

その際に、彼らの装備がポロポロなのを指摘すると。

カバル・ギド・エレン

「ひどっー！」

と、叫ぶ3人。

そんな3人に俺達は武具をプレゼントした。

カバル・ギド・エレン

「おおおおお!!」

カバル

「憧れのスケイルメイル！ いいですかこんな貫つちまって！」

エレン

「な、何これ！ 頑丈なのにすごく軽い！ て言うかすごく綺麗！」

ギド

「あ、あつしには勿体無い代物でやすが、うん？ 牙狼の毛皮まで使われてやすよ！」

これらの武器はカイジンとドワーフ三兄弟の手による力作である。本人達は試作の段階だからまだまだ改良の余地があると言っていたが、プロではない俺の目から見てもかなり高性能だと言うのがわかる。

カバル達は伝説の鍛冶職人であるカイジン達の作品だと知ると、とても感激していた。

「家宝にするー」とまで言っていたくらいだ。

人間国宝ならぬドワーフ国宝とでも言おうか。

カイジン達は相当有名だったようで、彼らにとっていい土産になっただろうな。

大はしやぎした後、彼らは村を去って行った。

シズさんは新しい体に慣れる為に、暫くこの村に滞在して鍛錬に励むと言っていた。

『龍人』と言う新しい種族になったことで、今までになかったスキルも増えたみたいで、確認も兼ねている。

リムルの『大賢者』や俺の『相棒』の解析鑑定能力で確認させてもらったところ、UQスキルの『変質者』ウツロウモ、EXスキルの『魔力感知』、Cスキルの『物理攻撃耐性』はそのまま残っていた。

しかし、イフリートを捕食したことで炎に関するスキルは『炎熱攻撃無効』しか残っていなかった。

その代わりに、新しいスキルが増えていた。

UQスキルの『指輪ウイの魔法ザ使い』、EXスキルの『上級戦闘術』『遠隔攻撃』『魔法石生成』、Cスキルの『指輪製作』『自己治癒』だ。

明らかに『仮面ライダーウィザード』に関するスキルが追加されている。

シズさんが『希望の竜使い ウィザード』のライドブックを握っていたことと何か関係があるのだろうか？

時期が来たら、シズさんは一度『イングラシア』と言う国に戻ると言っていた。

そこにはシズさんの教え子がいて、俺達と同じように異世界人である。

シズさんはその子供達のが気がかりで、旅をしている間ずっと気にしていたらしい。

リムルは、それがドワルゴンで占いをしてもらった時に見た子供達だと言うことに気づいた。

そして、『神楽坂 優樹』と『坂口日向』と言う男女。

男の方はこの世界に召喚された日本人であり、シズさんの元弟子。

イングラシアに本部を置く冒険者の互助組織を自由組合として再編し、冒険者や魔物に主にAとFを使った六段階評価を当てはめ、強さがわかりやすいように指標を作った自由組合の総長である。

また、自由学園と言う自由組合委員の育成機関の理事長も務めており、冒険者たちの安全を向上させようと尽力している。

女の方は神楽坂優樹と同じシズさんの弟子の一人であり、他者の能力を奪うスキル『篡奪者』^{コエルモノ}の持ち主で凄腕の剣士。

しかし、力をつけた後にシズを信じる事が出来ずに彼女の元を離れた。

その時はすでに彼女の实力はシズさんを超えていたらしい。

さらにもう一人。

この世界の魔王『レオンⅡクロムウエル』。

この魔王こそ、シズさんを人違いでこの世界に召喚した張本人である。

シズさんはもう一度会おうと言っていた。

しかし、会ってその後どうするのか、どうしたいのかはシズさんにもわからないようだ。

「あの時、どうして自分を生かしたのか？ それを確かめたいのかも。」シズさんはそう言っていた。

俺とリムルはこの『レオン・クロムウエル』だけには同じ考えだった。

シズさんを苦しめたこの男をぶん殴る！

これは決定事項である。

完全に自己満足であるが、そうしないと気が済まないのだ。

こうして、俺とリムルはシズさんの想いを一緒に背負って生きていくことを決意するのだった。

◇

ジユラの大森林の南部には荒野が広がっている。

ここにはある種族の国があったが、大飢饉により食糧が枯渇し、荒れ果てていた。

そんな荒野に一人の男が歩いていた。

日除けのために頭に布を巻いているが、その男は今にも倒れてしま

いそう

だ。???

「・・・腹が減った・・・なんでもいい・・・何か、食いたい・・・」
そう言っついに限界が来たのか、その男は地面に倒れてしまっ

た。

その際に頭の布が外れ、顔が露わになった。

その顔は豚のような顔をしていた。

彼は『豚頭族』と呼ばれる種族である。

そんな彼の元に、白いタキシードにペストマスクを付け白いシルクハットを被った男が、杖を片手に倒れているオークの前に現れた。

マスクを付けた男

「・・・お前に名前と食事をやろう。」
オークの男

「・・・あなたは？」

マスクを付けた男

「ゲルミュツド、俺のことは父と思うがいい。」

オークの男

「………」

オークの男は少し警戒した。

いきなり現れて自分に名を与え食事をくれると言うのだ。

何故そんな事をするのかと思っていると。

ゲルミュツド

「どうする？ このまま死ぬか？」

オークの男

（……賭けてみるか。）

「名前と……食事を……」

オークの男は警戒しつつ、今暫く生きながらえるのならそれも仕方ないと考えていた。

このオークの男は実は、豚頭族の王なのだ。

飢えに苦しんでいる民達の為にも死ねない。

そう自分にいい聞かせ、選択した。

ゲルミュツド

「……お前の名は『ゲルド』だ。」

ゲルミュツドがそう言うと、オークの男の体が光だす。

名付けが成功したようだ。

だが、次の瞬間不可解な事を言った。

ゲルミュツド

「やがて、ジュラの大森林を手中に収め、『豚頭魔王』オーク・デイズスターとなる者だ。」

ゲルミュツドはそう言うと、ゲルドに食事を与えた。

相当飢えていたのか？ ゲルドは目の前の瑞々しい肉に一心不乱に齧り付いていた。

|||||

人物紹介

名前：シズ（井沢 静江）

種族：龍人

武器：刀

所持スキル

UQスキル

・変質者（ウツロウモノ）：『統合』と『分離』という能力も持つ

統合：異なる対象同士を、一つのモノへと変質させる

分離：対象に備わる異なる性質を、別のモノとして分離する

（分離された対象が実態を持たない場合、消滅する場合がある）

・指輪（ウイザード）の魔法使い：『変身』『指輪の魔法』『乗騎召喚』『思考加速』の能力を持つ

変身：仮面ライダーウイザードに変身する

指輪の魔法：ウイザードライバーとウイザードリングがあれば、変身していなくても指輪を使った魔法が使用可能

乗騎召喚：マシンウインガーを呼び出すことができる

思考加速：通常の600倍に知覚速度を上昇させる

EXスキル

・魔力感知：周囲の魔素を感知し、周囲の状況を認識することができる

意志が込められた音波や魔力を理解できる言葉へ、

自動的に変換する

思念を乗せて音波や魔力を発すると、会話も可能

・上級戦闘術：戦闘技術を向上させる（考えてから行動に移るまでのタイムラグが1秒未満になる）

・遠隔攻撃：自身の遠距離攻撃が相手の耐久力・耐性・障壁・結界等の効果を無視するようになる

・魔法石生成：自身の魔素を消費して、魔法石を作ることができる

Cスキル

・物理攻撃耐性：物理攻撃に耐性を得る

・炎熱攻撃耐性：炎や熱による攻撃に耐性を得る

- ・自己回復：自身を回復する。状態異常は回復できない
- ・指輪製作：魔法石を指輪に加工することができる

魔王レオン・クロムウエルに召喚され、イフリートと同化させられた少女。

イフリートと同化している為、炎を自在に操る事が出来ることから、『爆炎の支配者』の異名で有名。

その他、剣技の腕前も超一流。

長い年月の間に冒険者から教育者などになり、死期が近づいて来たことから旅に出た。

その道中でリムルとリアルに出会うも、間もなくしてイフリートの暴走を引き起こしてしまう。

リムルとリアルに暴走を止めて貰い、種族が『龍人』に進化し新しい肉体とスキルを手に入れる。

助けられた際に、ライドブック『希望の竜使い ウィザード』を手に入れたことから、仮面ライダーに変身する術を獲得する。

彼女の持っているライドブックは、リアルスキルで作られた二冊目のライドブックで、シズとリアルの二人が一冊ずつ所持している。

人間の姿をしたリムルを、弟か妹のように気に入っており溺愛している。

スライムの姿の時に抱きしめてうたた寝するのが好き。

大鬼族の姉妹

俺達の町の開発は着々と進んでいた。

カイジンを筆頭にエイダさんやドワーフ3兄弟が住居建設、衣類の制作を進め、リグルドを中心に纏まりつつある。

しかし、流石にリグルド一人では500人以上の大所帯になったこの町の住人全てを纏めるのは大変なので、俺とリムルはまずリグルドを『ゴブリン・キング』に昇格させ、さらにその下に『ゴブリン・ロード』4人をつけた。

それぞれ、ルグルド、レグルド、ログルド、リリナという名前を付けた。

司法・立法・行政・生産管理を担当してもらっている。

彼等を付けたおかげか、はたまた『ゴブリン・キング』に昇格させたせいなのか、リグルドは更に筋骨隆々な身体つきになっていた。

これにサングラスと革ジャン、さらにショットガンを持たせると、かの有名な『T-800』の出来上がりである。

あと驚いたのが、上下水道の設置も進んでいるということだ。

リムルにはノウハウがあつたみたいで、カイジン達と一緒に設置に取り組んでいる。

確かに糞尿をそのままにするのは病気の原因になるので、対策はしておかないといけない。

しかし、下水の処理は如何するんだろうか？

まさか垂れ流しじゃあるまいし。

あれか？

下水を一時的に溜めておける所にスライム（リムル以外）でも放っておくんだろうか？

けど、リムル以外のスライムなんて未だに見たことがないが？

あと、気になった事があるんだが、そもそもこの世界の娯楽ってなんだ？

やることが落ち着いてきたので何と無くそんな事を考えてしまっ

た。

リグルドに聞くと、そもそも娯楽というものを知らないらしい。カイジン達に聞いたら、所謂俺達の前の世界にあったようなゲームやらスポーツやらの娯楽は無いらしい。

俺は「これはいかん！」と思った。

そこで異世界転生名物の娯楽、『リバーシ』をエイダさんの協力のもと作ってもらった。

早速町のみんなに体験してもらったところ、いい感じでウケた。特にゴブリンの子供達やシズさんの間で。

この調子で同様に『チェス』も作ってみた。

こちらは、リグルドやゴブリン・ロード達、カイジンやドワーフ3兄弟、エイダさん達を筆頭に大人組に受けた。

あと、警備隊に所属しているリグルやゴブカツにも人気があった。たまに警備隊の面々でチェス盤をそれなりの数で囲んで楽しんでいる。

その様子を見ていたが、おそらく皆俺より強い。特にゴブカツが現在警備隊の中で一番強い。

リムルも負けじとゴブカツに挑んだが惨敗し、溶けたアイスの様になっっていた。

リムルも決して弱くはないのだが。

ちなみにそのゴブカツだが、彼は俺が名付けをしたゴブリンだ。

最初はゴブタくらいの背丈だったのだが、今はリグルと同じくらいの背丈になっている。

しかも彼は『人鬼族』ではなく、なんと『小鬼英雄』だった。

これは役職とかではなく、種族としての『小鬼英雄』である。

『相棒』曰く、『小鬼英雄』は数千年に一度、極低確率で生まれる『ユニークモンスター』らしい。

それが判明した時のゴブカツは、自分が『小鬼英雄』になった事を驚いていた。

警備隊で狼鬼兵部隊を編成する話になったとき、リグルを部隊の総隊長にして、意外と実力のあるゴブタが狼鬼兵部隊の一番隊長

に、そしてリグルの強い推薦でゴブカツが二番隊隊長につくことになった。

娯楽の話に戻るが、リバーシやチェスだけだと物足りないの、他に何かないかと考えた結果、あるものか思い浮かんだ。

それが、『立体三目並べ』だった。

これは○？ゲームの三次元版である。

縦横に高さを加えたもので、縦又は上に三つ、横に三つ、斜めに三つ先に自分の玉を揃えたほうが勝ち、というゲームだ。

ただ、このゲームには「二段目の中央に置けない」「空中には置けない」という制限がある。

「二段目の中央に置けない」これは、高さ三段の内の二段目の中央のこと。

一段目の中央に玉が置かれた時点で二段目の中央には、先攻後攻どちらの物でもない中立の玉が置かれるのである。

簡単に例えるのなら、消すことのできない『おじやま○よ』である。

「空中に置けない」これは下から順に詰めていく必要がある、いきなり三段目の部分に玉を置くことができないのだ。

言い換えるなら、「重力を考慮する」という制限に言い換えられるだろう。

これがやってみると意外に本人が気づかない内に一列並んでいたなんてこともあり、結構白熱した。

並んだ際に宣言できなければ不成立のルールなので、見落として逆転負けなんてこともある。

このゲームも住人の間でウケた。

まあ、こんな感じで町の開発と娯楽の開発によって、大分町らしくなってきたと思う。

俺達が指示を出すまでもなく、みんな自主的に仕事をしてくれるので、俺とリムルはどうしても俺達の采配が必要な時以外は実質暇である。

と言う訳で、今俺は葛乃葉と一緒にワンダーワールドのリベラシオンに来ている。

理由はお互いの能力の確認のためだ。

何せ彼女は。

葛乃葉

「では、リアル様よろしくお願いします。」

リアル

「ああ、いつでもいいぞ。」

葛乃葉は剣を構え俺と向き合う。

数秒後、俺達はお互いの剣をぶつけ合った。

葛乃葉の剣の扱いは俺より上であるため、スキルの『魔闘法』と『縮地法』を駆使して戦うが、葛乃葉もUQスキル『仙通者』ヨステヒトが持つ『神足通』を使えるので、実質的に純粋な剣技による鍛錬になっている。

しかし、そこは一応彼女の主なので、『魔闘法』の出力を上げることが何とか勝つことができた。

葛乃葉

「やはり、リアル様にはかなわないですね。」

リアル

「いや、スキル無しの純粋な剣技のみでの勝負なら俺が負けていたかも知れない。」

「これからもたまに鍛錬に付き合ってくれ。」

葛乃葉

「はい。リアル様。」

花が咲いたような笑顔で答えてくれる。

やはり葛乃葉は奇麗だと思う。

リアル

「ところで、どうだその聖剣は？」

葛乃葉

「はい、不思議と手に馴染みます。」

「この闇黒剣月闇は。」

そう、なんと葛乃葉は闇黒剣月闇に選ばれたのだ。

葛乃葉は突然自分の元にやって来た闇黒剣月闇に驚いていたが、聖剣に選ばれたからには使いこなせる様になりたいと言って今回鍛錬

する事になったのだ。

鍛錬も一区切りつき、リベラシオンで軽く休憩をして元の世界へ戻った。

だが、案の定入った時とは別の場所に出た。

葛乃葉

「聞いていた通り、この効果は不便ですね。」

リアル

「そうだな。」

「まあ、魂の回廊の繋がりで皆が何処にいるかは・・・うん？」

その時、俺の耳に何か聞こえた。

まるで金属同士をぶつけた様な音を。

葛乃葉

「リアル様？」

リアル

「・・・」

耳を澄ませてみる。

すると確かに聞こえてくる。

これは、剣と剣がぶつかり合う音。

リアル

「！こっちか！」

葛乃葉

「！リアル様!？」

俺は音が鳴る方向へ向けて、走り出した。

「??? side」

私は必死になって逃げていた。

私を守る役目を与えられた従者である妹共に。

ここまでの逃避行で体はボロボロになり、瞳からは涙が流れる。

私は今、鎧を着た猪のような一団に追われていた。

彼等『豚頭族』である。

彼らは突然私達の里を襲ってきたのだ。

兄弟や同胞の皆が私と私の妹を逃がしてくれたのだ。
しかし、今私達は追い詰められていた。

豚頭族 A

「へへへ、ついに追い詰めたぞ。」

???

「ヒツ・・・」

???

「姉様・・・」

豚頭族 B

「お前達を食べば俺達は更に強くなる。」

血の付いた武器を握り、口から涎を垂らしながら迫ってくる。

見方によっては私達を食らうことで飢えを癒そうとしているよう
だ。

一匹の豚頭族が近づき、私達の命を奪うために武器を振り上げる。

???

(ごめんなさい、お兄様、みんな・・・ごめんなさい。)

???

「姉様！ だめえええ！」

妹が私を庇って私に覆いかぶさる。

しかし、その行為は意味がないだろう。

ただすこし死期が遠退いただけ。

私は目を閉じ、両手で顔を覆い、最後の瞬間を待つ。

その時、金属同士がぶつかる音がした。

何事かと恐る恐る目を開けると。

???

「おいおい、これはどういう状況だ？」

そこには少し青い黒髪と、ロングコートを着た男性が赤く美しい剣
を片手に豚頭族の武器を止めていた。

傍らには獣人かたわだろうか？

美しい銀の髪と金色の瞳を持つ獣人の女性だった。

リアル side

音がする方向に走って行くと、そこには二人の女性が猪のような頭をした鎧を着た魔物に襲われていた。

武器を振り上げ彼女たちを殺そうとしている様だったので、火炎剣烈火で相手の武器を止めた。

リアル

「おいおい、これはどういう状況だ？」

葛乃葉

「貴方達、大丈夫ですか？」

???

「え？」

???

「だれ？」

チラツと彼女達を見たが、一人は桃色の髪で目の下に血涙の様な模様がある美少女だ。

もう一人は赤い髪で少し野性味があるが、彼女も桃色の彼女と同じくらい美少女だった。

二人に共通しているのは額から角が生えていると言おう事だ。

二人共、自分たちに何が起きたのか分かっていない様子だ。

豚頭族C

「な?! なんだお前たちは？」

リアル

「うん? まあ・・・とりあえず吹き飛ばせ！」

豚頭族C

「ゴハッ！」

魔物の一匹が俺達に向かって叫ぶ。

そいつに向かって拳で胴体をぶん殴って吹き飛ばした。

桃色の美少女

「あ、あの・・・あなたは？」

リアル

「あ、話は後でな。」

桃色の美少女

「は、はい！」

何か聞きたそうにしているが、とりあえずそれは後にしてもらおう。改めて、魔物達にの視線を向ける。

豚頭族 A

「お前達、何処から!？」

豚頭族 D

「おいこいつ、人間じゃないか？」

豚頭族 E

「もう一人は獣人みたいだ。」

今はスキルの『魔力操作』で覇気を抑えているので、人間に間違えているようだ。

リアル

「残念だが、俺はお前達と同じ魔物だぞ。」

豚頭族 A

「馬鹿を言うな！ どう見ても人間だろ！」

リアル

「ところで、お前達は何者で目的は何だ？ なんで彼女達を襲う？」

豚頭族 B

「われらは豚頭族、そしてそいつらは獲物だ。」

豚頭族 E

「そうだ！ そいつらを喰って力を得るのだ」

豚頭族 C

「貴様らも同様だ！ 我等の力となれ！」

こいつら言いたい放題だな。

できれば無益な戦いはしたくないが、この世界は弱肉強食、それがこの世界の唯一にして絶対のルール。

俺達の命を奪うというなら自衛のために戦おうじゃないか。

リアル

「つまり、お前達は俺達の敵、と言うことだな。」

葛乃葉

「ならば遠慮はいりませんね。」

豚頭族 A

「なに？ 貴様ら我等とやりあうつもりか？」

リアル

「当然さ、何故なら・・・俺達のほうがお前達より強いからな。」

豚頭族 A

「なんだとー！」

俺達の言葉に豚頭族達が怒りをあらわにする。

しかし、俺と葛乃葉は慌てることなくライドブックを取り出し起動する。

『ブレイブドラゴン』

『かつて、世界を滅ぼすほど偉大な力を手にした神獣がいた・・・』

『ジャアクドラゴン！』

『かつて、世界を包み込んだ暗闇を生んだのはたった一体の神獣だった・・・』

二冊のライドブックから物語の朗読が始まる。

俺はブレイブドラゴンをソードライバーにセットする。

葛乃葉は闇黒剣月闇にライドブックを読み込ませる。

『ジャアクリード！』

待機音が流れ、葛乃葉は予め渡しておいた『邪剣カリバードライバー』にセットする。

そして俺達はあの言葉を口にする。

リアル・葛乃葉

「変身！」

俺は火炎剣烈火をソードライバーから引き抜き、葛乃葉は闇黒剣月闇の柄でドライバーの上部のボタンを押す。

『烈火抜刀！』

『闇黒剣月闇！』

二つのライドブックが開き、赤い竜と紫の竜が出現する。

それぞれの竜が俺達の周囲を飛び回り、背後で止まる。

『Get go under conquer than get

keen.』(月光! 暗黒! 斬撃!)

『ブレイブドラゴン!』

『ジャアクドラゴン!』

背後の竜が炎に変わり、俺達に新たな姿をあたえる。

俺は、右肩に竜の頭を模したショルダーガードがあり、腕先までが赤色で、左側が黒色。

中央が白の配色で、頭部に剣の様な角があり、炎を模した仮面が現れ、腰の右側から赤いローブが出現する。

葛乃葉は、全身が紫色で胸と左肩、そして頭部の仮面にネジ留めされた銀色の鎧と兜が現れる。

さらに右肩には、竜の頭部に銀のマスクを付けたような鎧が出現し、俺同様腰の右側から紫のローブが出現する。

今この瞬間、炎の剣士と闇の剣士が出現した。

『烈火一冊! 勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く!』

『月闇翻訳! 光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に闇黒竜を支配する!』

豚頭族A

「な!?! 姿が変わった!」

リアル

「俺は、炎の剣士・セイバーだ。」

葛乃葉

「私は闇の剣士・カリバーです。」

桃色の美少女

「セイバー・・・カリバー・・・」

赤毛の美少女

「この方達はいったい?」

豚頭族達は俺と葛乃葉の変身に驚き、後ろの二人は俺達の変化に戸惑っているようだ。

豚頭族A

「怯むな! 同胞達よ、相手はたった二人だ。」

「姿を変えたところで」
言葉を発していたリーダー格の豚頭族は、最後まで言葉を発する事なく前向きに倒れた。

リーアル

「悪いな、隙だらけだぞ。」

俺が一瞬で間合いを詰めて、烈火で首を切り落としたからだ。

一瞬の出来事に、戸惑いと驚きを見せる。

葛乃葉

「この姿での実戦は初めてなんです、付き合ってもらいますよー！」

豚頭族達

「!!」

カリバーに変身した葛乃葉が、豚頭族の集団に接近し次々と聖剣で斬り伏せていく。

そこにセイバーに変身したリーアルも加わる。

勝敗はもはやあきらかだった。

豚頭族達は成すすべもなく倒れていく。

その光景を俺達の後ろにいる少女たちは、驚きの表情で見っていた。

ー少女 s i d e ー

私たちは夢でも見ているのでしょうか？

同胞達ですら数の暴力に敵わなかった豚頭族達が、目の前の剣士二人によって次々と葬られていく。

豚頭族達は武器を構えて応戦するが、剣士の二人は腰についている本のような物の見開きを押した。

『ブレイブドラゴン！』

『ジャアクドラゴン！』

すると赤い剣士の左腕に赤い炎が、紫の剣士の左腕には禍々しい紫の炎が出現する。

リーアル

『烈火紅蓮拳』！
れつかくれんしょう

葛乃葉

くろやみあんどくしやう

『月闇闇黒掌』！』

赤い炎が豚頭族に向かって飛び、接触すると爆発した。

紫の剣士は腕の炎で豚頭族に触れていく。

触れた個所から豚頭族の全身を包むように広がり燃やしてく。

そうして、残りの豚頭族が残りの豚頭族がついに二人だけになってしまう。

リアル

「退くというなら見逃してやる。」

「だが、まだやるというなら・・・斬るぞ。」

赤い剣士が警告するが、豚頭族達は。

豚頭族C

「調子に乗るなよ、人間風情が！」

豚頭族F

「貴様らを殺し、その力を奪い糧としてくれる！」

リアル

「そうか・・・」

赤い剣士はその場から動かずに、腰に付いている鞆の様な物に差し込む。

桃色の美少女

(・・・？ あの長さの剣がどうして?)

剣の長さに対して、腰に付いているそれは長さが足りないはずなのに、なぜか収まっている。

私がそう思っていると、赤い剣士は剣のグリップについている黒いでっぱりを右人差し指で押した。

『必殺読破！』

『烈火抜刀！ ドラゴン一冊斬り！』

『ファイヤー！』

リアル

『『火炎十字斬』！』

鞆の様な物から剣を抜くと、刀身に炎が宿る。

剣士が剣を振るうと、十字の炎を斬撃が豚頭族達に飛んで行った。二人の豚頭族はその斬撃に焼かれて消滅していった。

「リアル side」

葛乃葉

「威勢のわりに、たいした事ありませんでしたね。」

リアル

「そうだな。」

そう言つて俺と葛乃葉は変身を解除する。

しかし、あれだけの力の差を見せているにも関わらず、豚頭族達に一切恐怖していなかった。

殺されるその瞬間にもである。

さすがにこれは異常だと思う。

しかし、今のところ判断材料がなさ過ぎるので、今は深く考えないようにした。

イフリートと戦った後、炎を操作出来る様になったので、豚頭族達の遺体はもれなくすべて炎で焼いておいた。

桃色の美少女

「あの・・・」

安全だと分かったのか、先ほどの少女二人が近づいてきた。

桃色の美少女

「助けていただきありがとうございます。」

赤毛の美少女

「命を救っていただき、感謝します。」

リアル

「いや、気にしないで・・・っ！」

俺は桃色の髪の少女を見て言葉をなくしてしまった。

まるで雷でも落ちてきた様だ。

さつきチラツと見たとき、彼女達も魔物だということとは分かっていたが、改めて見ると本当に綺麗な美少女だった。

彼女の美しさに思わず見とれてしまった。

桃色の美少女

「? あの、どうかしました?」

葛乃葉

「リアル様?」

リアル

「え? . . . ああ、ごめん、なんでもない。」

「それより、怪我の治療をしないと。」

彼女達はそこらじゅうが傷だらけだった。

あの豚頭族達から逃げる際に怪我をしたのだろう。

幸いにも命に係わる程の大怪我はしていないようだ。

俺は無限収納から瓶に入った回復薬を出して、二人に渡した。

ちなみにこの瓶はガラスではなく土器である。

本来ならガラス容器に入れておくのが一番いいのだが、いまだにガ

ラスの生成まで手を付けていないのだ。

ガラス自体はすでにこの世界でも作られているので、材料と機材があればなんとかなるだろう。

回復薬を使用した彼女達は、その効果の高さに驚いていた。

赤毛の美少女

「何から何までありがとうございます。」

桃色の美少女

「このように効果の高い回復薬をいただけるなんて。」

「なんとお礼をすればよいか?」

リアル

「いいんだよ、俺達にしてみれば等しく手に入れられる代物だからな。」

桃色の美少女

「あの、力のある魔人様のようですが、あなたは一体?」

リアル

「ああ、そういえば自己紹介がまだだったな。」

俺は魔力操作を半分解除し、自身の本来の姿をさらす。

リアル

「俺はリアルルテンペスト。種族は聖龍だ。」

桃色の美少女

「聖龍？ 貴方は龍種なのですか!？」

リアルル

「実はそうなんだ。それでこつちが。」

葛乃葉

「はじめまして。 主のリアルル様より名を頂き葛乃葉と名乗っています。」

「以前は善狐族でした。」

赤毛の美少女

「善狐族と言えば、あの希少種族の？」

葛乃葉

「はい。今は進化して龍天狐という種族になりました。」

リアルル

「それで、君達は？」

こちらの自己紹介が終わったので、彼女達のことを聞いてみた。

桃色の美少女

「私は大鬼族オーガの姫です。 名はありません。」

赤毛の美少女

「私は姫の護衛の大鬼族の戦士です。 私も名前はありません。」

リアルル

（そうか、普通は名前は無いんだっけ。）

この世界では名前があるのは人間やごく一部の魔人や魔王くらいだとヴェルドラが言っていたような気がする。

そしてこの大鬼族の姫の出会いが、俺の将来に大きく影響する事になるとは、思ってもみなかった。

|||||

○葛乃葉

闇黒剣月闇に選ばれる。

仮面ライダーカリーバーへの変身が可能。

○大鬼族の姫

豚頭族に襲われていた大鬼族の姫。

武力はないが、大鬼族の中で珍しく魔法を使うことができる。

○大鬼族の姫の妹

大鬼族の姫を守る大鬼族の戦士であり、姫の妹。

姫の角は二本だが、彼女は五本の角がある。

しかし、彼女の角は前髪で隠れるくらい短い。

○ゴブカツ

いつの間にか小鬼英雄に進化していたゴブリンの一人。

リグルの強い勧めで狼鬼兵部隊の二番隊隊長に任命される。

チエスの腕はゴ布林たちの中では一番強い。

現在、自身の能力の確認中。

イメージはFGOの織田信勝です。

現在は第二段階の再臨状態に近い服装です。

大鬼族の襲撃

大鬼族の姫とその妹を保護した俺と葛乃葉は、日も落ちてきたのでキャンプをすることになった。

と言っても、その実態はライドブックの『俺様はキバである』の力で召喚した『キャツスルドラン』の城の中だ。

最初お姫様達はキャツスルドランの姿を見たとき竜と城が一体になった姿を見て姫様と妹は気絶してしまった。

目を覚ました時、いきなり城の中にいたため幻でも見たのか疑問に思っていたが、キャツスルドランも俺の能力の一部だと説明したら、いきなり頭を下げてきた。

どうやら俺をこの城の主と思ったのだろう。

本来は違うのだが、キャツスルドランの内部に入ったとき少しだが内部を見て回ったが、ガルル・バツシャー・ドツガの三人のファンガイアは見当たらなかった。

勿論、ザンバットソードも壁に突き刺さっていなかったし、その形跡も発見できなかった。

このキャツスルドランはブックで呼び出せる俺専用のキャツスルドランと言う事だろうか？

だとしたら、俺がキャツスルドランの主というのも間違っではないないのだろうか？

まあ、いざという時の拠点に使えるのでこれからお世話になりそうだ。

そして今は彼女達と一緒にダイニングルームで食事をしている。

料理をできるのが俺しかいないので、厨房で料理を作るのは俺の仕事だ。

できた料理は葛乃葉に運んでもらっている。

お姫様達も手伝うと言ってくれたが、彼女達はお客様なので寛いくわいでもらうことにした。

ちなみに食材はキャツスルドランの倉庫部屋に新鮮な野菜・肉・魚・

調味料などが保管されていたので、材料には困らなかった。

中身は全部俺の前世の世界の物だが。

メニューは

- ・ 豚肉と白菜としめじのスープ
- ・ ほうれん草とベーコンのソテー　　く半熟卵を絡めてく
- ・ 鮭のホイル焼き
- ・ 焼き厚揚げの餡かけ
- ・ 白米

以上である。

やはり元日本人としては米は外せない。

ほかの料理もなかなかうまく作れたと思う。

大鬼族の二人、そして葛乃葉は見たことがない料理に驚きつつ、俺が食べているところを見てゆっくりスープを口に運ぶと一瞬目を見開いて、目の前の料理を食べていった。

葛乃葉もおいしそうに食べている。

すると、二人は目から涙を流し始めた。

リアル

「?! 二人とも大丈夫か?」

大鬼族の姫

「うう・・・すみません、追われる身になってからこんなに暖かい食事を食べたのはひさしぶりで・・・」

姫の妹

「こんなにおいしい料理・・・久しぶりです。」

「ありがとうございます・・・ぐすつ・・・」

リアル・葛乃葉

「・・・」

彼女達は今まであの豚頭族達に追われていたみたいだし、満足に休むことすら出来なかったはず。

それを考えると、彼女達にとっては久しぶりのまともな食事だろう。

そんな彼女達を見ていると、満足するまでいっぱい食べてほしくな

る。

リアル

「まだあるから御代わりしていいぞ。」

大鬼族の姫

「いえそんな、これだけいただければ十分ですよ。」

大鬼族の姫様は顔を赤くしてそうやってきたが、彼女のすぐ隣から音が聞こえた。

姫の妹

「……………!!」／／／／／

どうやら彼女の腹の虫が成ったようだ。

見てみると、彼女の前の皿は全て空だった。

姫の妹

「す……すみません。」

大鬼族の姫

「もう、あなたは……」

葛乃葉

「フッフ、御代わりを持ってきますね。」

姫の妹

「はい……有難うございます。」

姫様の妹は普段から沢山食べるようだ。

そんな妹を見ていたからなのか、姫様の方も控えめにお腹が鳴った。

彼女も顔を赤くし、恥ずかしそうにうつむいてしまった。

結局姫様も御代わりをした。

食事のあと、彼女達がどうして豚頭族に襲われていたのかを聞いてみた。

そもそも豚頭族とは前世では、漫画や小説ではゴブリンなどと同じで最初当りに登場する、雑魚敵の分類だ。

『相棒』に聞いてみたが、豚頭族と大鬼族では強さの格が違い、格下の豚頭族が格上の大鬼族に戦いを仕掛けることなどまず無いのとこだ。

大鬼族の姫

「しかし、あの者達はやって来たのです。」

姫の妹

「はい。森を埋め尽くすほどの戦力で、私達の里は蹂躪されたのです。」

「そのせいで、私達は姉様と兄様そして数人の同胞と一緒に里を離れ、ここまで逃げてきたのですが……」

大鬼族の姫

「途中で追いつかれてしまい、お兄様とほかの同胞達は私とこの子を逃がすために囚になってくれたのです。」

姫の妹

「しかし、それでも数匹私達を追って来たみたいで、私も戦ったのですけど……」

リアル

「そんな時俺達が現れたと言う事か。」

彼女達の里を襲った豚頭族達もついさつき戦った豚頭族達と同じように、フルプレートアーマーを着込んでいたようだ。

豚頭族の総数は分からないが、全身鉄製の鎧を用意するなんて相当金がかかるはず。

そうになると、豚頭族だけで用意できるとは思えない。

そしてどうやら、彼女達は豚頭族の軍勢の中に仮面をつけた太った男を見たらしい。

姫の妹

「あの男は間違いなく上位魔人です。」

大鬼族の姫

「はい、間違いありません。」
なるほど。

つまり、あいつらに協力している誰かがいると言う事か。

その仮面の魔人は、どこかの魔王の手下とか？

葛乃葉

「豚頭族達はどこかの魔王の勢力に与くみしたと言う事なのでしょうか

？」

リアル

「まだわからないな。」

「ただ、一つ言えるのは俺達も他人事ではないと言う事だな。」

◇

食事を終えた俺達は、ひとまず姫様たち二人を個室に案内した。

そして俺はキャツスルドランの玉座の間に来ていた。

特に特別な理由は無いが、仮面ライダーキバを見た俺としてはこの玉座を見てやはり『座ってみたい。』と思ったのだ。

試しに座ってみると、流石玉座というだけあってただの椅子とは比べ物にならないくらい座り心地がいい。

勿論ほかにも理由がある。

リムルへの報告である。

俺はスキル『思念伝達』でリムルに繋げる。

リアル

『リムル、聞こえるか？』

リムル

『お！ リーアルか？』

『今お前と葛乃葉はどこにいるんだ？ 帰りが遅くて心配したんだぞ。』

どうやら心配させてしまったようだ。

悪いことをした。

リアル

『ああ、連絡が遅れて悪かったよ。』

『ただ、ちよつと厄介な事態に遭遇してな。』

リムル

『？ なにかあったのか？』

リアル

『実はな、大鬼族のお姫様とその妹を保護したから、明日街に連れて行

くな。』

リムル

『いや待て!? 何がどうしてそんな事になってるんだ?』

俺はリムルに経緯を話した。

リムル

『マジか・・・豚頭族が大鬼族の里を?』

リーアル

『ああ、おそらく本当だろう。』

『俺と葛乃葉も襲われたからな。』

リムル

『大丈夫だったか?』

リーアル

『問題なかったな。変身してたし、あいつら油断していたからな。』

しかし、あの豚頭族達が全く恐怖を感じていないのが気になる。

仲間の死に対しても、俺と葛乃葉に対しても。

あれは異常だったと思う。

リムル

『うくん・・・とにかく、それに関しては二人が戻ってきてから改めて会議を開こう。』

リーアル

『ああ、今はまだ住民には伝えない方がいいだろうな。』

リムル

『そうだな。道中気をつけて帰って来いよ。』

リーアル

『わかった。明日の昼頃には着くだろう。』

リムルへの報告を終えて、『思念伝達』に集中するために閉じていた眼を開けると。

リーアル

「おわ!？」

大鬼族の姫

「ひゃあー!」

目の前には大鬼族の姫様がいた。

「どうやら彼女は、俺を探してキャツスルドランの中を歩いていたらしい。」

「そしてこの玉座の間に入って来た時、俺を発見したが目を閉じて集中した様子で椅子に座っている俺を見て、声をかけにくかつたらしい。」

リアル

「それで、俺を探していたみたいだけど、どうかしたのか？」

大鬼族の姫

「はい……あの、その……」

リアル

「？」

よく見たら彼女は微かに体が震えている。

「恐らく夜になって今日までのことを思い出して、眠れなくなったのだろうか？」

「そんな彼女が見ている痛々しかったので、彼女に近づき手を頭に置いて優しく撫でてあげた。」

大鬼族の姫

「!? あ……あの、リアルさん？」

「彼女が落ち着くように撫で続ける。」

リアル

「大丈夫、すくなくとも今このキャツスルドランにいる内は君にも君の妹にも、危険は及ばないから。」

「君達は俺が守る。」

大鬼族の姫

「……!」

リアル

「それに、君のお兄さんもほかの同胞達も、必ず生きているはずだ。」
「君達を俺達の街に送り届けたら、行方を捜すために捜索隊を出すつもりだ。」

大鬼族の姫

「・・・リアルさん。」

リアル

「それに、今この場には俺達しかいないから無理する必要はないぞ。」
大鬼族の姫

「・・・！」

彼女はハツとなって俺の顔を見て来る。

俺は彼女の為に、優しく微笑んで彼女を見る。

大鬼族の姫

「・・・私は、大鬼族の姫で・・・」

リアル

「関係ないよ。 さつきも言ったが、今は俺達しかいないんだ。」

「辛いことも悲しいことも、吐き出してしまっただけいいんだ。」

大鬼族の姫

「・・・うっ！」

彼女は俺の胸に顔を埋めてきた。

声押し殺しながらも、彼女からすすり泣く様な声が聞こえてきた。

俺は彼女が落ち着くように優しく背中をさするのだった。

◇

大鬼族の姫

「すみません、洋服を汚してしまっただけ。」

リアル

「いや、かまわないよ。」

彼女も落ち着き、さつきまでの自分を思い出して顔を真っ赤にし、俺の服を涙で汚したことを謝ってきた。

そして、彼女を連れて部屋の前に戻って来たのだが。

姫の妹

「・・・来いやあああああ！」

リアル・大鬼族の姫

「……………」

姫の妹

「……………逃げるなあああ……………zzz」

実は姫様が俺の所に来たのは、これのせいでもあったのだ。

彼女の妹は、たまにこんな風にすごい寝言を叫ぶことがあるらしい。

そのせいで彼女は彼女専用の家が建てられることになったみたいだ。

リーアル

「なるほど、これじゃあ寝れないな。」

大鬼族の姫

「はい。 いったいどんな夢を見ているのやら。」

仕方ないので姫様を別の部屋に案内しようとしたのだが。

大鬼族の姫

「あの…………一緒にいていただけませんか？」／／／／／／

リーアル

「え?!…………いやいや、さすがにまずいだろ？」

今日会ったばかりの男女が同じ部屋に居るというのは、問題があると思う。

しかも相手は大鬼族のお姫様なのだ。

何か問題があれば彼女の生き残った同胞全てを敵に回すことになりかねない。

…………いや、何もしないぞ。

しかし、そんな心情の俺にはお構いなく彼女は。

大鬼族の姫

「お願いです。 今夜…………今夜だけでいいので…………」

リーアル

「…………」／／／／／／

彼女は上目遣いで俺を見て来た。

正直に言くと、かなドキドキしていた。

反則級の可愛さだ。

こんなことをされて断れる男がいるだろうか？

・・・いやいいない！（反語）

リアル

「・・・今夜だけだからな。」

大鬼族の姫

「・・・！ はい！」

リアル

（・・・今夜、眠れるか？ 俺・・・）

と言う訳で、彼女と同じ部屋で一夜を共にすることになった。

・・・いや、普通に寝ただけだぞ！

断じて、手を出していないからな！

という感じで、『誰に言い訳してんだこいつ』と思われるようなことを思いながら、夜は更けていったのだった。

◇

次の日

ーリムルsideー

シズ

「え?! 豚頭族が大鬼族に仕掛けてきた？」

リムル

「そうみたいなんだ。」

シズ

「・・・何かの間違いじゃないの？」

リムル

「リアルと葛乃葉が遭遇したみたいだから、本当だと思うよ。」

昨日リアルから連絡を受けた俺は、シズさんに相談していた。

シズさんは英雄級の冒険者だから当然豚頭族や大鬼族のことも知っている。

シズさんも最初は信じられなかったみたいだ。

リアルから報告を受けてから、『大賢者』さんにも相談したがやは

り本来ならあり得ない事らしい。

シズ

「リアルさん達は大丈夫なの？」

リムル

「ああ、問題なかったみたいだ。」

シズ

「そっか・・・よかった。」

それを聞いてシズさんも安心したようだ。

昼頃に帰ってくるみたいだから、俺はそれまでにやることをやって
おこうと思う。

これからヴェルドラが封印されていた洞窟にシズさんと一緒に行
こうとしたいなら、リグルドに会った。

リグルド

「お二人ともお出かけですか？」

リムル

「ああ、封印の洞窟目だな。」

「昼頃にはリアルと合流して帰ってくるから。」

リグルド

「わかりました。シズ殿もご一緒にですか？」

シズ

「うん。体を動かさないと鈍っちゃうかなね。」

するとリグルドは、『今夜も食事はいいのですか？』と言われたのだ
が、以前の俺なら『自分の分は用意しないでいいぞ。』と言っていただ
ろう。

しかし、今の俺はシズさんのお陰で人間の姿を手に入れた。

そのお陰で人間だったころの五感をすべて獲得する事が出来たの
だ。

つまり、俺も料理を食べるとき味を感じられるようになったと言う
事だ。

なので、今夜から自分も食べることにした。

それを聞いたリグルドは『今夜は宴会ですな！』と喜んでくれた。

リムル

(メニューは何かな?)

(肉かな? やっぱり肉が食いたいな。)

シズ

(リムルさん楽しそう。)

今日の食事のメニューに期待しながらシズさんと一緒に歩いてい
ると、リグル達狼鬼兵達が集まっていた。

リグル

「あ! リムル様。 シズ殿。」

リムル

「よう皆、 周辺警備と食料調達か?」

リグル

「はい、これから出発するところです。」

リムル

「そうか、 気をつけてな。」

「あと、今夜は宴会の予定だ。 旨そうな獲物を頼むぞ。」

ゴブタ

「リムル様も今夜は食べるっすか?」

リムル

「おうよ! この体には味覚があるからな。」

そう言っ
て俺がド
ヤ顔でい
ると。

ゴブタ

「・・・いっぱい食べたら、おっぱいも大きくなるっすかね?」

と言っ
てきたの
で、問
答無
用で
回し蹴
りを
食ら
わ
せ
て
や
っ
た。

吹き飛んだゴブタの代わりに、リグルが謝り『よく躡けておきます
ので。』と言っ
てきたの
で、この
件に
関
して
は
こ
れ
で
終
わ
り
に
し
た。

ゴブタ

「うううくく・・・」

ゴブカツ

「今のはお前が悪い。」

その代わりと言っ
ては何
だが、
リ
グ
ル
は
特
上
の
『うしか牛鹿』
を
用
意
す
る

と言ってきた。

リグルの話では最近森の奥から移動してくる魔獣が多く、獲物が多くて助かっているらしい。

魔獣は環境の変化で移動したりするから、一時的なものだと思うが一応警備を強化しているらしい。

俺は豚頭族の一件があるから警備隊に嵐牙を付けることにした。

俺が『思念伝達』で呼びかけると、俺の影の中から嵐牙が出てきた。

嵐牙

「お呼びでしょうか、主。」

リムル

「ああ、警備隊に同行してくれ。」

「もし何かあったら力を貸してやってくれ。」

嵐牙

「了解しました。遠慮はいらん、我を連れていけリグル殿。」

と、ものすごく格好よく見える嵐牙だが。

リムル

（その尻尾振りがなければ。）

シズ

（狼なのに、ワンちゃんみたい。）

◇

そんなこんなで、ヴェルドラが封印されていた洞窟にやってきた俺とシズさん。

シズ

「ここにあの『暴風竜ヴェルドラ』が封印されていたの？」

リムル

「ああ、そうだよ。」

シズ

「それで、今はリムルさんの『胃袋』の中にいるんだよね。」

「なんだかりムルさんとリアルさんの強さの一端を見たような気が

するよ。」

まあ、ヴェルドラとリアルとは、シズさんと同じ様に運命的な出会いをしたと思う。

さて、今回俺がここに来たのは自分のスキルの確認をするためだ。正直に言うと、俺は自分がどんなスキルを持っているのかしつかりと把握できていないのだ。

イフリートの戦いのときも、『フレアサーキル炎化爆獄陣』をくらったとき、終わったと思っただが、『ウツロウモノ熱変動耐性』のお陰で助かった。

あの戦いの後、俺はシズさんと魂の回廊が繋がったことで『大賢者』経由でシズさんのスキル『ウツロウモノ変質者』を解析し、コピーさせてもらったのだ。

能力は『統合』と『分離』だ。

これは異なる対象を一つの物へ変質させたり、対象に備わっている異なる性質を別のものとして分離する、という能力である。

シズさんはこの能力で、イフリートの暴走を抑えていたようだ。

一見扱いにくそうなこのスキルは、『大賢者』曰く、とても有用なスキルとのことだ。

大賢者

《このスキルは・スキルにも適応されます。》

と言っていたので、『大賢者』に任せてみたところ新しいスキルがポンポンと手に入った。

その一つが。

リムル

「……なにこれ、えげつない。」

シズ

「……うん。」

目の前には真っ黒な炎が見える。

これも獲得したスキルだ。

大賢者

《EXスキル・『黒炎』です。》

ちなみにこのスキルの対象になった俺の分身体(スライム体)は、何

事もなく生還していた。

分身体には『範囲結界』と各種耐性をリンクさせたことで獲得した『多重結界』を発動させていた。

シズ

「よかった、こっちのリムルさんも無事で。」

そう言っただけの分身体を抱きかかえ、頬ずりするシズさん。

何だろうか？

自分の分身なのにモヤモヤする。

最後にシズさんが付けていた仮面を複製し、着けてみたところわずかに漏れ出ていた魔素が抑えられ、完全に消失した。

この状態なら人間と認識されると、『大賢者』が言っていた。

リムル

「ふむ・・・元がシズさんの体だけあって、やっぱり似合ってるな。」

大賢者

《・・・はい。》

リムル

「・・・淡白だな。」

シズ

「ふくん、仮面をつけた私ってこんな感じなんだ。」

しかしそのとき。

嵐牙

『主！』

リムル

「!？」

大賢者

《告 個体名・嵐牙からの思念伝達を確認。》

《声音から・救援要請と推測。》

俺は洞窟の外に向かって駆け出す。

シズさんは急に走り出した俺に驚いて、慌てて走って追いついてくる。

魂の回廊をたどって、嵐牙達の元へ急ぐ。

暫く走ると金属同士がぶつかり合う音が聞こえてきた。

森を抜け広い場所に出ると、目に飛び込んできたのは倒れた警備隊所属のホブゴブリンとテンペストウルフ達だった。

その近くでは、白装束を身に纏った老人とゴブカツが戦っていた。しかし、圧倒的にゴブカツが劣勢だ。

ゴブリンの中では最高戦力のゴブカツが劣勢というのは意外だが。そして上空からは嵐牙の遠吠えが聞こえた。

見上げると黒と青の着物のような服を着た二人組と戦っていた。こちらはほぼ互角だろうか？

黒い方はともかく、青い方は結構強く感じる。

ゴブカツ

「ぐっ！」

ゴブカツの方を見ると、胸の部分を斬られたみたいでこっちに退いてきた。

よく見ると全身切り傷だらけだ。

リムル

「ゴブカツ！ 大丈夫か？」

シズ

「無事!？」

ゴブカツ

「リムル様！ シズ殿！」

リムル

「ほれ、回復薬だ。」

ゴブカツ

「有難うございます。」

ゴブカツに回復薬を渡し、回復させる。

リムル

「嵐牙、戻れ！」

俺がそう叫ぶと、嵐牙がこっちに戻ってくる。

嵐牙

「主よ、申し訳ありません。」

「我が付いていながら、このような・・・」
リムル

「いや気にするな。」

すると、一際大きな音が聞こえたのでそつちを見ると、メイス型のモーニングスターを振り回す女一人を相手に、リグルとゴブタが戦っていた。

しかし、女の方はかなり強く2対1なのにリグルとゴブタを圧倒していた。

リムル

「リグル！ ゴブタ！ お前達も退け！」

リグル・ゴブタ

「!!」

俺の声を聞いた二人が、俺のもとにまで下がってくる。

リグル

「リムル様・・・申し訳ありません。」

ゴブタ

「助かったっす！」

俺は回復薬を二人にぶっかけ、改めてみんなが戦っていた奴らを見た。

数は5人。全員差はあるが1本から2本の角がある。

こいつらも魔物か？

シズ

「・・・彼等は大鬼族みたいね。」

リムル

「え？ 大鬼族・・・あいつらが？」

シズ

「うん。・・・でも、私が知っている大鬼族とは少し違うけど。」

たしかに、俺の中の大鬼族のイメージとずいぶん違うな。

鎧みたいなのも着ているし、それに赤と青の大鬼族が手に持っているあれはどうみても日本刀だよな。

白い大鬼族の武器は杖の形をした仕込み刀だよな。

見た目も人間寄りだし。

リムル

(待てよ……もしかしてこいつらがリアルと言っていた大鬼族の生き残りか?)

「おい、お前ら！ 事情は知らんがうちの奴らが何か失礼をしたのか？」

「こつちの話し合いに応じる気はあるか？」

実力差は明らかなのに、警備隊の皆は無傷とはいかないが致命傷は与えられていない。

何か訳ありだろうか？

リムル

(とりあえず、リアルに連絡をして……)

赤毛の大鬼族

「正体を現せ！ 邪悪な魔人め！」

……はい？

俺のことか？

リムル

「おいちよつと待て！ 俺がなんだって？」

赤毛の大鬼族

「魔物使役するなど、普通の人間に出来る芸当ではあるまい。」

「見た目を偽り、^{オーラ}覇気を隠している様だが甘いわ！」

白装束の大鬼族

「正体を現すがいい！」

青髪の大鬼族

「黒幕から出て来てくれるとは、好都合というものの。」

リムル

(ガーン！ 俺の正体なんて、ただの愛くるしいスライムなのに。)

なんでこうも一方的に敵意を向けられないといけないのだろうか？

俺の本来の姿を見れば絶対癒されると思うんだけどな。

シズ

「あの、まず落ち着いて話を聞いてくれるかしら。」

白装束の大鬼族

(むっ！・・・あの女どこかで?)

赤毛の大鬼族

「黙れ！　すべてはその仮面が物語っておるわ！」

なに？

それって俺が付けているシズさんの仮面か？

リムル

「おい待てよ！　何か誤解してないか？」

シズ

「そうよ！　これは私が・・・」

赤毛の大鬼族

「黙れ！　同胞の無念、その億分の一でも貴様の首であがなってもらう。」

やばいな。

向こうは完全にやる気だ。

何とかして頭を冷やしてやらないと。

とりあえず、リアルに連絡しないといけないので、『思念伝達』で連絡を入れる。



ーリアルsideー

次の日の朝を迎えた俺達は、朝食をとり出発の準備に取り掛かっていた。

そのとき、リムルから『思念伝達』で連絡がきた。

リムル

『リアルちよっといいか。』

リアル

『リムル？　どうしたんだ？』

何やら慌てているようだ。

なにかあったのだろうか？

リムル

『今俺の目の前に大鬼族が5人いるんだ。』

リーアル

『なに！ 本当か？』

それが本当なら朗報だぞ。

姫様の同胞達が生き残っていたのだから。

リムル

『けどな、問題発生だ。』

リーアル

『え？』

リムルの話だと、リムルのことを邪悪な魔人と言って今にも戦いが始まってしまいそうだと言っている。

しかも、リムルが付けていたシズさんの仮面を見てさらに激怒しはじめたらしい。

俺は姫様と妹に事情を確認してみることにした。

リーアル

「姫様、朗報だ。」

「君達の仲間を俺の仲間が見つけたようだ。」

大鬼族の姫

「！ 本当ですか?!」

姫の妹

「あの！ その大鬼族の中に私と同じ赤い髪で目の下に血涙の様な傷跡のある者はいますか？」

リーアル

「ちよつと待ってくれ、確認してみる。」

リムルに確認してみると、その大鬼族は確かに目の前にいるようだ。

他にも紫の髪と黒い一本の角を持つ者。

青黒い髪と褐色の肌、白い一本の角を持つ者。

白髪の老人で、二本の角を持つ者。

大柄で黒い髪で、二本の角を持つ者。

計5人が目の前にいるようだ。

大鬼族の姫

「…… よかった……みんな無事だった。」

姫の妹

「はい！ よかった！」

リアル

「ただ、今にも攻撃されそうになっている様だぞ。」

大鬼族の姫

「え?! 何故そのような……」

リムルの現状を彼女達に話すと、二人は呆れたような顔をして。

大鬼族の姫

「もう、お兄様ったら……」

姫の妹

「まったく、相変わらず思い込みが激しいんだから。」

どうやら彼女達の兄は、良くも悪くも真つ直ぐな性格らしい。

そのお陰で思い込みが激しく、こうだと思ったらなかなか止まらな
いらしい。

頼りになる兄であり、大鬼族の次期頭領なのだがもう少し落ち着き
を持ってほしいと彼女達は思っているようだ。

リアル

『わかった。 そう言う事ならすぐにでもそちらに向かう。』

『しばらく時間を稼いでくれ。』

リムル

『ああ、わかった。 任せておけ。』

そう言っって『思念伝達』を解除した俺はキャッスルドランをブック
に戻した。

リアル

(リムルはともかく、他は絶対驚くからな。)

「よし、じゃあ君達を連れて俺の心友ダチがいる所まで案内するよ。」

大鬼族の姫

「はい！ すみませんお兄様の勘違いでこんなことに・・・」
リアル

「いや大丈夫さ。 リムルなら上手いことやるだろう。」

そう言っただけ俺は黄色いライドブックを取り出し、表紙を開いて起動した。

『ランプドアランジーナ！』

すると、俺の近くに空を飛ぶ魔法の絨毯が出現した。

大鬼族の姫

「きゃっ！」

姫の妹

「え!? 絨毯?」

俺は軽くジャンプして絨毯の上に乗る。

乗る時バランスが崩れそうになったが、落ちることは無かった。

リアル

「さあ、二人共乗ってくれ。」

そう言うと、小さめの絨毯で階段を作る。

小さくしたのは、姫様は着物を着ていたので、足を上げにくいだろうと思っただけの配慮である。

まず姫様が乗り、その次に妹が乗り恐る恐る絨毯に座る。

リアル

「大丈夫か?」

大鬼族の姫

「はい。 大丈夫です。」

姫の妹

「なんだか不思議な感じですね。」

リアル

「よし。 じゃあ出発するぞ！」

大鬼族の姫

「はい。 お願いします。」

俺がそう言うと、絨毯がそれへ飛び立ちリムルの所へ向かう。

リムルだから手加減はすると思うが、なるべく急ぐようにした。